

宮城学院女子大学日本文学会

日本文学ノート

二〇一二年七月
第四十七号(通卷六十九号)

二〇一二年七月
第四十七号(通卷六十九号)

宮城学院女子大学日本文学会

日本文学ノート

創作「完璧な水槽」

鷺尾 日香里

記憶は、淡い光のなかから始まる。

誰かが歌を口ずさんでいた。

可愛らしいメロディは、瞳子の意識を丁寧に愛撫する。

節に合わせて、瞳子の身体は揺りかごのように、ゆったりと揺れる。瞳子はまどろむ。白い色が視界いっぱいにはみ込んでいる。内側からほのかに光が差すような白さだった。手を伸ばすと、柔らかな何かは瞳子の手をすっぽりと包み込んだ。温かかった。

ここがどこなのか、この温度の主は誰なのか——いや、自分が誰なのかさえ、どうでもよかった。何の心配も要らない。全てを任せて無心に甘える。原初の記憶。

とうこ、おやすみ。穏やかな声が降ってくる。優しい香りにくるまれて、瞳子はまどろむ。

始まりの記憶はそこで途切れる。

次の記憶は、「おかあさん」だったものが別の生き物に変容したことを知った記憶だ。

それはいつも、時代錯誤な紅の襦袢をまとっている。

座敷の窓際にしどけなく座っているのを、瞳子は襖を細く開けて見ていた。毒々しい紅の袴袴の裾から、少女のように華奢な爪先がのぞいている。濡れ羽色の髪は無頓着に背中へ流したままなのに、ため息が出るほど美しかった。障子越しの陽ざしをうけて、その頬は白く光っている。袴袴の色が、目を刺す。血のように鮮烈な赤。けれど、真綿のように柔らかな陽ざしにくるまれてその姿は、上品な水彩画のようだった。

瞳子は恐る恐る襖を開けて、

「おかあ、さん……」

と、呼ぶ。すると、それは瞳子を見てにっこりした。たおやかな動きで左手を持ちあげる。紅の袖から覗く真っ白な手首は折れそうに細く、優雅だった。それは、魚の泳ぐさまを思わせるなめらかさで手のひらを上下に揺すった。おいで、おいで、と手招きしているつもりなのだろう。けれど、言葉をついではくれない。迷った末に、瞳子は襖をさらに開けて、おずおずと座敷に入った。それは、珍しく機嫌が良さそうだった。じいっと瞳子を見つめている。その瞳は黒目が異様に大きくて丸く、見つめられると落ち着かない気分になった。

一階の和室にはほとんど入ったことがない。物珍しさから、きよろきよろと室内を見回した。和室なのに欄間の透かし彫りや照明のデザインは洋風で、不思議な雰囲気だった。襖を背にして右手には押入れ、左手には障子が閉まったままの窓。正面に床の間がある。掛け軸や花瓶の類はない。そこには、金魚鉢が据えられてあった。瞳子がどうにか抱えられるくらい大きな大きさの金魚鉢だ。底に白い玉砂利がしきつめられ、新鮮な水がはつてある。緑の水草の間をすり抜けるように、そよりそよりと赤い金魚が泳いでいる。夏祭りの金魚すくいどつた金魚だ。

ふと、その頬が奇妙に動いていることに気付いた。小さな子どもが飴玉を転がすようにごろごろと蠢いている。はつとして、金魚鉢を見る。いち、に、さん……

四匹目が、いない。

「その赤い唇が、にやつと笑った。」

ごろりと重たい音がした。何かが落下した。瞳子は息を飲んで立ち竦む。丸々と太り、濡れた光で彩られた金魚がその膝の上でびちびち跳ねた。その動きがみるみる鈍くなっていくのから、瞳子は目を離せなかった。ふわ、と空気が動いた。生臭い、生き物の棲んでいる水の匂いがした。それは自分の膝の上で息絶えつつある魚を、目を細めて眺めている。

赤く熟れきった唇が、金魚の鱗のように濡れた光を放っていた。

*

いち、に、さん、し、ご、ろく……

空を突き刺すようにそびえ立つ高層ビルを見上げていると、不意に背中を叩かれた。

「何見てるの?」

瞳子は振り返る。服屋のショップバッグを大切に抱えた佳織が、不思議そうに瞳子を見ていた。

「……ううん、別に」

「お待たせー」

佳織の後ろから、知奈が顔を出す。彼女もまた同じショップバッグを片手に下げている。また暑さは続いているのに、ショップバッグは早くも秋らしいデザインになっている。

「気に入ったのが見つかって良かったね」

「うん。夏のセールでもいっぱい買っちゃったけど、やっぱり我慢できなくて」

「ほんと、大出費だよ。秋物ってなんでこんなに可愛いんだろ」

「瞳子は何も買わなくてよかったの? あのワンピースとか可愛かったじゃん」

「わたしにはちよつと可愛すぎるよ」

「えー、絶対似合うよお」

「似合う似合う、着てるところ見てみたいー」

女子高生らしく他愛ない会話を繰り広げながら、並んで雑踏を歩く。人込みの中には、他校の制服の姿もちらほら見える。暑さも手伝って制服はかなり着崩れて、遊びから勉強へシフトしきれていない雰囲気だ。夏休み明けの実力テストを終えたばかりだけれど、やはり皆まだ夏休み気分を引きずっているらしい。

少しずつ落ちてくる太陽が、半袖のセーラー服からのぞく腕をじりじりと焼いている。暑苦しく蒸れた風が、自動車の排気ガスと混ざって頬を撫でた。汗と、湿った香水と、食べものの匂いがごちゃ混ぜになつて息苦しかった。夏の人込みは苦手だ。会話の切れ目を狙つてこつそりため息を吐いたとき、佳織が顔を覗き込んできた。

「ね、どこかカフェにでも入つて涼んでいこうよ」

瞳子はちよつと考えるふりをしてから、

「んー、わたし、今日はいいや。夕食当番だからそろそろ帰らないと」

腕時計を覗き込んで、もつともらしく言う。あ、そうか、と佳織と知奈は思い出したように、目をばちくりさせた。

「そうだったよね、ごめん、連れ回しちゃつて」

「いいのいいの、楽しかったし」

「ていうか、ほんと瞳子えらいよねえ」

「全然えらくないよー。簡単なのしか作れないもん」

瞳子は、大げさに笑つて空気をほぐす。簡単なのつてどんなの？ えー、目玉焼きとか。それ夕ごはんじゃなくて朝ごはんじゃん！ どつと二人が笑い声をあげた。もちろん、瞳子も笑う。

「また買い物こようよ、気分転換に」

「あのワンピース、残つてるといいね」

駅の改札の前で二人と別れた。

ふ、と肩から力が抜けるのを感じた。スクールバッグから定期を取り出して、改札を通る。

電車を待つ間に、スカートのポケットから音楽プレイヤーを取り出した。少しずつ帰宅ラッシュの始まったホームは、主に同年代の高校生たちで騒がしい。瞳子は、一際高い笑いを上げる女子高生の塊から注意深く距離を取った。周囲の客が迷惑そうにしても、彼女は気付かない。まるで結界でも張られているようだ。

そろそろと息を吸って、吐く。

息を吸って、吐く。それだけのことに、瞳子は時々ひどく神経質になる。空気はたまに、急激に粘度を増して、滑らかな呼吸を妨げることがある。

生ぬるい風と共に、ホームへ電車が滑り込んできた。

家というものは、安息の場所だろうか。

瞳子はいつも、そう考えずにはいられない。

瞳子の家は、私鉄沿線の住宅街にある。どちらかというと富裕層の住む辺りだ。

白い壁に黒っぽい屋根、二階建てでシンプルモダンな外装の瞳子の家は、父が建てたものである。

瞳子の父は建築家だ。何とかいうオフィスのデザイナーだの、どこだかの大学の校舎の改修だの、住宅だけではなく色々な建物を造っている。有名なデザイナーの賞もいくつか受賞しているらしい。

瞳子はそれを、父の設計事務所のホームページを見た時に知った。そのページには父が手掛けた作品のリストがずらりと並んでいた。

よくこれだけ仕事をしたものだとは思えなかった。

瞳子は、ポケットから家の鍵を取り出す。鍵穴に差し込み、ゆっくり鍵を回して、開ける。ドアノブに手をかけて慎重に引く。細く開けてそこに自分の身体をすべりこませ、なるべく音を立てないようにしてドアを閉めた。素早く鍵を

かけ直す。

二階に辿りつくまで緊張は解けない。脱いだローファーを揃えて、気配を伺った。家の中はしんと静まりかえっている。スクールバッグを抱きしめ、足音を立てないようにしながら小走りで階段へ向かった。和室は見ないようにする。早く二階に行きたい。

「瞳子？」

階段の踊り場にさしかかったとき、上から影がさした。見上げると、兄の慧の顔があつた。慧は、白い手袋をはめた手を軽く振った。瞳子はほっと息を吐く。

階段を上がりきると、液晶テレビとソファセットが目飛び込んでくる。この家の主な生活空間は二階にある。リビングもキッチンもダイニングも、兄妹それぞれの寝室も二階だ。ただし、風呂場だけは一階だ。キッチンやトイレが二階なんだから、水周りは全部二階に揃えてしまえば良かったのと瞳子は思う。

「着替えてきなさい、瞳子。夕食にしよう」

慧が何でもないことのように言った。セーラー服のスカーフをゆるめていた瞳子はびっくりする。

「待って、今夜の当番わたしでしょ？」

「作っちゃった。瞳子、テスト明けだから外で遊んでくるかなと思つて」

「わたしはちゃんと作るつもりだったのに」

思わず声を荒げると、それを遮るように慧は柔らかに頷いた。

「それで早く帰ってきてくれたのか。ありがとう」

と、巷の女の子たちを夢中にさせているアイドルも霞むような微笑みを浮かべる。思いきり勢いを削がれてしまった瞳子は、その微笑を受け取りながら頷くしかなかった。

この世には鑑賞用の人間というものがある。と、瞳子は考えている。誰もがアイドル、タレント、俳優になれるわけではなくて、やはり大勢に見られるのに適した人間というカテゴリーの人種があるのだ。スーパーで売られている肉がカ

レー用、焼き肉用、しゃぶしゃぶ用と分かれているように。

「ほら、着替えておいで」

「はい」

瞳子はスクールバッグをぶんぶん振り回しながら自室に向かった。クローゼットを開け、ハンガーに制服を吊るす。部屋着に着替えながら、ぼんやりと考える。

慧は鑑賞用の人間だと、思う。

容姿は申し分なく、背もすなりと高い。身のこなしも、どこことなく洗練されている。

けれど、ただ鑑賞用とも言いきれない。

それは、彼が実用的な面を持っているからだ。

慧と瞳子の暮らしは彼の収入で成り立っている。慧の職業を、瞳子はよく知らない。慧から聞いたことと、彼の仕事環境など諸々の情報を総括すると、ウェブデザイナーのかたわらデイトレードをしているらしい。瞳子はパソコンも株取引もさっぱりだから、正直、説明されても分からない。ただ、株取引で利益を上げ続けるには、値動きへの洞察力と高レベルな判断力を要すると聞いたことがある。慧は頭の良い人なのだと思う。実用的な人間なのだ。

自分も同じくらいのレベルだったら良かった。瞳子は時々、そう考える。

瞳子を通う高校は、慧が通った県下一の進学校よりもワンランク下の高校だ。偏差値の差は片手の指で足りる。だが、それだけ慧から遠いのだと感じる。

クローゼットの内扉の鏡に映る自分と目が合う。

瞳子は慧に似ていた。ひとつひとつのパーツは違う。慧はやや垂れ目だが、瞳子は猫のような目。髪も、慧はふわふわだが瞳子のは硬くて真っ直ぐに伸びている。けれど、全体の雰囲気は、不気味なほどに同じだった。

慧が普通に出歩くことができていた頃までは、二人で外を歩くと決まって「お人形さんみたいな兄妹ね」と言われた。瞳子と慧は似ている。だが、慧と違って、瞳子はまだ実用的な人間ではない。瞳子は、密かに焦っている。

〔中略〕

夢を見た。

いつも見る夢だった。

瞳子は、街の中を歩いている。街、というテンプレートによって忠実に再現された、無個性な街だ。幅の広い三車線の道路と、整備された街路樹と、同じくよく整備された歩道。そして、道の両脇にビルが立ち並んでいる。銀行、デパート、喫茶店、そういった店が入った普通のビル。

けれど、この街には人がいない。生き物がいない。店の中は、霧がかかったようにぼんやりしていて、何かあるのかはつきり見えない。道路を走っている自動車は、何か得体のしれないものが運転している。瞳子の知っている、生きているものの気配は、無い。

瞳子は、不気味な街を黙々と歩き続ける。

探し物をしていいるからだ。

誰もいない街を歩きながら、ビルを見上げる。そして、慎重にそのビルの階数を数える。

何故だろうか。いくつかのビルをぼんやりと眺めると、目当てのものがあつた。ひとつずつ数えてみると、いつでも足りない。明らかに足りていそうなものでも、注意して見ると絶対に足りないのだった。

瞳子は繰り返して、街のビルを見上げ続ける。

数えている間はまた、生きていられる。

けれど、数え終わったら。そのときは……。

目を開ける。

遮光カーテンの隙間から朝陽が細く差し込んでいる。壁の、朝陽に照らされる位置に、丸いものがかかっていた。時計だ。七時、少し前。

瞳子はのろのろと起き上がった。何かが戻ってくる気配が、少しずつ全身に染みわたってくる。不気味な街から現実の朝へ帰還するときの感覚だ。

その後、帰宅してからのことを瞳子は反芻する。家の中では何事もなかったけれど、本はまだ一行も読めていないし、低気圧が近づいているのか鈍い頭痛が止まなかった。

進路希望調査票をまた書き忘れてしまったことに気付いたのは、朝のホームルームが終わったときだった。教卓に近づこうとしない瞳子を、奥山先生は何か言いたそうにじつと見ている。

帰りのホームルームまでに書かないとまた呼びだした。一限目の数学の教科書の上にプリントを広げ、瞳子はシャーペンをくるくる回す。結局、この紙について、慧とは何も話していない。

「あれ、砂川。それまだ出してなかったの」
机に影がさす。前の席の三上隆志だった。

「ああ、うん……うっかり」
「なんか意外。砂川って、そういうのいつもきっちり提出するのに」

三上は真っ白なプリントを無邪気に覗き込んだ。瞳子が曖昧に笑っていると、椅子ごとこちらを振り返って更に話を続ける。

「でも確かに迷うよな、進路はさ。俺もぎりぎりに出したし」
「三上くんはもう大学まで決めているの？」

「それはまだ絞りこめてないけど。学部までは決めてる」
「ふうん……何学部？」

「教育学部だよ。一応、将来もそっち方面にいきたいし」

よく似合うな、と頰杖をつきながら瞳子は思う。三上はサッカー部のエース、成績も先生からのうけも良いクラスの中心人物だ。いまは生徒会の書記を務めていて、間近に迫った生徒会長選挙に立候補するらしいという噂もある。教育学部という選択は「よくできた少年」のモデルケースのような彼にはびつたりに思えた。

「じゃあそれでいいや」

志望学部の欄に「教育学部」と書いた。我ながら似合わないと思うが、とにかくプリントの白い部分を埋められれば良かった。

プリントをぞんざいに机の中に放りこむ。てきとーすぎ、と三上が苦笑した。

本鈴が鳴った。クラスメイトたちは一斉に席に着き始める。

帰りのホームルームと掃除を終えた後、瞳子は奥山先生がいないのを見計らって、職員室の先生の机の上に進路希望調査票を置いてきた。学部も書いたし、これでもうしばらくは、何も言われないだろう。

図書室に立ち寄ったが、閲覧席を賑やかな集団が占拠していたので即座に回れ右をした。上靴の靴紐が緑色ということ、三年生だ。いまひとつ受験勉強に身が入らないのだろう。来年は我が身、と思うと憂鬱になる。瞳子は参考書も何も入っていないのに重たいバッグを抱えて昇降口を出た。

そのままぼんやりと歩く。気付くと、いつもの癖でつい市の図書館に来てしまった。

エレベーターホールに入る。

あの水槽は、まだ置いてあった。瞳子はおつかかなびつくり水槽を覗く。何事もなかったような顔をして、ザリガニが水に揺られていた。瞳子は無意識に止めていた息を、はあつと吐き出した。グッピーは一匹もいない。頭から食いちぎられて、半分になったやつも、もういなくなった。ぼんやり眺めていると、事務員らしい男性が書類を抱えながらエレベーターから降りてきた。男性は水槽を見つめる瞳子をちらりと一瞥して、そのまま去ってしまった。瞳子は、ぞくりと背筋が粟立ったのを感じた。

(気付いていない、のか……)

この水槽の中に恐ろしい殺人犯がいることを。

小さな命は、この密室の中で喰われてしまった。それを知っているのは、瞳子と、環だけだ。

瞳子は止まったままのエレベーターには乗らず、踵を返した。そのまま、昨日たどった道を歩き出す。

なるべくカウベルが鳴らないように、ゆっくりドアを開けた。だが、カウベルは瞳子の来訪を喜ぶように派手な音を立てた。瞳子は焦ったが、これだけ音が鳴ったというのに誰も出てこない。商売をする気があるのかないのか、それでもこの状況に幾分ほっとしつつ、恐る恐る店の中に入ってゆく。

並ぶ水槽たちを見て回る。水槽に貼られたプレートを見なければ名前が分からない魚ばかりだ。瞳子には、グッピーかエンゼルフィッシュ、メダカ、それに金魚くらいしか分からなかった。多くは熱帯魚らしい。いかにも魚らしい銀色から、茶色、黒、青、冗談のような赤やオレンジ色、不思議な縞模様のもので。これだけの水槽に囲まれていると、何だか自分まで水の中にいるように思えてくる。

しげしげと眺めていると、奥から誰かが出てきた。

「……あ」

「……いらつしやいませ」

レジカウンターの奥から姿を現したのは、環だった。瞳子は反射的に会釈する。

環は、黒のタンクトップに昨日も見えたネイビーブルーのエプロンをかけ、両手いっぱい箱をいくつも抱えていた。水槽の濾過装置らしかった。立ち尽くす瞳子をちらつと見やしたが、別段「何しに来た」とも「出て行け」とも言わずに、もくもくと商品を陳列し始めた。その背中に、微かな違和感を覚える。

タンクトップの隙間からちらつと妙なものが覗いた。

右肩に、引き攣れたような薄赤い痕があった。

火傷の痕だろうか。その傷痕はまるで羽根のように、黒いタンクトップの中から上腕の方へ描かれている。容易に触れられない雰囲気は激しく立ち昇っていて、瞳子は何も言えなくなった。そこへ、

「あれー？ 昨日の瞳子ちゃんだー」

元気な声が飛び込んできた。舜也だった。明るい金色の前髪を、まるで女子高生のようにヘアピンで留め上げている。いらっしやい、とにこにこ笑いかけてくる。

「あの……昨日は、ごめんさい」

「えっ？ 何が？」

「失礼なことをしてしまつて……」

「気にしてないよ。瞳子ちゃん、いい子だもん」

「え？」

舜也は優しく微笑んだ。すると、きゆうつとまなじりが下がって、途端に幼い顔になる。

「環から聞いた。ザリガニに喰われてたグッピーの心配してくれたんでしょ？ 悪い子のはずがないよ」

悪い子のはずがないよ、という言葉がじんわり胸に染みてゆく。前触れなく、ふわつとした何かが込み上げてきそう
で、瞳子は意識を逸らそうと、慌てて周りを見回した。

ひとつの水槽に目が止まる。ピロードのような質感の巨大な尾びれを持った魚が、大きめの水槽の中で悠々と泳いでいた。青いひれは、揺れると少し金属っぽい光沢も持っている。優雅にたゆたうさまは、ドレスを着た貴婦人のようだ。「あれはね、シヨーベタのハーフムーン。ターコイズブルーの個体。シヨーベタは色やひれの形にバリエーションがあるし、見栄えがいいから愛好家も多いんだ」

舜也が教えてくれた。なるほど、近くの水槽には同じ形でも赤いものや黒いもの、銀色のもの、体だけ青くひれは赤いものもいる。

「綺麗な魚ですね……」

水槽を眺めながら呟く。舜也は嬉しそうに頷いた。

「グッピー見てく？ カウンターにいるよ」

案内されるまま、店の奥の方へ進んでゆく。レジカウンターの上に昨日見た小さな水槽があった。よく見ると、グッピーの数が増えていた。四匹ほどがちよろちよろと、水草の隙間を泳いでいる。

「寂しくないように店の水槽からちよつと移したんだ。環がね」

そつと舜也が教えてくれる。瞳子は少しだけ、びっくりする。

「瞳子ちゃん、魚、嫌い？」

真剣な眼差しで問われて、瞳子は逡巡した。少し考え、目の前のグッピーを見て、首を横に振る。

「全部嫌いっていうわけでは、ないです」

その答えを聞いて、舜也は安堵のため息を吐いた。それからぱつと表情を変えて、

「あのね、環つてき、見た目ちよつと怖いかもしれないけど、いいやつなんだよ。つんけんしてるけど、仕事すつげえ真面目にやるし、俺も見た目はこんなんだけど、ぜんぜん怖くないし」

必死にたたみかける姿がおかしくて、瞳子は噴きだしてしまった。舜也は「あー……ごめん、話まとまってないよね」と呻きながら、ぐしゃぐしゃと頭をかく。

「だから、ええと、何が言いたいかつていうとね、いつでもこいつに会いに来てくれたらなつて」

こつん、とグッピーの水槽を軽く叩く。瞳子が頷くと、舜也は照れ臭そうにはにかんだ。

「じゃ、俺、外掃除の時間だから。ゆっくりしてつて」

カウンターの影からホウキとチリトリを取り出して、舜也は外に飛び出してゆく。その背中を見送つて、瞳子は水槽に目線を合わせるようにかがみこんだ。指先でガラスを撫でると、一匹がすいと寄ってきた。体色から何となく、図書館のグッピーかな、と思う。

「よかつたね……」

呟いたとき、背中に人の気配を感じて振り向いた。環が立っていた。ひつ、と悲鳴をあげそうになるのを何とかこらえる。しばしの、沈黙。

と、環がおもむろに何か差し出した。

「餌、やる？」

「……いいんですか」

「ん」

瞳子は、彼が手にしていた円筒状のプラスチックケースを受け取って、蓋を開けてみる。中には人工的に配合した飼料らしい粒が入っていた。ケースについていた小さなスプーンを使って餌をすくう。さつそく水槽の中へ入れようとしたとき、環の声が飛んだ。

「そんないつばい入れんな」

「えっ。多い？」

「多すぎ。入れているのは一回で食べきれれる量だけ」

スプーン山盛りにしていた餌を半分程度にしてみる。環が頷く。お許しが出た。

水槽にばらばら撒くと、すぐさま水草の中からグッピー達が出てきた。水面に広がる餌をひよいとばかり飲み込んでゆく。小さな口へ次々に吸い込まれてゆく様子が面白くて、瞳子はじつと見入った。

「……面白い？」

環が自分に訊ねたのだ、ということに気付くのに五秒ほど時間がかかった。

瞳子は慌てて環を見る。彼は腕を組んでグッピーを見ていた。

「面白い……です。生き物飼ったこと、ないから」

「ああ、そんな感じする」

環は瞳子の手から容器を取って、ばこんと蓋を閉める。

「魚、好きなんですか」

「好きだよ」

さらっと言い放つ、その拘らない、物怖じしない声色が清々しい。

「また、来てもいいですか」

環が振り向いた。瞳子はその射抜くような視線を受けて、あ、図々しかったかも、と焦る。

「いや、あの、邪魔ですよね。買ってもらえないのに」

切れ長の細い目でまっすぐ見られて、瞳子は理由もなく、緊張する。

「嫌いなんじゃないの。魚」

「……魚が嫌いっていうわけじゃなくて、あの……金魚だけ、苦手で」

金魚という言葉を口にするだけで、喉に鉛が詰め込まれたような気分になる。必死で唾をためて飲み込もうとしても飲み下せない塊のように、それは重苦しく、瞳子の内側に澱んだ。

俯いてしまった瞳子を見下ろしながら、環は言った。

「別に構わないけど。見るだけで帰る客も結構いるし、金魚だけいるわけでもないし。気が向いたらまた来れば」
環はそれだけ言つてカウンターを離れた。クロスを手には、アクリルの水槽を丁寧に拭いてゆく。

カウンターの上の水槽に目を戻す。水槽を撫でると、瞳子の小指ほどしかない魚たちが、すうっと集まってきた。飲み込めない塊が小さくなった感じが、ほんの少しだけ、する。

（後略）

田山花袋の自然主義

——『生』を中心に——

伊 狩 弘

1

日本の近代文学史において大きな影響力を持った文学思潮は自然主義文学とプロレタリア文学であるのはおおよその通説であろうが、いずれの思潮も明確な定義をすることは難しく、特に自然主義は写実主義文学の一部であるという以上の定義は出来ないのが実情ではないだろうか。しかし実際には、明治四十年前後の自然主義隆昌の時期には猷慾肯定思想や反体制思想などの危険思想のように見られるなど、自然主義と言えば下品な反社会的傾向だと思われ、自然主義や自然派の作家は墮落し不道德な低級な連中のように見られたのも事実だろう。欧州では文学上の主義傾向でしかないものが、日本では異常な過大の意味づけされ、或は多様な意味があるように曲解されたのは日本近代の未熟さと外来性の表れだが、もう一つ日本人の集団的熱中性、生真面目さのような性質もその一因ではないだろうか。田山花袋は島崎藤村とともに地方出身の生真面目な一途さで近代文学の基礎固めをなした作家である。とりわけ花袋は不器用な一途さを十分に發揮し、真面目な文学の土台を作った。しかしその理論と実作との間には説明しにくい乖離があり、また自然主義文学の闘將といった評価の一方で大正時代に入って少し経つと抒情文学に逆行りした観もあり、評価が定まらない。文学史を画期した『蒲団』にしてもその真相というか、花袋の本当の作意はどこにあったか、結論には達していない。そのように曖昧なところの多い花袋の自然主義の本質は何か、本稿で出来るだけそれに近づき、以て近代文学史に於ける花袋の意義をも探りたい。

『生』は明治四十一年四月十三日から七月十九日まで、『読売新聞』に連載された。同年四月七日から島崎藤村が『春』を『東京朝日新聞』に連載したのであるから、この年は所謂自然主義の最盛期である。『読売』の文芸欄は正宗白鳥が担当していた。『生』は執筆時期から丁度十年前の明治三十二年八月、花袋の母親田山てつが腸癌で死んだ顛末を書いたもので、いかにも自然主義文学と言うに相応しい素材である。『春』の方は周知のように藤村と透谷、佐藤輔子の交友を『文学界』同人群像を背景に書いたもので、いわば青春小説である。従って『生』は藤村では『家』に近い。『家』は明治四十三年一月から『読売新聞』に連載され、これを推薦したのはやはり白鳥であったが、白鳥はこの年五月に自然主義嫌いの新社長本野英吉郎に婉曲に退社させられたという。『家』は白鳥の『読売』在職最後の自然派連載小説だったわけで、以後『家』の続編たる『犠牲』は『中央公論』掲載となつて、『読売』には自然主義系の小説は跡を絶つた。自社が自然主義の牙城になるのを本野が嫌がったのも、おそらく自然主義に危険思想、反社会反道徳の実践者といつた先入観によるものだろう。白鳥がしばしば書いているように、自然主義作家は上流階級や社会的地位の高い人達からはまともにも相手にされず、その作物は風俗紊乱などの有害視が普通だった。明治四十年の雨声会もあつたが、大体は文士懐柔策であつた。そのような時代に花袋らは敢然と露悪的小説を書いたので、『生』も『家』も卑小陋劣な人間模様を爬羅剔抉した小説であるので、『小説神髓』にあるような「人の気格を高尚きかくになす事」をこれらの小説から得ることは容易ではない。『生』や『家』を読んで高邁な感想を得る者は予備知識や知的鍛錬の豊富な人で、大半の読者は頹廢的な無力感や人間への嫌悪感に捉われるのではないか。そういう小説を堂々と公に発信し続けたという意味で、自然主義作家たちはやはり芸術上の冒険と挑戦を為したのだと言つてよい。

さて、花袋は『生』の執筆直前に「自然主義の前途」(『新潮』明治41・3)と題する談話筆記で「少くとも此の自然主義の潮流が我が国現代の思想界に浸潤して、文壇は云ふ迄もなく、哲学界を震動し、ひいては行政上に迄其余沫を及ぼすやうになつたのは、ある深い動すことの出来ぬ根底が其下に横つて居る結果ではあるまいか。」と述べて、自然主義は文芸だけでなく政治社会にまで広がつて影響しているように言う。こういう背景にはある種の社会意識、社会主義までは行かないけれども、芸術や文学にも社会への配慮は必要だといった傾向が萌しつつかつたことは確かだ、花袋文

学のような俗世間俗人主義はそこに胚胎した。花袋は続いて次のように言う。

前途を見る事は過去を見る事である、つまり我國の自然主義が、如何なる径路を取つて来たかと云ふ事を仔細に吟味して見れば、直ちに解さるゝ問題だらうと思ふ。日本の自然主義が欧州の近代文芸の影響を受けて、今日に至る迄は随分曲りくねつた、いろ／＼の路を歩るいて来たもので、平凡主義が起つたかと思へば直ちに壊されて描写主義となり、又描写主義が倒れて簡人主義となり、遂に社会主義となつて、其の長所と云はず短所と云はず共に發展した。其結果は自意識の強烈な個性の鋭い人間を作り出して、作家は勉めて人生の真に触れようとし、旧道徳、旧習慣を打破して、個性を立てるようになった。斯かる自覚の上から自然主義が勃興して来たので、作家は自身を省み、内面的観察を主とし、主観的方面を極力開拓するやうになつた。

右の花袋の発言を見るに、「旧道徳、旧習慣を打破して、個性を立てる」ことが自然主義勃興の因で、同時にその個性を観察し開拓するのが自然主義の結果でもあるようだ。類ではなくて個を追求すること、「人生の真」に触れることが出来るというのである。これが平凡人の個別の人生を観察する理屈のようである。実はその見方は「主観的方面」の深化が必須で、花袋の自然主義は独特の主観主義の社会への応用敷衍という独自の型を持つようなのであるが、それについては後述したい。花袋は更に続けて、「自然派は無目的であると同時に無理想である。と云ふ事は何人に問はれても、矢張りさうであると云ふ迄の事で、無目的、無理想は如何に解釈しても同じく無目的、無理想であるのだ。私は此頃死と云ふ問題、つまり死に対する人間の用意、もし云ひ得るなら人が死の刹那に感じる意識とでも云ふべき事を研究して見たいと思つて居る。併し之は経験のないことで、一概にさうだとは云はれぬが、矢張り無理想、無目的であるだらうと思はれる。」と述べる。この辺りは、当時花袋が『兄』、『太陽』明治41・42など身内の死を扱つた小説を書いていたことと関連するだらうが、これなどは文学上の理念と人生の目的や理想の問題とを一緒くたにした議論で、「死と云ふ権威の前には、人間が立てた目的も理想も少しの抵抗力が無いではないか。」と言うけれども、それでは文学の営みも勿論自然主義という主義も全く意味がないことになる。花袋は文学の理念と人生観や人生観照とを混同しがちで論理が短絡的で乱暴のようだが、それだからこそ花袋文学の創造のダイナミズムがあり、また非近代的弱小の人間存

在の不合理で愚味な有り様が活写出来たと考えられる。

さてそのことについては後回しにして、この時代に反自然主義の立場をとつた後藤宙外の批判を見よう。宙外はもとも抱月や天外らと丁酉文社を作り『新著月刊』によつて『文芸俱樂部』『新小説』とともに文壇に鼎立していたが、『新著月刊』が裸体画事件によつて廃刊した後、『新小説』を忍月の後を受けて編集した。しかし抱月の帰朝以後、自然派の文壇専横を批判して、反自然主義の一翼を担いやがて笹川臨風らとともに文芸革新会を起した。宙外の「自然主義比較論」(『新小説』明治41・4)は自然主義の主張概要並びに賛同諸家の主張の異同等を綿密に正面切つて分析しており、また『生』と同時期の論で、花袋の自然主義を考える上で参考になる。宙外は冒頭の「主義何の用ぞ」で言う。

本来思想界に主義を標榜し、流派の別を樹てると言ふのは、単に他の耳目を聳動するに便であるとか、勢力をつくるの手段になるとか、体裁を飾るに都合が好いなど、云ふ為めに出来たものではあるまい。或系統ある思想を広く世に發表し宣伝するに方たり、その思想を他の者と混同せられ、誤認せらるゝを避くると共に、出来るだけ簡明に其の思想の特色を標示せんが為めに外ならぬであらう。然るに現今我が国の所謂自然主義又は自然派と称する者は、實際に於いて到底相容れざる数種以上の思想が、雑然として同一名目の中に苟合してゐる姿である。如斯きは主義の名あつて、主義の実なしと言はねばならぬ。流派の名目あつて、その実既に空しと見ねばならぬ。

このように宙外は自然主義を標榜する諸家の主張がまちまちで実体がないにもかかわらず、「遂この頃まで、彼等の態度といふものは実に傲慢不遜を極めたものであつて、有らゆる文壇の主義も流派も自然主義の下には馬前の塵であると云ふ風に、総べてを排斥し罵倒して、自然派に属せざる者は文士でない、自然派以外の作や論は三文の価値もないやうに豪語為た」と批判する。そして宙外は「無理想安住派(又は排理想欲求悲痛派)」として花袋を挙げ、前掲の花袋説を引用し、「田山氏のは仮に無理想、安住の自然主義と称して宜しからう。この立場から氏が常に唱へてゐる旧道德旧習慣を打破して個性を立てるといふ論は何うして出て来るのであらう。斯くの如きは確かに立派な一つの目的である。又自然主義を宣伝するのは君の文芸上の目的を貫く為めの努力ではないか。努力のあるところ無目的とは何うして言はれる。」云々と説く。このような花袋の矛盾に対する批判は花袋には痛撃のようだが、花袋は「自然主義の前途」の中で

無理想無目的に生きる、即ちデカダンの生活の人間とそれを観察する「理智性の人間」とを兼備してこそ芸術家たり得ると述べている。実行者と観察者を併せ持つ人間が芸術家だという。これは後の「芸術と実生活」論議や私小説論議に繋がるような議論で、文学上の難問である。従って花袋の無目的は宙外の言うような一切の無目的主義ではなく、人世は無目的だが芸術はそれを超えた意味のあるものだといふので、或る意味の芸術至上でもあり、葛西善蔵のような人間破滅の芸術主義のようでもある。しかし花袋は破滅的私小説作家ではなかつたので、説くところは現実味があまり感じられない。宙外の指摘は真つ当で、人生が無目的なら芸術だけがそれを免れるはずはないのだが、花袋を初め天弦や天溪らの言う無目的は厭世哲学のような無目的ではなく、現実直視主義程度の無目的なのであつた。つまり現実を素漠たるもので、どこにも理想などはない、社会も人間も皮めくると醜いといふごく当たり前の無目的なので、従つてその無目的から有目的に変化するのも自然で、花袋はやがて恋愛不滅主義「金剛不壊」に回帰した。花袋の自然主義理論は先に触れたように主観主義に支えられるところが大きく、その根本的理念はリアリズムやゾラ流の性欲や醜悪事実の暴露とは遠く、自己の主観に映じた現実の写実というものであつたと考えられるがそれについては後述したい。「自然主義比較論」は続いて岩野泡鳴を「排理想盲動力派」とし、島村抱月を「希求解決悲哀派」と名づけ片上天弦については「自殺的大矛盾」ありと道破した。確かに「未解決の人生」と言いながら「その悲哀、痛苦、醜悪、乃至疑惑を大胆に正直に表白」するというは論理的におかしいので、人生がどこまでも未解決なら悲哀醜悪かどうか判断つかないはずである。最後に生田長江を「折衷的寛容派」と断じた。宙外は前述したとおり、明治四十年四十二年に主に『新小説』に反自然主義の評論を多量に発表し、その主なものを『非自然主義』として四十一年九月に春陽堂から出版した。よく知られるように、花袋の『蒲団』は『新小説』に載つたわけで、それを収めた『花袋集』（明治41・3）を易風社から出したために春陽堂は版權訴訟を起こした。『生』を書いた頃（『東京の三十年』大正6・6）には「これは何でもG君などが、『田山は生意気だ。ひとついぢめてやれ。』といふ態度から出たものださうだが、私に取つては、『生』で心身を勞してゐる最中、尠なからざる大痛棒であつた。私は度々検事局に呼ばれて、小原検事などの取調を受けた。」とあるように、『新小説』を介した花袋と宙外の悶着は訴訟にまで行き着いた。

いま紹介した花袋・宙外の議論の前年にも、明治四十年八月の『太陽』に「現時の小説に就いて」という題でやはり宙外と花袋が書いている。こちらの方が簡潔である。宙外は現今の小説界に関して「第一、兎も角十年前以前から見たら、現今は比較的多数の作家が著く真面目な態度となり又自覚的となつて」いる。第二は「所謂自然主義の呼び声（きこ）に依りて小説壇に幾分清新の気を注入し得た功能のあつた」とはいうものの、「意匠無視、修辭無視の風」や「粗製乱造の弊」がある。第三には短篇が多く「自叙体」が多い。題材には「生活難、劣敗苦」が中心になつてゐる。そして宙外は所謂派閥の弊害を挙げ、「何れの派に属するも非常に優秀な作家が出れば確かに一代を風靡する。実力の前には理論なしである。此の点から考へると縦横自在主義が一番間違のないものらしい。」と自然主義の連中が狭い見で独善的になつてゐるのを批判している。文壇の派閥分けの弊はプロ文全盛の頃にも残存し、戦後にも一部あつたのは日本人的習性によるものだろう。

花袋は「単に面白いのを目的とした時代はもう過ぎ去りました。これからは時代に密接に触れた作品が多く出ると思ひます。」と言つて「触れる」作品の出現を予想する。さらに「其国の時代の描写」明治の今日ならば、私共が一緒に同じ空気を呼吸し、同じ地上を歩いて居る人間を活写するやうになつて、始めて小説と謂ふものゝ真面目な目的が達せらるゝこととせう。」と述べて凡俗主義を主張している。そして「日本の文芸は今迄余りに社会と人間に没交渉であつたと思ふ。」と現実の世の中、それは宙外の言う「生活難、劣敗苦」の世の中であり、人間であるわけだが、そのような面を描くべきだと言つてゐる。しかしながら花袋は社会性の強い文学、例えば藤村に於ける『破戒』のような小説は書けなかつた。「生活難、劣敗苦」に加えて醜悪な欲望の散りばめられた作品を量産したが、それは社会や人間の根本を剔抉するのでなく花袋流の解釈による世間や人間点描に終始したので深みがなく本質性に乏しい憾みがある。

2

これまでの多くの批評や研究に共通して、花袋作品は不徹底で感傷に流されるといった弱点が指摘されてきたように

思う。確かにそれは否定できない事実であろう。花袋文学を通見するに、花袋の世界は概して狭いことが言える。地域的にも狭く、『生』はほとんど早稲田喜久井町を離れないのだが、『田舎教師』の羽生と弥勒など地方を描いても広がりを感じられず、下層庶民の貧困の様子、主題的には死生問題と愛慾の迷妄が大半で、大正期の前半に『トコヨゴヨミ』、『早稲田文学』大正3・3)とか『山上の雷死』(『中央公論』大正7・10)のようなやや社会的なものや宗教的な作品が書かれたが、それほど重大な意味づけ位置付けは出来ない。小説の視点も概して低く、平凡人の平凡な感懐を余り出ない。これは花袋の思想や生活が平凡で秀でたところがないのか、小説技巧が拙劣なのかというところと決してそうではないと考えられる。藤村も『破戒』の時代から『春』にかけては随分文章に苦心し、『家』では後の回想にあるように花袋同様の観察主義に拘泥した。その挙句に深刻なデカダンに陥つて『新生』事件を招来したわけだが、花袋は藤村ほどラディカルな危機に遭遇しなかつたが、下積みの苦勞が長かつたために藤村以上に独自の文学スタイルの模索に腐心した。高踏な理屈と旧套な実作の径庭が甚だしく、自分なりの文学様式の確立に時間がかかった。その辺を確認すべく、少し遡つて『野の花』論争^④の花袋の主観と自然を見てみたい。この点については拙稿^⑤で少し触れたが再度花袋の論を整理検討したい。「作者の主観(野の花の批評につきて)」(『新声』明治34・8)の(二)から引用する。

写実主義、自然主義の十九世紀の欧州文壇に驚くべき偉功を奏したるは、明瞭なる事実にして、審美学の沈滞したるものは疏通し、倫理学の壅塞^{ようそく}せるものは活動し、狭隘なる理想は破られ、方針なき主観は捨てられ、只それ第一義のみ向つて急奔直下の趣を呈せり。是に於て詩人小説家は皆手を振つて、人性の真を描かんことをつとめ、それが為めにはあらゆる事物の醜汚なるもの、あらゆる人間の薄弱なるもの、或は人間の陽に慈にして陰に忍べるの状、或は己れ卑怯にして現社会を罵るの状、無思想の状、一々暴露し来つて、更に憚るところなき而已ならず、ゾラの如き、モーパッサンの如き、口これを言ひ筆これを記するに忍びざる人性の醜惡を描き、冷然として更らに聞かせざるがごとき風を為せる等、そのいかに大胆なりしかは、殆ど想像するにだも堪へざらんとす。而してこの獐^{ちやうあく}悪にして大胆なる写実主義と自然主義とは、全く客観的のものにして一点だも主観の面影を有せざるものなりしか。早稲田派の余風として今日吾国に行はるるところの柳浪氏天外氏、乃至はほとゝぎす一派の如き、所謂主観の

情を全く没却したる純写真実のものと同均しきか。
否とわれは叫ぶを躊躇せず。

右のように述べて花袋は、早稲田の逍遙のように「大自然の主観のほの見ゆるをさへ厭ふ」ようなのは欧州本来の自然主義ではなく、主観には「一を作者の主観と為し、他を大自然の主観と為す」という二通りがある。「この大自然の主観なるものは八面玲瓏礙るものなきこと恰もかの富岳の白雪の如くなると共に又よく作者の個人性の深所に潜みて、無限の驚くべき発展を為し、作者をしてよく冥想し、よく感動し、よく神来の境に入らしむ。作者の主観は概して抽象的なれど、大自然の主観は飽まで具象的に且冥搜めいそう的なり。作者の主観は多く類性のもを画くに止まれども、大自然の主観はさまざまなる傾向、主義、主張を容れて、しかもよくそれを具象的ならしむ。」と述べる。そして花袋流に言うに単なる客観描写は「前の自然主義」であり、「後の自然主義」（後自然主義）は「大自然の主観」によるもので、「一面より見れば楽天厭世両極観の一種の聯合とも言ふべく、一面より見れば自然主義と神秘主義の一致とも言ふべし。」ということになる。『野の花』は依然として稚拙であるが、花袋は右のような考えで文壇に立ちたいとも言つて、先の「自然主義の前途」と合わせて見るならば、あまり論理的ではないけれども花袋は「大自然の主観」と言われる世界の摂理のようなものに従つて制作する。それは客観描写ではなく主観描写で、根本は内面にあるものなのである。「作者の主観」とどう違うか、どうやつて「大自然の主観」を達成自得するのか、その辺りが曖昧であるが、ともかくそのように内面に深い根底を作つて、外面の事象を創作的に描くことが花袋の自然主義であると見てよいようだ。花袋がそのように考えるに到つた理由は、只単に客観的に描くだけなら内面の真実は表れず、高度な芸術性はないに等しいということだろう。そうした創作事情が働いて、花袋は多量の自然主義的作品を制作した。ところが肝心の花袋流の人生観が変化したために、大正中期ころからは再び金剛不壊の愛慾世界に回帰してしまつたと考えてよいのではないか。

『生』を読むときに問題となるチームが「皮剥の苦痛」と「平面描写」だろう。「皮剥の苦痛」は「インキ壺」（『文章世界』明治44・1、『卓上語』所収）にある言葉である。

芸術家の心理をモウパッサンは『水の上』に書いて居た。物に熱中されない心の苦悶、物を見てばかり居る神経

の糜爛、同じ人間でありながら、普通の人間のやうに動く事の出来ない畸形の人間――

『その受ける苦痛は皮剥の苦痛である。』

かういふ風に言つて居たと私は記憶してゐる。

この言葉はやがて『生』を書いた時分」で、『生』の題材に対する苦痛もかなり大きかつた。兄も嫂もまだ生きてゐたので、それに対する解剖も気がひけた。さういふ風に思つてゐたかと思はれるのも耻しかつた。多い親類の手前などもあつた。殊に死んだ母親に対する忌憚なき解剖が中でも一番私を苦しめた。母親に無限の同情を持ち、又無限の涙をそそいだ私だけに、一層辛かつた。モウパッサンの所謂『皮剥の苦痛』――さういふものを私は味はせられた。という具合に用いられた。この文章で言う、兄が生きているというのは花袋の思い違いで、実弥登は前年十一月に結核で死んで、それを『兄』に書いた。花袋にはいろいろの主観主義的な錯誤のような誤りがあつて、作為か無作為か判断しにくいところがあるがそれらはおそらく花袋の大きい主題、花袋コスモスとでも言うべきものに包含されるのだらう。

ここで藤村のモウパッサン受容を少し見ると、『新片町より』（明治42）に「モウパッサン」（『文章世界』明治42・4）と「モウパッサンの小説論」（『東京二六新聞』明治42・8・19、24）があり、前者は『モウパッサン全集』を買つた人は友達の中にも二三人ある。田山君も其の一人で、かねてブウルヂェの序文が面白いといふことは同君から聞いて居たので、不敢取私は斯の訳を読んで見た。」とあつて、「モウパッサンの文章が有するあらゆる自由と精緻と大胆とは、彼の心が示すリズムであつて、やがてまた彼の肉体全部の姿であらう。」とか「彼は獣の立場に居て、人を画いた。」とか述べている。後者は『ピエル・エ・ジャン』の巻頭にあるモウパッサンの小説論を馬場孤蝶が訳した「小説論」（『新潮』明治42・5）に拠つて説いたもので、『真、全き真の外は、何を我等に示さずと主張する写実派或は自然派』の出現というモウパッサンの言に触れて次のようにある。

モウパッサンは、斯の『真』を索めるといふことに就いて自分の意見を述べる前に、昨日の小説家と今日の小説家が如何に其見るところを異にして居るか、先づそれから説出して居る。今日の小説家は人生の皮相な写図を作つて満足して居るものではない。『稀有と見え得る事件の連鎖』のごときは、細心これを斥ける。手細工を捨ててゐる。

人を楽しましめようとか、人の感情に訴へようとか、左様いふ目的の為に物語を語るやうなことは、一切避ける。そして、深く隠れた事件の意義を考察する。『人生的確なる描写』を示さうとする小説家の目的は、是に他ならぬのである。『作家が、書中にそれを再現して、以て、われ等に伝へむと努むるは、此の一家の世間観に他ならず』である。この目的を遂げようとするには、事件を改めたり、面白くしたりする必要は無い。いかに人が愛し、憎み、闘ひ、或は撞衝するか、その有様を示せば可い。『此の如き作家の設計の巧妙とは、その作物の感情強き若くは美しきを謂ふに非ず、又、快心なる発端若くは駭神がいじんの結局を謂ふにも非ずして、全く作物の最後の目的の示す所の、小なれども尚ほ不易なる事件を、快的に集合せしめたるを謂ふなり。』斯う説いて居る。

右の引用に続いて藤村は、「田山君は、モウパッサンほど到る処に自然を発見した人はすくない、といふ意味のことを言はれた。深く隠れた事件の意義を考察するとは、即ち田山君の言ふ自然を発見するのである。」と述べる。このように藤村、花袋は、言うまでもないことだが、モウパッサンの文学や文学論にかなり影響されたのであるが、藤村は自分の理想に向つて時代の深層を掘り下げようとしたのに対して、花袋はもともと措定した「一家の世間観」即ち大自然の主観のようなものがあつて、社会や人間の諸側面をその鑄型に合わせて描き出した気味がある。そのため作品がステレオタイプに成り易い憾みがあつた。花袋は『野の花』序（明治34・6）や「露骨なる描写」（明治37・2）などがあるが、名で、「この露骨なる描写、大胆なる描写——即ち技巧論者が見て以て粗笨なり、支離滅裂なりとするところのものは、却つてわが文壇の進歩でもあり、また生命でもある」といつた勇ましい宣言があるので無技巧客観描写に徹底したと思われがちだが、目指したものは実は大自然の主観を根本に潜めた花袋流の世界観小説であつたようだ。だから花袋の自然主義文学を並べたものは、花袋が衝撃を受けたモウパッサンの短編集（『東京の三十年』に「十二冊の『短編集』」を手にした時の喜びを語るのが有名）を花袋流に準えたものと言つてよいようだが、前述したようにそれらはやや深みに欠ける。だがここで最大の問題は花袋の言う大自然の主観とは何で、若しくはどういう心境で、花袋自身がそれを会得したものか、したとすれば何時、どうやってしたかということ、明治四十年を基準にすれば花袋や藤村らは三十五歳であつて、世の中や人間について深く悟れるやうな年ではない。実際藤村は四十歳にしてこま子と過失を犯してパリに

逃避したわけで、花袋にしても年齢も人生経験も、日露戦争の従軍記者になったとはいへ、まだ浅かったことは否めない。大自然の主観（そういうものがあるとしても）を体得するような悟りの境地には遠い年齢であろう。「皮剥の苦痛」も、『生』で「忌憚なき解剖」をしたのかというところ、それほどでもないというのが適當だろう。死に瀕した姑と嫁の相克、家長としては腑甲斐ない長男、兄弟たち、その嫁などといったありふれた家族の死を巡る一幕物にも似た小説は、さほどの深刻な感じを与えない、『兄』方が深刻に感じられるのだ。それは次に挙げる同時代の批評家の発言にも認められる。

3

もちろんそうは言っても、『生』のように自分の家族の内実を曝け出す趣向は、花袋でなくては試みなかったと思われる、硯友社の小説、独歩、漱石その他の諸作など考えても明治文学に新機軸を打ち出したことは間違いない。「平面描写論」は波紋を齎したが、それはさておき事件は母親の死だけという『生』の評価はどうだったか、同時代の批評を少し見ると、「生」の合評^⑥（『読売新聞』明治卅一・一・一七）で岩野泡鳴は、「人生の面影がすらくと拵へた様な処がなく現はれて居る処は僕の感服する処」と言いつつも「此れと同時に欠点には人生の面影がすらくと拵はれては居るが、何処を見ても現れ方が単純すぎる様な感がある、尤も田山君は平面描写と云うて居るから、其の意見でやつたかも知れないが、余り有りふれた、余り平凡な、水で云へば平びつたい処ばかりが現れて居る」といった評価を示した。花袋は平凡な真実を真面目に書けばいいという信念で書いたものだろうが、確かに泡鳴の批評は当たっている。

柳田國男は「田山君の主義には反対ではあるが小説は平常読んでゐる」と云い、「枯葉の後から芽が芽ぐんで居るのは落すべからざる事実である、其れが全篇の楔子である如く予め中心点を拵らへてかゝつた事は明らかである、作者の態度は結構を超脱したとは云ふが広い意味の結構があつたのだ、此れを眞の自然主義の作品であると見るならば旧来の約束に服従せねばならぬ。」と云々と述べて、小説に虚構的な作為があるのは不徹底なのではないかと指摘した。花袋が

「聊かの主観を交へず、結構を加へず、たゞ客観の材料を材料として書き表はすと云ふ遣り方、それをやつて見やうと試みたのです。」と『生』に於ける試み（『早稲田文学』明治41・9）で語つたのはよく知られるが、『生』がその通りでないのも明白で、花袋の妻りさが作中で妊婦なのが作爲（又は錯覚）の最たるもので、実際のりさの妊娠はつての死後だつた。柳田の指摘は急所を衝いたものであるが、細かい事実関係の齟齬や不自然な作爲などよりもつと根本的に重大なものが作者にはあつたのだ。

蒲原有明は好評で「人間の生死の問題が能く能く描かれて居る」という点、「大波去つて小波来ると云ふ様に全体の調子が余程リズムツクになつて居る」という点を自然だと評価した。「リズムツク」であるのは、花袋が構えて生と死とを書き分けたので、本当は不自然のはずだが、有明は詩人的感覚で自然だと評したのでらう。水野葉舟は用語の点で少々注文があり「老母の一種の幻覚を見る処は読者が神秘的に感ずるには余り説明が足りない、亦抽象的の言葉が多い、読者をして感ぜしむるには此の抽象語の説明をもう少しせねばならぬと思ふ。」と言つ。この四氏の批評はそれぞれ肯綮に中ると言える。

『春』と『生』と（『早稲田文学』明治42・2）は、相馬御風、生方敏郎、服部嘉香、秋田雨雀、銀漢子（中村屋湖）がそれぞれ二作の感想を述べる。御風は『春』と『生』との読了後に残る感を比べて見ると、『春』は短篇小説を一つ読んだやうな感が残るし、『生』は短篇を幾つも読んだやうな気がする。」と述べる。生方は『生』は喜久井町の原の一軒家を舞台として始終動かず。人間は一族で種類に多少のバライエチーこそあれ銃之助の他は思想界の凡人だ。事件に波瀾も起伏もなくおまけに七くだい描写と来てゐる。故に『春』は何処迄も才人の作で『生』はどこ迄も不器用な人から生れたものだ。」といった感想で、いずれもそれなりに納得できる評言である。服部の『生』の欠点は余りにコムモン・デテールズのリアリズムに傾き過ぎた一事である。」という批評は、結局『生』のような凡人小説の限界を的確に言い当てたものである。花袋はより下層の人々の凄絶な生活や死に直面した人間の喘ぎも描いたのだから、死にゆく母親や家族の葛藤をもつと深く書いてもよいはずだが、全体的に浅く、平凡である。明治時代の下層旧土族の零落ぶり、後添いの嫁と姑の確執なども左程深刻さは感じられず、お桂の厚顔な様子は庶民の逞しい生命力を感じさせ、

最後にお米と取っ組み合いの喧嘩をする場面などは健康な女の肉体のエロティシズムすら感じられ、陰惨さは余りない。花袋の場合はどうしても「生の悲哀」といった作意が先走つてしまい、こうであったはずという観念が前に出る嫌がある。そこで感興を殺ぐというか、「コムモン・ディテールズのリアリズム」に拘つたわりに、特に会話部分が多いわりに、全体として衝迫力に乏しい憾みがある。『家』の宗蔵の痲疾、お種の執着心、三吉の姪への感乱などに比してみると軽い印象は否めない。

雨雀は『春』と『生』に哲学を求むる人があるならば必ず失望するであらう。なぜならば此二作の著者は哲学に見離された人で、然も哲学に見離された時代を書いたのだから。」と社会主義思想に傾いた人らしい感想を記した。『春』も『生』も明治人と明治の青春を描いた貴重な文学作品であるが、雨雀の言うように哲学とは無縁だし、藤村も花袋も学理肌作家ではなかった。銀漢子・星湖は『春』も『生』も作者の心持ちを一度十分に潜つた上で外へ出したものであるだけに、互ひに違つた特色を一層明らかに示してゐる。『春』はどうかすると堅苦しく緊張する。『生』はしなやかなところもあるが不揃ひにダラけて見える。『春』の作者の落ち着いて用心深いのと、『生』の作者の性急な不用心なのが目に立つ。」などと評した。「ダラけて」いたり、「不用心」だつたりするとの評は花袋の朴訥な大らかさを衝いたものとして適評である。

4

『生』は田山花袋の母親のてつと亡くなる前後の田山家の様子を綴つた小説で、小説の中の時間は明治三十二年五月に長兄実弥登が長坂とし（埼玉県北埼玉郡忍町おし五七四、現行田市）と三度目の結婚をした日から、母親の死んだ八月十九日（作中は十六日に死んだことになっている）までが中心で、その二年後のある日、長兄鎌の嫁のお桂、銚之助（花袋）の妻お梅（リサ）、弟の秀雄（富弥）の妻お光子（木村フサ）の三人が「九段の鈴木」写真館に行つて記念写真を撮つたという後日譚がエピソードである。そして新聞初出の（二）（六）は花袋一家が四谷区四谷内藤町から牛込区

喜久井町に引越した明治二十九年一月から兄の結婚までの三年半ほどを点描した作品のプロローグになっている。この間、花袋は藤村、独歩、玉茗、国男らとの交友が深まったが、文学上の成功は遠く、藤村が『若菜集』で一躍有名になったような活躍は出来なかった。しかし三十二年一月に玉茗の妹リサと結婚し、ちょうど藤村がその年の四月に、秦冬子と結婚したのと同様の行程を辿っていた。小説はこの一月と五月の二つの嫁取りを近所の銭湯で客同士が噂話を交わすところから始まる。このように小説的現在から一旦過去に戻って昔語りをし、再び現在に戻るといふ時間の配置は宮内俊介の指摘のように『蒲団』と同様である。宮内は同論考において二十項目くらい事実との食い違いを指摘しており、花袋妻の妊娠に関しては既に述べたが、母親の死亡日も含めてかなりの錯誤もしくは作為が見られる。花袋は明治四十一年頃は多作で、多い時は月に四、五編程度の小説などを発表した。また『生』は初めての新聞連載で毎日の原稿執筆に追われて、十分な下調べ、準備などが間に合わず、大体の記憶に頼ったのではないか。また生死無常、夢幻泡影のような作意を表現するためにことさら生者と死者とを対照的に描出したため、事実と異なる点が幾つか出来たと見られる。例えば「(四十三)」には「前の低い田畝を越した小学校からは、生徒の体操をする声が賑かに聞えて来る。」とあつて早稲田尋常小学校のことと思われるが、実際の早稲田尋常小学校の開校は明治三十三年五月で、てつが生前には存在しなかった。相馬庸郎の注釈に「病める老母、ぬきさしならぬ女の争い、骨肉の情のもつれ、地面にへばりついたような小さな家の暗い日々、これらすべてを相対化することく、この上なく明るく健康な学校の子供たちの声を配して効果的な結びとなつている。」とあるとおり、死にゆく老母と子供達の声という鮮やかな対照的光景であるが、実際にはなかったものだ。もう一箇所「(五十四)」には弘前から「ハ、オモイツゴウシテコイ」の電報で帰省したけれどもすぐに母の看病に飽きた秀雄が、「昨夜は少年の頃からの御馴染の寅毘沙の縁日に、草花をひやかにしに行つて、薔薇の鉢を一箇買つて来て、病人の枕元に置いた。けれど病人は顧みなかつた。」という条は、花袋が小説によく用いた神楽坂の賑わいと病人との対照の構図で、母親が元氣だったときはなんでもなかつた早稲田通りを歩いて江戸川橋通りの交差点にある交番から牛込郵便局までの道のり、「矢來の交番から郵便局までの間の路を歩くのが、不思議に思ふほど大儀」(二十三) という一節もあり、田山一家には神楽坂善国寺の縁日は思い出深かつた。しかし寅毘沙の縁日とし

て名高い祭りは正月、五月、九月の寅の日に行われるもので、秀雄の帰省したのは八月であるから縁日はなかったと考えられる。これも花袋の錯誤か、若しくは死にゆく病人と縁日の賑わいと対照を作為的に挿入したものでしょう。『一兵卒』でも死にゆく兵士が「神楽坂の夜の賑ひが眼に見える。美しい草花、雑誌店、新刊の書」などを思い出す場面があり、花袋はたびたび神楽坂の賑わいを演出に使った。

小説の出だしは、既述したように兄の婚礼を起点にして過去を振り返り、母親の不幸な履歴や嫂の離縁の経緯、次男花袋の空想的人生などが語られ、そこでのキーワードは「荒涼」「空想」であろう。『蒲団』でも「若い空想家」や「さびしい生活、荒涼たる生活」などは花袋の套言だった。

母親は其頃五十一二であつた。士族が禄を失つた維新前後の浮世の大波を被ぎながら、しかも早くから夫に別れて、難かしい舅姑の世話、多い子供等の教育、忍耐に忍耐した不満の情は今の時に及んで、一種険しい荒涼たる性格を形づくつた。望を懸けた子供等が一人は役所の下級官吏、一人は物の役に立ぬ空想家、一人の娘は田舎の貧しい機屋の妻君、(中略)。で、家庭の衝突は衝突を重ねて、初めの嫁は初児の産褥で倒れて了つた。

母の年齢にはやや問題があるうが、それはともかく、母の「荒涼たる性格」とは何であるか。確かに父銚十郎は西南戦争で亡くなり、長女いつは十八歳で嫁して二十五歳で亡くなった。が、穂弥太といくはさほど酷薄な嫁いびりをしたわけではなかつたようだし、二人共明治二十一年に亡くなって、その時てつはまた四十九歳で、この小説の時点からは十一年も昔である。では「荒涼」の性質は実弥登の不甲斐ないことや録弥が空想青年で稼ぎのないことなどによるのか。仮にそうだとしても、三男富弥は陸軍士官になり、かつよも元気でいたので、「荒涼たる性格」というには境遇からはいささか無理がある。苦勞の挙句に癌で斃れるのは哀れであるが、六十一歳まで生きたのは明治では長寿のほうである。しかし花袋は母親の「荒涼」の人生を兄録の無気力消極的の人生と並べて、人間はどう齷齪してみてもたいしたことはなく、銷磨衰耄して死ぬだけの運命だという「一家の世間観」を、まだそれに気付かない若い人達との対比に於いて描出せんとしたのである。「(三)」には、母にとって「自から呪ひ自から傷けた荒涼たる生活」の唯一の慰めは秀雄の軍人姿であり、日曜日ごとに帰宅する秀雄は「母親の荒涼たる心」を和ませるのみならず他の兄弟たちにとつても「淋し

い暗い家庭」の光明ともなつたとある。「生の荒涼から覚えた晩酌を母親はいつも遣るので、難かしい顔は既に赤くなつて居る。」(四)という一節もある。「(十五)」には「銚之助は荒涼たる家庭と母の性格とを思ひ遣つた。」とある。このように「荒涼」とか「淋しい暗い」という修飾語を多用すると小説は次第に観念的趣を強める。どうして「荒涼」なのか、なぜ「淋しい暗い家庭」なのか、晩酌する寡婦は「荒涼」ではないのではないか、といった感想が募つてくる。つまり花袋の、人生はしよせん荒涼たるものなのだという主観が前面に出て、小説自体がそれに対応しないところがある。これは兄の録についても言える。

総領の兄の名は録。明治十八年頃の書生からの生立で、下級官吏の生活と貧しい家の事情とが若い頃の功名の念をも銷磨し尽したといふ風。座敷にある古書籍ふるほんばこの中の漢学、国学、歴史学の数多い書籍は、明かに其人の半生を語つて居た。(中略)早くして父を喪つた兄弟ふたなりは此兄を師とも父とも頼んだのである。であるのに、一度世よの中の実際に触れて、氷の如く解け去つた其理想、其精神！(六)

右のように兄の輪郭を象つた後、「余りにその腑甲斐のない」人生を嘆き、それくらいなら「いつそ今の中に自殺」する方がよいとまで思つたというけれども、これも花袋の独特の主観を出そうとするあまりに筆が走り過ぎたものだろう。兄実弥登は確かに『兄』や後の『時は過ぎゆく』に書かれた通り、結婚や仕事に躓いた果てに病死する敗残の人生ではあつたが、だからといつてすぐに死ぬほうがいいとは言えない。花袋や富弥はこの兄に縋つていた面もある。しかし花袋によればこの世は生きるに値するほどのものはないので、人はそれに気付かないだけである。そうした作意に沿つて「荒涼たる性格」の母、無気力で好人物の兄、空想家の銚之助、陽気で物に無頓着の弟、といった型にはまつた人物が形象されたため、小説が全体的に単調で深みのないものになり、「自殺」するほうがよいというような短絡的で極端な感懐の吐露になつたと考えられる。

その後書かれるものは、病気の母と嫂お桂との確執、病勢が重るなかでの母親の回想、それは山形の高揃陣屋に居た頃のこと、東京に出てすぐに夫が戦死したこと、録の最初の嫁(とみ)が子癩で死んだこと、それは「此身が酷め殺したやうなものだ。かう思ふと神経がプリ／＼する。」という辺りの母の述懐はさすがに因業な姑の嫁いじめの感じが出

ているが、とみは横田良太とまさの娘で、まさは鉤十郎の妹である（『時は過ぎゆく』のおかね）。てつにとつても義理の姪に当たったので、それほどいじめたものか、少し疑わしい。その後のお桂の厚顔な様子、相変わらず兄の優柔不断、お米とお桂の確執などは確かに平面描写的で、喜久井町の家の内外で、何人かの家族のやりとりが文字通りだらだらと続く。

やがてお米もやって来て、お桂とのいさかいが始まる。これも小姑根性のお米と嫁の衝突、お米の貧苦な下層民の抑えがたい憂悶の情で、さしたる特色はない。また銃之助の心中は、「初めは母の苦痛に対する同情の念が湧くが如くに漲つたが、やがてそれは其苦痛に対する不快の念と変つた。唸声——腸を断つやうな断続した唸声が今でも耳に附く。」（三十八）とあり、この辺りから次第に母への憐憫の情に代つて不快感が先に立つようになるわけだが、健康者が病人を不快に思うのは自然の成り行きで、皮剥とまでは言えない。また、母の依怙地な我儘も募る一方で、お米の来たばかりには喜んだものの、お米の赤ん坊が煩いので『喧しい餓鬼だ。お米をもう帰してさへ』とか、お米が五カ月身持ちなのを見ると『本当に人間の屑だ。満足に育てることも出来ないで、餓鬼ばかり産むなら犬猫でもする』などと罵倒したという具合に、病人と周囲の人間との衝突が強まる。鏝に対する『女房と寝るばかりが能ぢやあるまい。親がかうして苦しんで居るのを、知らずに寝て居て、それで孔子様に濟むか。』（四十四）という悪態は、衰耄していても若夫婦に嫉妬する女の業が出た自然主義らしい正しく皮剥的筆遣いで、親が死にそうなのに自分たちの性欲を満たすことが大事かといったふうに読める。実はこの辺の母の怒罵は花袋の誇張もありそうだが、しかし花袋はそこまでの房事の意味で書いたのではなく、夫婦が惰眠を食つてろくろく看病しないという意味のつもりだったろう。花袋は『蒲団』で性欲という言葉を何回か使つたので、露骨な描写をしたように誤解されるかもしれないが、事實は抒情的観念的な叙述が殆どで正しく空想作家であつた。房事を露骨に臭わすこととはしない。

懐妊したお梅に前々に準備した「襦袢」や「襪」をやり、お梅は足を摩る。母の足はもう「早蚤の足のやうに細く」なつて（四十六）。『生』の直前に執筆した『兄』でも、冒頭で兄の埋葬をした時のこと、「棺の中には、襪の古葉を入れた無数の紙袋が死屍を埋めて、其処にあの蒼い痩せかけた顔、いなごのやうに細くなつた腕、穩かに閉ぢた眼

があるのだ。」という一節がある。死は「ザツツオウル」だという名文句を編み出した『兄』においても花袋は瘦せた手をいなごの足に譬えた。人間と虫と、さほど違わないかのように。それはともかく、お梅の懐妊、初めは喜んだ母はやがて「一種の冷たい情が病人の胸に萌し」た。お梅の看病も気に入らなくなる。そして銚之助は次のように思った。

銚之助の多感な胸では、妻が懐妊したといふことが何だか不道德な罪悪のやうな気がせぬでもなかつた。昔は親の喪三年の間、夫婦は室を異にしたといふことがある。親を傷むの情しかあるべきことである。古い支那の道德の教が不思議にも新しく銚之助の胸に反響した。

このように銚之助つまり花袋は思ったという。が、既述したとおり花袋長女礼の誕生は三十三年十月であるから母親の生前に妊娠の事実はなかつたと考えられる。とすれば、襦袢を呉れたとか妊婦を嫌悪したとか、一切は死にゆくものと生れるものとの対照の為の創作だったことになる。もう一つ、弘前の第八師団歩兵三十一聯隊勤務の秀雄と恋人光子がある。帰省の際『もう自分のものだ!』と度々思うことからして、既に光子との肉体関係が結ばれたことを示す。ここに鎌とお桂、妊婦のお米とお梅、秀雄の愛人関係があつて、死を待つ者と新たな生命を作らんとする者という対照が整った。花袋は実際にはなかつた筈の妻の妊娠を書き加え、また秀雄と光子の肉体関係が既にあり(それも恐らくは花袋の創作だろう)その結果は後日談的に弘前でゴシップに発展するわけだが、そういう末節的關係まで盛り沢山に書き込んで、何を意図したのか。それは死ぬ者があれば生れる者もあるといったことではなく、希望あるように見える若夫婦も新たに生れる者も結局はバツタのようになつて死ぬのだという大自然の主觀の理法を自分の家族に当て嵌めて示すことだつたのではないか。だから妻の妊娠の時期をずらして、作為を加えたことは決して作為ではなく、芸術の要諦の求めるところだつた。空想家であるがために現実の埒外に生存の根柢を持つ銚之助、花袋だけが自然の理法を芸術化する特権者であり、こうした作為はそのしからしむるところなのである。

花袋は右の要請に従つて炎暑の最中に病臥した母の褥瘡の臭気や差し込み便器の様子まで、これは皮剥の苦痛と言つてもよいくらいに書いた。「さらでだに不潔になり易い夏である。さらでだに臭気の鼻に付き易い時である。汗と垢と物の腐る臭とがこの乾いたわびしい一間に満ちた。誰の頭脳にも、此の不愉快の光景とこの垂死の病人とが片時も映らぬ時はなかつた。けれども大恩ある母親としてゝはなかつた。寧ろ死を待たるゝ一箇の病人として、また滅び行く不愉快なる一塊物として。」と書く。これは母てつの死際が特に醜悪であつたという意味ではない。人間は等しくこの母のように無残に死ぬという哲理を花袋は小説に示したのである。『兄』では「生と死以外、生から死に行く途中に、生でもなく死でもない境があると僕は思ふ。生の希望のあるうちは、病者は血の通ふ同類として、充分なる取扱を受けるが、一度生の希望が絶えると、もう同類としての扱ひを人間から受けることが出来なくなる。死を宣告された人間は厳密なる意味でもう人間の伍伴には入れられて居らないのだ。人間として無能力者たるの取扱ひを受けねばならぬのである。この生にあらず死にあらざる境を、誰も一度は経なければならぬと思ふと、著るしい人生の空虚を僕は感ずる。」と書いた。そして兄の臨終の瞬間、『もう行つた。』などの声と共に起る称名や歎歎の音、それらに対して花袋は「何の甲斐がある。愚なる人間！」と書き付けた。垂死の母も同様に「一塊物」であつて人間の仲間ではないのだ。花袋自身は若松町、弁天町と牛込区をあちこちと引つ越し三十九年には当時としては珍しく代々木に住宅を建てて住んだが、喜久井町の家での明治三十二年夏の母親の死と、四十年秋の実弥登の死とをこうして次々に小説化し、人生は誰しも空しく甲斐のないという世の中根本の真実、そして人間の卑小を小説家の務めとして芸術的真実として描き出した。『生』では母親の死を想像して次のように思つた。

銚之助には殊に其想像が強かつた。垂死の一塊物に対する不愉快の情と、不幸なる母親の一生の運命に同情する心と、自己の将来に於ける不安の念と、この三つが一緒になつて、常に凄じい波を挙げた。兄弟の中、銚之助が一番頼りの無い心細い境遇である。それはお米も心細い。不安である。けれどお米にしろ、主人にしろ、秀雄にしろ、世間に触れて、世と共に浮び且つ沈み得る人間である。世は世に触れた人間を捨て、了ふことは滅多に無い。銚之助は文学を天職とした其身の苦痛を今更のやうに辛く覺えたのである。(五十三)

右の一節、特に「世は世に触れた」云々は甚だ分りにくい、要するに鎌や秀雄らは世の中の内部にあり世の中とも推移する存在で、哲学的に言えば即自的存在である。生死の苦樂、生存の苦樂も對自的に捉えることはない。觀察も大自然の主觀も無縁である。しかし大袈裟に言えば芸術のデーモンに憑かれた花袋、銚之助は悲しい時にも悲しめず、嬉しい時も樂しめない。世から捨てられた存在だといふのである。ここに花袋の芸術創作の根本がある。それは一面では花袋の独りよがりの空想、正規の学問のない大凡人花袋の素人的理屈であるようだが、硯友社の傘下に出立し真面目な文学とは何かを必死に模索した花袋には大切な芸術要諦であり、狭斜花柳文学ではなく人生文学を紡ぎ出すための精神的立脚点だったように思われるし、漱石や鷗外等とは違つて文字通り徒手独力で擲んだ文学の神髓だつたと思われる。

三男の秀雄は弘前から来たけれども初めから自分の愛人のことで頭がいっぱいで母親には関心がないと描かれる。汽車に乗っている間も「秀雄の胸は愉快で、穩かで、そしてのんびりして居た。自ら不思議に思ふ程母親のことを考へて居ない。」(五十)といふのも、光子を得た喜びのためである。しかし士官たるものが下宿先の娘と軽々しく情を通ずるとは思いつらい。先にも触れたがこれも花袋の創作ではないか。三人の息子はそれぞれに伴侶を得て未來に希望を持っている。しかしそれは儂い夢であることを花袋は精一杯強調的に書いた。母親は最期が迫つて「をりく便の催すのをさし込の便器で取つた。(中略)瘦せこけた脚を二本立てさせて、便器を其処に挿込むやうにするのである。」(五十五)といふような汚物の処理まで書く。これも自然主義だから書けたもので、花袋の功績ではないだろうか。銚之助が夜伽をしていると家の近くの小川に「今しこの闇の夜に、恰も其の小川の辺を水鶏がごとくと鳴く。」ので外へ出て見る。銚之助はいつも母に同情し、一生の徑路を考えたりするのだが、「今宵は何故か母親の死が人類一般の死と相聯繫して居て、人間は何うせ一度は死ななければならぬといふやうな儂ない悲哀がひしと胸に迫つた。」のである。そして次のように思うところが花袋小説の真骨頂だと思われる。

銚之助の眼には草の生えた墓が見えた。生れたばかりの赤兒と白髪の老人と死に瀕した母親とが続いて眼前を通り過ぎた。と、深い深い生の悲哀が其多感多情の胸を抉つて、熱い涙がほろくくと頬から落ちた。

かうした感を渠は久しく起したことはなかつた、空想の境から實際の人生に入つた身には、さういふ悲哀は要す

るに粧飾まうしやくである、絵具ゑのぐである。絵具が糧かゝにならぬのは渠自身にもよく解つて居る。けれど今はもう堪らなくなつたのだ。(五十六)

銃之助の見た赤児と老人と母は等しく墓に向う存在で、それは鎌、銃之助、秀雄そして彼等の配偶者や子供達の姿でもあろう。それは嘆くべきことでない、芸術家はそれを描きつくす義務がある。だから本来は悲哀の涙は無意味不要であるはずだが、この際、芸術家の本分を逸脱して涙が出たというのだ。しかし銃之助とそれを描く花袋とは本来別物であるべきで、花袋は銃之助をも冷酷に観察すればよいので、母が死にそうなので泣いたというのは当然のことだから「粧飾」だとかの注釈は余計である。「人類一般の死と相聯関」するということのように思えるなら、強いて泣く必要はない。その辺が曖昧なので小説の勘所がぼけてしまった憾みがあるが、さて、そうするうちにお桂が慌てて呼びに来た。『今、母親おつかんが怖い眼をして、讒言ざんげんを仰しやるんですがね』と言う。母は和尚様が迎えにきたというような讒言を言う。死に瀕した年寄が讒言を言うという趣向は、直前に発表した『祖父父母』(『中央公論』明治41・4)にもある。盲目の祖母を甲斐甲斐しく世話した祖父は、厳しいところもあり、父親が東京に出て警視庁に勤めたのも気難しい祖父を避ける意味もあつたという。父が西南戦争で戦死した後は、「故郷での八年、これは比較的平和であつた。子に先立たれた祖父、夫に取残された母、二人とも気が勝つて、正直で、負け嫌ひではあるが、悲しい淋しい同じ境遇が却つて相剋せる二人の性質を融和させた。父の死が二十五年来相容れなかつた祖父と母との心をいっにした。私等が物心の附いてからは、祖父は氣丈きぢやうでそして優しい好い老人であつた。」とあるように祖父の穂弥太は盲目の祖母いくを介護し、てつとも円満に暮らしていたようだ。穂弥太やいくの亡くなつたのは上京後の明治二十一年であるが、花袋は館林で死んだように書いてある。その祖父の亡くなる前、病臥して一月ほど経つた頃、『拙者は先程から、此処こゝに控へて待つて居りまするが—』というようなかつて城中で言つた文句を寢衣で正座し、お辞儀をしながら喚いていたというのである。その後容態が悪化し、「四日目の夜死んだ。」のである。この時花袋は満十六歳であるので、記憶ははつきりしていたであらう。穂弥太は老耄衰弱の果てにお城勤めの頃の記憶が戻つたのかも知れない。花袋はそれを母の死に際の際の讒言に応用したのだらう。そうするうちに遂に母は死に、弔問の客が来て葬式となる。亡き夫は靖国神社に合祀されているので神式の葬儀にな

る。通夜は神主が来て誄辞を読む。湯灌の様子も「死人はぐたりと手を垂れて、首を曲げて、眼を閉いで居る。それを薄暗い洋燈の光が朧ろ氣に照して、氣味悪く死の影を四辺に広げた。肉身のものは少しでも洗つて遣るものだと云ふので、皆な手やら足やら胸やらを洗ふ。南無阿弥陀仏の唱名が処々に起る。秀雄は無造作に手拭で顔を拭いて遣つた。銚之助は見るに忍びないやうな暗い顔をしてじつと立つてこのさまを見て居たが、最後に思切つて足を洗つた。死の冷かさが総身に伝つてギョツとした。」(七十)と、具体的に書かれる。人間の最終地点までを冷徹に見ようという「皮剥」意識の表れである。そして埋葬の様子、形見分け、「連夜」(全集本に収録のさいは「十日祭の前夜」)に起きたお米とお桂の喧嘩に続く。便器や湯灌など個々の描写は想像ではなく事実を再現したもので、自然主義的意識が明瞭に汲み取れる。しかし、ともすると感傷に流れるような場面は、花袋の空想、人間はこうあるはずだ、かくあらねばならないという思いによって塗りこめられる。つまり大自然の主観意識が先に立つて、同じ感傷的フレーズを繰り返す弊に陥る。次は「かなしい秋は来た。」で始まる七十八章であるが、『南船北馬』(明治32・9)の序文を書いた九月二十六日の夜である。

理由なしに涙が滴れる。子のために親は其総てを尽した。子は親の為に果して何を尽したか。母は難かしかつた。けれど難かしい以上に温情であつた。われ等のために、真心から悲しみ、真心から憂ひ、真心から怒つた。難かしかつたのは優しかつた為である。……であるのに、子等は何を以てこれに酬いた？

人間の浅ましさが今更のやうに袴と胸に迫つた。少時して思返して、「けれどこれが人間である。これが自然である。逝くものをして逝かしめよ、滅ぶべきものを滅ばしめよ』
茫然として涙が溢れた。

しかし亡母に十分の孝養を尽さなかつた程度のこととは「人間の浅ましき」とは言えないし、実際問題『生』では相当孝行しているように見える。『家』から一例を挙げれば、宗蔵、正太、三吉らは皆近親の女に性的欲望を遂げようとする者で、「家の生活で結び付けられた人々の、微妙な、陰影の多い、言ふに言はれぬ深い関係——左様いふものが重苦しく彼の胸を圧して来た——叔父姪、従兄妹同志、義理ある姉と弟、義理ある兄と妹……」という件があるとおり、金

と性欲とで絡まれている一族の醜悪が描かれた。『生』は人間無力、人生卑小という程度の人生観で安易に塗りこめて、おぞましい業のようなものは表れず、綺麗事に止まる気味である。右の引用箇所などを巡って猪野謙二は、「これは作者じしんの主体に則していえば、その甘い現状肯定の態度と相重なっているが、とにかく「家」が生み出す暗い閉塞の状態は忠実に描き尽されている。また、作者は、必ずしもこの「家」の存在を是認しているわけではない。しかし彼には、それ以上に進み出て、この既成の価値意識そのものを疑うような視点はまったくないといつてよいのである。」と述べて、花袋に家族制度批判の視点がなく、むしろ「無常感のごときもの」の色濃く出ている点、桂園派松浦辰男の影響をこそ重視すべきと論ずる。また、同じ特集の論考で榎本隆司も「かくて花袋は、作品「生」において、おのれとの対決の必然性を十分にはらみながら、それを明確な主題としてとらえ得ず、そのことによつて、「家」をめぐる根源の問題に触れる姿勢をも放棄してしまった。そこに古い倫理にしか救いを求め得なかつた花袋の姿は覆うべくもなかつたし、総じて、その問題追求の甘さが、作品のリアリティを大きく減じていることも否定しがたいのであつた。」¹⁷⁾という。『生』が無常観のようなものに傾き、リアリティにおいても微温的であるのはその通りであるけれども、そもそも花袋には家族制度や家の桎梏などの問題意識はなかつた。藤村も夫婦や金銭に纏わる家族意識はあつたが、家族制度などは視野になかつたと思われる。後述するが、花袋は概して旧時代の生活を懐かしみ、明治の近代を嫌忌する傾向があり、文学者としては自然主義の旗手でありながら実作は退嬰的だつたのである。¹⁸⁾

6

花袋の廢墟志向^{ルイン}ということがあつて、吉田精一は次のように述べる。¹⁹⁾

彼の初期は高山樗牛の激賞した「わすれ水」、書きおろしの「ふるさと」「野の花」など、「名張乙女」をうちとめとして、明治二十年代末から三十年代中ごろまでのいくつかの作品で代表される。それらを通じて土地としてはよく古城址や、古沼など歴史や伝説の匂ひをとどめた「あと」、即ち廢墟^{ルイン}に心をひかれ、事に於いては清純な初恋

の思ひ出や、幼年時の回想など、如何ともしがたい「時」の流れに漂ふ人間生活に対する嗟嘆を旨としてゐることが注意される。それらは彼の個性的な感情の反映を自然に見ようとしてゐるのであつて、自然の反映を感情に見出してゐるのではなかつた。いづれにせよ、これは彼の文学を通じての主題であり、主想であつて、後年の彼は更にこの主題を意識的に反省し、大海の孤舟のやうな人間の運命を諦視するといふ態度をとる。無限の「時間」と「空間」とを背景とする、小さい、はかない「個」としての人間生活に詠歎するといふ作風は、花袋文学をたてにつらくぬく一條の水脈をなすのである。

右のような説は諸家の花袋論に概ね共通する論調と思われるが、ここで花袋文学の根本には何があるのか取り敢えずまとめ、花袋の自然主義にも一定の結論を提起する。明治四十年から四十二年、花袋は『花袋集』第一、第二に収められる短篇を量産し、『生』や『妻』『田舎教師』を書いた。また、身辺では眉山の死、独歩の通夜や葬儀でのひと騒ぎ、岡田ミチヨの再上京と妊娠出産、養女として入籍などのこともあつた。三十七年の日露戦争従軍などを一つの転機と捉えてみて、花袋文学はどういう経路を辿り、どのような変容を遂げたのか。ここで多少迂遠ながら、花袋とはどういふ存在か、どのように文学史に位置づければよいか少し考える時、花袋は日本の近代文学の推進者ではあつても、近代の翹望者ではなかつたことが考えられる。田山一家は秋元藩の下士で、十七俵二人扶持の無足人格といふ貧乏な武士であつたが、祖父は功あつて藩内で重きをなしたらしい。秋元藩は甲斐、武蔵、出羽、館林に転封し、祖父や父は山形の高橋陣屋に居住した。弘化二年（一八五四）に秋元志朝ゆきともが館林藩に移封された後、田山家はしばらく高橋に残置され、飛び地の処理にあつたらしい。鍋十郎とてつが祖父母や長女いつとともに館林に移つたのは柳田泉らの考証によれば、文久二年六月ころと推定される。その時、てつは二女ぬさを身ごもつていた。秋元藩は戊辰戦争の際は官軍方に付いて会津、仙台方面の討伐で手柄を立てたが、維新後は冷遇され薩長に押されて平民以下の境遇に落魄した。花袋の父も弓の達人だつたが、維新後は不遇で、西南戦争での武功を目指したが熊手で死ぬ。花袋文学には度々お城勤めの麗々しさ、華々しさが回顧される。お目見え以下の下士であつても武士のプライドは十分に持つていたのだろう。明治以後、文字通り陋巷に逼塞し、故郷喪失者となつた一家一族が近代への懐疑、不信任を根底的に抱いたとしてもおかしくない。ま

して花袋は丁稚奉公などの辛酸を嘗め、学歴上でも挫折感を味わったので精神構造はかなり複雑に屈折していたと思われる。文壇でも長い下積みの苦勞の末に『蒲団』で漸く日の目を見るに到る。その評価は少し措くが、日露戦争従軍後から花袋は中年意識に戦争体験も手伝つて次第に虚無的な気分が強まったのではないか。兄の罷免は三十五年だった。一方ではゾラ・モーパッサンの模倣にも限界を覚え、軍事小説にも行き詰つた。こういう中で花袋は花袋流自然主義の流儀をミチヨに対する幻滅や、藤村、独歩を含む文壇の隆盛に取り残されたという意識などをきつかけに手に入れたのではないだろうか。それは花袋の本質的志向にもマッチする、近代への不信感、過去への下降志向、人間の廃滅と卑小といったもので、そのフィルターを通して描く自然主義作品である。三十九年三月の『古駅』のころから廃滅への親近があり、その年十二月の『アリウウシヤ』辺りからは近代的發展から見離された下層庶民を生々しく描くようになる。『ネギ一束』や『県道』あるいは『土手の家』『おし灸』などに描かれる下層庶民は、近代の華やかな進歩から見放された、独立した個人であるより有象無象の一部に過ぎない。封建時代の因襲を離れず、目の前の欲望充足のために、だけに生きるような人達である。それらを生々しく描くことは花袋の近代への怨嗟と眞実暴露の願望に率直に合致したと言える。『ふれ売』（『趣味』明治42・1）には次の一節がある。

ふれ売の群にもいつまで同じことをして居るものはなかつた。三年経てば、鯛売も魚屋の旦那になり、豆腐のかつきも、下婢げぢよなどに相手を見附けて、貯めた金で小体こていな店を始めて、丸髻てがらに赤い手絡てがらを懸けさせて、夙はやく起きて一緒に豆を引臼で挽くやうになる。（中略）

けれど一生ふれ売と、運命の定さだまつたかれ等の群は、そんなことには頓着しない。目も呉れない。いや寧ろ呉れなくても呉れない風をして、雨が降らうが、風が吹かうが、児が生れやうが、人が死なうが、国を賭した日露戦争があらうが、底髪そこかみの女学生が街頭を若い男と伴つれ立つて歩かうが、電車が出来やうが、矢張り同じ八重桜の咲き、木蓮の咲き、山吹躑つじ躑つじの咲く屋敷町一柴垣、かなめ垣、板塀、冠木門の続く小路を、

『蒲鉾、半べん、竹輪たけのこでいかに』／『沢庵さわあに箸はしはよう御座い』／『張板工張板』／と、ふれて歩く。

ふつと街頭に其声が絶える。と、もう其ふれ売の主あしは此世の中に居ないのだ。此世の中から消え去つて了つたの

だ。

甘諸屋さつまいもやもあさり屋も辻占屋も、さういふ風にして、ある年のある日にふつと消えた。

このふれ売のような存在様態は花袋が当時、人間観の根本に据えたものだろう。庇髪の女学生はミチヨを想起させる。新時代の女学生も『土手の家』の光源、『ネギ一束』のお作らと違いはなく、新時代らしい粉飾も人間の本態を糊塗しているだけであるというような見方から、花袋の大自然の主観としてのパースペクティブフレームのようなものが成立し、かくあるべし、こうあるはずだという、花袋の主観小説が生れた。大枠は事実であるが、作の要所は花袋の主観で彩られているのが花袋の自然主義で、『生』もやはりそれによつて意味づけられている。正しく『生』は生の悲哀というモチーフで導かれる。

繰り返すようだが独歩や藤村の活躍の陰で自分のアイデンティティに合致する文学を模索していた花袋は、自分の自然主義文学観に適した文学パターンを編み出した。それは一言で言うと同類者である。その第一は、人間は皆同じく滅びゆくものでしかなく、未来に向かうことは過去の人達の居るところに向うことだという過去絶対化、人間は皆そんな者という人間卑小観である。次は近代虚妄観で、近代的な華やかさの装いを凝らしても一皮剥けば皆同じである、近代は粉飾だという意識。しかしその中でも、自分と自分の営みは別だという自己特化意識が花袋の旺盛な創作意欲を支えた。『蒲団』なども中年の恋を自己暴露的に書いたように見られたが、じつは近代的に粉飾された横山芳子という女学生も一皮剥けばお作やお源、あるいは花袋母や嫂などと同類だという諦視を作意の底に見ることができそうだ。「自然の最奥に秘める暗黒なる力に対する厭世の情」(七)という言葉などは、所謂大自然の主観を考えないと理解しづらいのではないだろうか。

こうして花袋は、自己を疎外した明治近代を逆に疎外するような遣り方で、自然主義的作品を多産し、自己の立脚地と文壇での地位を確立したかに見える。しかしそれは一つの方便に過ぎず、人間はつまらぬもので未来は過去と同じだというような文学観世界観でいつまでも書けるはずはない。花袋の用いる材料も枯渇し、また柳田国男から得るソースにも限りがある。さらに明治四十年に知った飯田代子との腐れ縁的な交情、四十四年に向島「須磨屋」を持たせる関係

の深まりが変化を強いるようになる。田中榮一の指摘する^⑥ように「花袋の歩みを作品に徴してみると、明治末年頃より、殊更に個人的な問題―いわゆる本能・愛欲を扱ったものも多く描くようになって」いる作風の変化は花袋の大自然の主観も脆弱だったことを物語る。花袋の自然主義文学の数々は、自身はそうのように意識しなかったにせよ、方便な花袋の文壇生き残り願望の産物で、深い文学理論的裏付けは乏しかった。しかし漱石・鷗外などの西洋的知識人的文学が結局上滑りの近代化を超えて深化しなかったことを考えれば、女中や子守、芸者と遊女、小作人と行商人などの頼れゆく下層庶民を描き尽し、近代の真相を容赦なく爬羅剔抉したと言える花袋文学は日本近代文学の正統な基礎を築いたと言つてよい。付け加えれば、宙外が指摘したように自然主義諸家、批評家の主張もまちまちで、実作者で言うところ、白鳥、泡鳴、秋江なども一定の主義主張で括ることは出来ないが、それぞれの個性によって近代文学の豊饒を齎した。

この度は平面描写論については十分な考察を行わなかったが、この言葉も花袋らしい思いつきの用語で、十分吟味したものとは言えず、実作と必ずしも合致しない。自然主義時代の作品殆どに「内面描写」「心理描写」があつて、「平面描写を念頭に入れながらも、制御しきれなかつたと推測される。」という中川健治の傾聴すべき論^⑦がある。

注

(1) この点を、和田謹吾は「田山花袋」(『文学・一九一〇年代』明治書院、昭和54)において、「花袋の自然主義志向は、たしかに明治三〇年代に始まっている。それを「露骨なる描写」(明37・2)あたりから考えるか、『野の花』(明34・6)の序まで遡るかは観点の置き所によって異なるかも知れないが、たとえば花袋の『破戒』評(明39・4)などはすでに明らかにその作品を「作者は全然自然主義の感化の下に居る。」として高く評価していたのである。ただし、その評価の基準は「露骨なる描写」の主張と全く同じであり、(『歳す処なく書かう』(『忠実に書かう』(『遺憾なく書かう』)とする作者の意図の成功を認めているのであり、実はそれが花袋のいう自然主義であり、花袋自身が「蒲団」に意図して成功したことも全く同じであつたことは『東京の三十年』の叙述を見ても明らかである。(中略) それまでの自作は「少女病」(明40・5)などが典型的に示すように感傷と詠嘆とに彩られた甘い調子の作風だったのである。そしてそれが実は花袋文学の資質だったのである。(中略) それが「蒲団」の意外な反響によって花袋の意志が逆に制約され、自己周辺の事実^⑧に執るようになって、姉を素材にし(「姉」明41・1)、祖父母

を素材にし（「祖父母」明41・4）、兄を素材にし（「兄」明41・4）そして母を素材にする（「生」）に至って、肉親を批判的に扱う情の忍び難さも絡んでついに平面描写論（『生』における試み）明41・9）を打ち出すことになった。それは正に「生」における試みだったわけだが、客観性を重視する自然主義としては、平明で格好な描写法だったから、大筋において自然主義文壇の支持を受けることになり、花袋はらにまたこの描写法に制約されるに至った。その産物が『田舎教師』であり、三部作であり、花袋の自然主義だったわけだが、花袋は決してこの平面描写法を最終的に信奉していたわけではなかった。花袋の根底には主観の尊重があった。「充分なる客観化には作者の充分なる主観の修養が必要」だという花袋は「筆の修練よりは心の修練」（『インキ壺』明42・11）と説いていたのである。だから、花袋は平面描写の議論を最終的には明治四四年四月の「描写論」で終結したが、それはむしろ岩野泡鳴の「現代小説の描写法」（明44・2）に依って書いたと推測されるふしもあり、実作の上では、自然主義の退潮前後から、自然主義のきびしい客観描写の理論的制約を自ら緩め、「縁」の後半には早くも彼本来の主観的詠嘆の表現を交えるようになっていたのである。つまり、花袋の自然主義的主張は、花袋文学の全体を見通した上で言えば、一つの歪みの時代なのである。」と説明した。大卒で異論はないが、花袋の立場から言うと「歪み」ではなく一貫したものがあつたと考えたい。

- (2) 白鳥「読売新聞と文学」（『読売新聞』昭和2・4・17および18）には「回顧すると、私の在社当時は、新日本の文学史上最も重要な時期であつた。（中略）当時のわが読売新聞はその新氣運を促すためには、随分力を入れた訳であつた。小説には、田山花袋氏の最初の長篇小説『生』が掲げられ、島崎藤村氏の大作『家』も掲げられた。国木田独步氏の死んだ時にはこの新文豪に関する記事で三面を総理めにした。毎週の文芸附録には岩野泡鳴の半獣的自然主義論、近松秋江氏の新体の随筆『文壇無駄話』石井柏亭氏や木下左太郎氏の新美術評論、小山内薫氏の新演技論などが、掲げられてゐた。旧日本趣味の伝統を持つてゐる読売新聞には、甚だ不調和な訳であつた。穩健着実の平調を失つてゐた。今日の新聞では、とてもこんな編輯振りは許されないだらう。文芸欄の気まゝな編輯者であつた私が、新社社長や新主筆に疎んぜられて、論旨免官の憂き目に会つたのは当然であつた。」云々とある。

- (3) 後藤宙外「自然主義比較論」は明治文学全集65『小杉天外 小栗風葉 後藤宙外集』（筑摩書房、昭和43）による。

- (4) 尾形明子「『野の花』とその序文に関する一考察」(『国文学研究』昭和50・6、『田山花袋というカオス』(平成11、沖積社)による)に、花袋の「主観客観の弁」末尾の一節を引いて、「花袋の論の曖昧さを追及した白鳥よりも、かなり無理なこじつけと弁明をしている花袋の方に、カオスの持つ面白さと可能性とが感じられる。明治三十四年というこの時点で、新しい文学をヨーロッパの文学の方向に求めていた花袋の真摯な情熱と、実作者の肉声とが、それらの論にこめられていたためであろうか。後に平面描写論を打ち立てながらも、「大自然の主観」から離れられずに印象的手法に陥っていた花袋の自然主義論の輪郭さえもが、ここにはほの見える。」と論じている。掬すべき見解である。同書のとがきに「私の中で花袋はいつでも曖昧な形に溶解してしまふ。明瞭な像を結ぼうとしない花袋への苛立ちが花袋から離れた一因でもあったが、今もやはりその輪郭を辿ることは難しい。その意味ではカオスよりも、闇とか混沌、あるいは超近代といった方が適切であったのかも知れない。」とある。
- (5) 拙稿「正宗白鳥の花袋評」(『日本文学ノート』平成23年12月)参照。
- (6) 「生」の合評」は『近代文学評論大系第3巻』(角川書店、昭和47)による。談話筆記で、記者は『春』と『生』と」の内容と重なるところがあることからして相馬御風である。その点をもって和田謹吾は御風の考えが竄入した可能性を指摘した(『平面描写』論の周辺」(『国語と国文学』昭和38・4、『描写の時代』による)。
- (7) 宮内俊介「田山花袋「生」覚書」(『近代文学論集―研究と資料―』昭和56・6、『田山花袋論攷』(双文社、平成15)による)参照。
- (8) 早稲田小学校のホームページによる。三十三年に花袋旧宅の東裏側に早稲田尋常小学校が開校した。明治二十八年の地図で見ると、喜久井町二十番地周辺は区画整理されておらず、野原である。その窪地の小学校を越えた先が早稲田南町で、後の漱石旧栖地である。小林一郎『田山花袋研究―博文館入社へ―』(桜楓社、昭和51)によると、この場所は大名の下屋敷であった。古地図によれば三河松平の下屋敷かと思われるが、梅を植えたという三代家光の頃は別の武家屋敷であったようだ。
- (9) 小林一郎『田山花袋研究―博文館時代(一)―』(桜楓社、昭和54)に、「この「荒涼たる生活」は、既に『蒲団』の背景にあった、花袋自身の味っていた感覚であり、時代の醸し出すものでもあった。こうみると、『蒲団』も『生』も亦、「荒涼とした生活」ともすれば虚無に陥って行く、明治時代の一般的な社会の実情に処する姿へのアプローチとしては、共通のものを持っていた

のである。ただそこにあるものは、母親・兄・花袋のいだいでいる世代と教養の差のみであり、そこから自ら生れて来る対応の仕方の差異であり、それを描いているとも言える。」との指摘がある。

⑩ 日本近代文学大系第19巻『田山花袋集』注釈(角川書店、昭和47) 参照。

⑪ 猪野謙二「生」を支えるもの(『日本近代文学』特集近代小説論—文学史再検討のために—、昭和40・5) 参照。

⑫ 榎本隆司「生」(『日本近代文学』昭和40・5) 参照。

⑬ 滝藤満義の指摘に「花袋にも藤村にも日本の家を改革しようなどという発想はもともとなかった。彼等はむしろこれを運命として受け止める事を好んだ、あまりにも日本的な作家だったのである。」「生」——近代日本の「家」と文学Ⅱ『小説の近代——「私」の行方』(おうふう、平成16) 参照。

⑭ 吉田精一「花袋文学の本質」(『明治大正文学研究』昭和30・9) 参照。

⑮ 柳田泉『田山花袋の文学——花袋文学の母胎——』(春秋社、昭和32) 参照。

⑯ 田中榮一「大正初期の花袋文学の相貌——「自他融合」の論理と「他者描写」の意味——」(『日本近代文学』昭和54・9) 参照。

⑰ 中川健治「田山花袋小説史論(自然主義時代)」(『平安学園研究論集』平成8・3、引用は『田山花袋論集Ⅰ』ニューヘルス社、平成10) 参照。

付記、『生』の本文は、日本近代文学大系により、『定本花袋全集』を参考した。

口語自由詩であること

——室生犀星晩年の世界——

九 里 順 子

初めに

隨筆集『女ひと』（新潮社 昭30・10）の好評を皮切りに、犀星晩年の旺盛な作家活動が開始され、『杏つ子』（新潮社 昭32・10）『我が愛する詩人の伝記』（中央公論社 昭33・12）『蜜のあはれ』（新潮社 昭34・10）『かげろふの日記遺文』（講談社 昭34・11）と注目すべき小説や評伝が次々と刊行されていった。初期の『抒情小曲集』、中期の「市井鬼もの」に次いで三たび訪れた、エネルギーが横溢した時代であり、エロスの関係性の追求において、その前衛的表現も含めて新境地に達した感がある。最も自在で最も深いという印象を受ける。

詩においても、『続女ひと』（新潮社 昭31・3）所収の「女おみなこのための最後の詩集」、これを増補し、独立した詩集として刊行した『昨日いらつしつて下さい』（五月書房 昭34・8）『室生犀星全詩集』（筑摩書房 昭37・3）所収の「晩年」と、小説と並行して意欲的に創作が続けられた。安宅夏夫は、犀星晩年の詩の世界について、「口語体を軽々とあやつり、一見、もろく壊れそうに見える、実にあやういところに、これ以上はない確固とした詩的空間を開示している。」と指摘している。^{注1}

安宅が指摘するように、これらの作品は、無造作な会話や呟きや雑踏に紛れそうな光景が晩年の時間意識に貫かれており、他と置き換えが効かないエロス性に満ちている。女の視点から、男の視点から、犀星は軽やかに立場を変えて発話している。安宅が感受した「実にあやういところ」とは、断片的な只事すれすれの発話、自在な視点の変換、冷徹と

言ってもいい時間意識の相関性から生じていると考えられる。犀星が到達した地点をこのような視座から考察していき
たい。

一 自立するメタファ

舌

みづうみなぞ眼にはいらぬ、

景色は耳の上に

つぶれゆがんでゐる、

舌といふものは

おさかなみたいね、

好きなやうに泳ぐわね

「女このための最後の詩集」所収のこの作品について、西脇順三郎は、「詩的なイマージュは何のことを表現しようとしているのか「絶対」に通じている。この詩はそうした意味で純粹にマラルメ的である。」「ここにあげた詩は「舌」について特に奇異なイマージュを作っている。」と述べている（室生犀星の世界^{注2}）。「舌」は「おさかな」に喩えられているが、次の瞬間には「おさかな」となって泳ぎ出している。喩えるものは喩えられるものよりも先に存在するのではなく、前後関係、あるいは虚実の区別は無化されている。ここにあるのは、「舌」と「おさかな」が戯れるエロティックな質感である。視覚は聴覚の外側に追いやられ、聴覚の内側に触覚があつて、二人を取り囲む「みづうみ」を「舌」

が自在に支配している。メタファはメタファであることを超えて、自立している。

概念的な把握を超えた官能性という点ならば、同詩集所収の「令嬢ミンミン」も、そうである。「あなたの頭にある／黄金の紋章もんしょうはあれは／なんとという紋章ですか、／あなたのお臀は／鳴くごとにうまく動く、／あなたは何の天才ですか。」と蟬は、一匹の昆虫という概念には収まらない、艶かしく動く肉体そのものとして描かれている。しかし、「舌」は、触覚の戯れがエロスの世界を象徴している全体性がある。

この詩集には、「舌」と同じようにエロスの時間を描いた「野も山も」「あぢのない黄金キン」がある。「野も山も」は、「大きな頬ね、／まるで野のやうに熱い、／泉も／河もあるみたいぢやないの、／ずつと 向うに／山も雲も野に人も動いてゐる、／男の頬つて大きいのね、／ここから見えないものはない、／ここから人類のどよめきも聞えてくる。」と自然を内包する肉体として「男の頬」を捉えている。自然を内包する対象は、既に『日本美論』（昭森社 昭18・12）や戦時下の「王朝もの」で描かれていた。注3例えば、『日本美論』の「障子」は、「日がくれかかり／柔かい藍いろになる／障子の棧、／その一つあてが白い町となり／白い町の建物も／日も人も白い、／白くないものはない、／砂漠もあれば山もある、／海はいつも風ぎ、／波は白波、／船も見え／船には人も見える。」と生活を包み込む家屋は自然への通路ともなり、自然と人間の調和を象徴している。「日本のあけぼの」では、「小さい臉や／きれのよい一重の臉のうへにも／花のへりの方にも／山吹いろがぼかさされ／あけぼのの裳もてが引かれる、／刺繡と香ひと／羞かしいあたらしさで／彼女のくちびるが伸される、／日本のゆめがさめる、」と国土が審美的に肉体化されている。「野も山も」は、自然と人間の官能的な相関性においてこれらの作品の延長線上にある。また、「あぢのない黄金」は、「キスには／黄金を舐めたやうなあぢがある、／あぢのないあぢの黄金に／舌のさきがすべつて／舌のお友達が笑つてゐる、／美味しいものね。」と「舌のお友達」という擬人化が機能的であり、官能性を曖昧にしている。

「野も山も」「あぢのない黄金」に比べて、「舌」は、メタファが一对一の対応を超えた一つの世界を表出している点において際立っている。西脇が、「舌」を評して「マラルメ以上ともいえるが、残念ながら、この詩一つである。」と述べたのも、方法論やレトリックを超えたエロスの真理を表象しているからであろう。

これには、^{あわ}間を捉える眼と一つ一つの対象の肉感を捉える眼の先鋭化の両方が関わっている。『かげろふの日記遺文』では、「町の小路の女」冨野の姿が、兼家の目を通して「衣裳の山、衣裳のなかにある山、その山は生きて靠れかかり、しかも寸時として嘆きをわすれず、自分の身分の低いことをかくさないでゐた。」と描かれる。冨野は、「衣裳の山」であると共に「衣裳のなかにある山」でもあり、衣裳と肉体は境界が曖昧な塊として存在し、しかも生命感を持つて迫ってくる。『告ぐるうた』（講談社 昭35・7）では、とみ子夫人がモデルである山名灰子に対し、犀星の金沢時代の文学仲間がモデルと思しき澤卓二が「僕はその肌の色の涯が見たいのだ、もはや君の肌と空気との切れめ、君の肌がなくなつた断崖、つひにその形といふものが生きてゐる限り崩れないであるところを、僕はちらりとでも宜いから見たかつたのだ、（略）空気と肌とがわかれたときに起る重さと軽さの膨れたところが、山々のすがたが美しくかつたやうに遙かな思慕となつて、人間を成長させて来たのだ。」^{注5}と言ひ募る。これも、対象の輪郭が輪郭として成立する極限的な地点に視線が注がれている。境界的な質感のエロティシズムは、「帆の世界」（『小説新潮』14巻15号 昭35・12）においても「体軀のきれめが空気とのきれめになつてゐるところ、胸とか大腿部とかが形をなくして溶けたところに、美があるやうな気がした。（略）重量の綾みたいなものだ、永遠にとどまることのない物の仮睡のやうなものだ。」と主人公の「私」に言わせている。一方で、対象の肉感を捉える眼は、異なる範疇の類似性を見出している。「鬼籍の翡陶」（『芸術新潮』8巻5号 昭32・5）^{注7}では、「青磁のうつくしき」について、「うすみどりのああいふいろは人間の肢体には決して見られぬものであるが、併し五年も十年も見つめてゐると、女の肢体にはたしかにこんなうすみどりがあつた筈だと、形をかへて昨日のやうに私は眺めてゐる。」とある。これよりも数年前に書かれた「骨正月」（『東京新聞夕刊』昭25・1・16）^{注8}でも、「全く山にはいると女のひとを思ふのも、木の股とか、すべっこさの外に思ふすべもないのである。仙人とか聖人とかいふ者は大方すべすべした木の股ばかり見てゐて、終年をんなの人を見なくてもよかつたのであらう。」と触感を媒体に「女のひと」と「木の股」が重ねられている。木の股から生れたという慣用句があるが、犀星はそれを具体的形象に戻してしまう。「曠野の眉」（『旅』24巻4号 昭25・4）^{注9}では、戦前の満洲旅行の体験を回想し、「それらの林には一つあての水溜りがおのおのまるで懐中鏡のやうに大切に凹地に光り、まるで貴重な風景の眉のやうな

役割をつとめてゐた。」と風景を顔として捉えている。対象の始まりと終りが存在する接触面のエロティシズムと異なる対象が重なり合う重層的なエロティシズム。消失点にも肉體性を探し出し、対象全てを肉體として見る眼差し。先鋭化する眼は、超視覚とも言うべき地平へ犀星を連れ出したのである。犀星は、従来の関係性を越えた接近と連結によって、世界を新たに読み直している。

「舌」も「野も山も」も「あぢのない黄金」も女の発話である。目の前にいる抱擁の相手に語りかけている現在進行的な発話は、肉声のリアリティを響かせる。相手の姿は少しも出さず、「舌」が「おさかな」と化した時間を味わい尽くそうとしている女の声が、官能的な空間を生きる主体としての身体を生々しく感じさせる。官能が泳ぎ回る、しかし閉じた空間として「みづうみ」は甚だ適切である。

西脇にも、範疇の相違が無化される主体的な空間を描いた「アン・ヴァロニカ」(『近代の寓話』 創元社 昭28・10)がある。「生物学の教授」と「アルプスへかけおちする前／の一週」、故郷の家に戻った女は、「昔の通りの庭でその秘密をかくして／恋心に唇をとがらしていた。／鬼百合の花をしゃぶってみた。／「壁のところ註で小供の時／神／地蜂／おやし／の怒りにもかゝわらず／梅の実をぬすんでたべたこともあつたわ。」。アン・ヴァロニカは、「村の宿屋でスグリ酒と蟹をたべながら」「髪を細い指でかきあげながら」、「肉体も草花もあたしには同じだわ」と語る。アンがしゃぶるのは、どぎつい「鬼百合」でも、しゃぶるには真つ当な「蟹」でもよい。しかし、しゃぶるという行為が熱つぽく語られる訳ではなく、「神／地蜂／おやし／の怒りにもかゝわらず」という諺を振った列挙が行為の意味を脱力させる。しかも、駈落ちの相手は、即物的・分析的なイメージを与える「生物学の教授」である。盗む・しゃぶる・食べるといふ行為の官能性を希釈してしまう諧謔味と肉感の希薄なアンの「細い指」。「かけおち」に纏わる情念や悲愴感ではなく、うつすらとした可笑しさと物悲しさとエロティシズム。「肉体も草花もあたしには同じだわ」とは、情念の予定調和を成立させない主体の発話であり、脱力や諧謔の後に残る平準化のエロティシズムである。相違と類似を繋ぎ直すという点では犀星と共通するが、反情動的、反肉感的なエロティシズムは、犀星とは対照的である。そのような西脇だからこそ、犀星を「絶対に通じている」「奇異なイマージュ」として高く評価し得たのであろう。肉感に満ちた犀星のメタ

ファの世界は、女の声によって実在化するのである。

二 「顫えゐる」存在

『泥孔雀』（沙羅書房 昭24・8）の詩篇「或る詩人の生涯」に収録された「ここに弾かれざるものなく」には、音楽に寄せて、犀星の時間意識が端的に表れている。「一日はもはや／かへり来たることなし／かくのごときもの／かくのごとく顫えゐるもの／ふたたび現はることなく／終日／黙然として音楽をきく」と時間は戻つては来ないものであり、音楽の複雑微妙な諧調に耳を傾けている人間こそが、過ぎゆく時間の中で揺らいでいる存在なのである。

帰らざる時間というモチーフは、繰返し語られる。同じく「或る詩人の生涯」の「天うつごとく」では「浪はけむりをあげる／けむりはくだける／浪にはすこしの変りがない／あと三年か／あと五年か／ぎりぎりに先の方が詰り／たしかに岸辺は遠くなつた／浪の向側はもう見へない／そのうしろも見へない／何や彼とごたつた果に終りだけは見へて来た／死だけが見へて来た」と振り返るのではなく、生涯の果てを直視する態度が表明される。生涯が終りに近づいているからこそ、「かがやいて女らが見へて来た／よく見て置かう／見てもあらはすことの出来ない／終りのあとさきを見て置かう」と生涯のテーマであつた「女ら」を直截化すると共に、「終りのあとさき」まで見ることを極めようとする。「浪」は人生の波瀾のメタファであるが、「浪はくだける／天うつごとくうつくしく」と晩年のエネルギーの咆哮は力強く肯定される。これを、『抒情小曲集』（感情詩社 大7・9）の「海浜独唱」の絶唱と比べてみると、犀星が遙か遠くの地点に到達したことが窺える。「海浜独唱」では、「ひとりあつき涙をたれ／海のなぎさにうづくまる／なにゆえの涙そ青き波のむれ／よせきたりわが顔をぬらす／みよや濡れたる砂にうつり出づ／わがみじめなる影をいだき去り／抱きさる波、波、哀しき波」と「われ」は波の前で徹底して受動的であり、消滅願望において波と同化する。啄木の『一握の砂』（東雲堂 明43・12）冒頭の「東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる」以下、「砂山十首」を思い起させる短歌的な抒情である。自愛の感傷を詩的表現として成立させるためには、伝統的な歌うという形式

を通して安定性が要請されるのであろう。これに対し、「天うつごとく」は歌語や修辭の外側にあつて、岸から遠ざかる感覚と視界とが連動しつつテーマに直結する、固有の意識のリズムが詩を支えている。リズムとテーマの固有の相関性が、口語自由詩の特質であらう。

「天うつごとく」の咆哮は、決して力みではなく、死することへのリアリスティックな認識が根底にある。「みな去る」（或る詩人の生涯）では、「結局 みなみなくなる／一人見へなくなり／また一人みなくなる／こんどは三人も見へなくなる／何処にもみなくなる／（略）あまりたくさんみなくなり／つゐにかぞへることも出来なくなる／その人らはもう／何処にも生きてはゐない／呼んでもふりかへる人ではない」と晩年に差しかかった実感が率直に語られる。加速度的に周囲から生が欠落していくことが晩年に入ることであり、「その人らはもう／何処にも生きてはゐない」という一見何の変哲もない言葉は、生の側から見た死の真実である。それは、不在を超えた非在である。実感が擱んだ真実が単純に直截に描かれている。

帰らざる時間は、生の側から見た死のメタファとなる。「女ごのための最後の詩集」所収の「けふといふ日」では、時刻を告げ終つた時計の音として表象される。

時計でも

十二時を打つときに

おしまひの鐘をよくきくと、

とても 大きく打つ、

けふのおわかれにね、

けふがもう帰つて来ないために、

けふが地球の上にもうなくなり、

ほかの無くなつた日にまぎれ込んで

なんでもない日になつて行くからだ、
茫々何千年の歳月に連れこまれるのだ、

一日の終りという区切りによつて、存在と共にあつた時間は後方に追いやられ、無数の過去の一つとなり、人は新たに時間のサイクルを迎え入れる。「十二時を打つとき」という特定、「けふが地球の上にもうなくなり」という形容からは、地球が回転するリズムに同調する根元的な生命のリズム、死と再生のリズムを反復する人間の時間も想起されるが、この作品の主眼はそのような一般論的な認識ではないだろう。「けふ」の終りが明日の始まりとしてではなく、固有性の喪失としてイメージされ、死の領域の圧倒的な質量へと連動していく点にある。個体としての人間は、死んだ時間の膨大な堆積と踵を接している生の時間の側に常に体一つ分だけ突き出している。この僅かな、しかし明らかな突出が、時間的存在としての人間を生きる主体の側から捉えている確かさを感じさせる。この視座は、「けふといふ日、／そんな日があつたか知らと、／どんなにけふ一日だけでも好く生きなければならぬ。」という結びへの展開へと貫かれる。死へと押し出されていくからこそ、生の突出を突出たらしめることが大切なのだ。それは、「けふ」という日を固有の顔を持つ時間として輝かせることである。

同じ思いは、「晩年」所収の「先きの日」では、より身体的に墜落していく死体として描かれる。「わかれてゆく毎日々／毎日にあつた思ひ／誰も知ることのない思ひの渦が／背後に音を立ててながれてゐる／思ひはもはや悲鳴をあげない／ただ　ながれて往くだけだ／何も無いところに／深い溝や　淵のやうなところに」（第一連）と過ぎ去つた日々を不在の声の総体として思い描く。それらの行方は奈落としてしか想像できない。圧倒的な死の領域という捉え方は「けふといふ日」同様であるが、「先きの日」では、生きられた時間の肉体的に焦点が当てられている。直前までは、確かに声を持っていたのである。「あなたがたも　私も／うしろを見たことがない／うしろに音となつて／つぶれた毎日のあることを／毎日が死体となつて墜ちてゆくのを／見ようともしないのだ」と過去は「つぶれた」「死体」の

堆積として生々しくイメージされる。生の側から死の側へ想像を馳せる場合、命を失った肉体のあり様がその及ぶ範囲である。犀星は、飽くまでも、自らの肉体的思考に立脚しつつ、痕跡もなく彼方に流れ去ってしまう日々の只中を生きている不可思議さに思いを巡らしている。今ここに在るといふ実存的意識にとつては、未来もまた、未知の領域である。「けれども先きの日がきらめいて／何が起り何が私共を右左するか判らない／また先きの日のおぼしまに／誰かが思案に暮れ 待ちわびてゐるかも判らぬ／先きの日を訪ねて見よう／何処かにはあるはずの先きの日」（第三連）と未来はやはり、漠然とした時間の幅ではなく、生活のサイクルである「日」として捉えられている。営みの中で実存的意識を培つていった生活人＝詩人、犀星の風貌が窺える。

今ここという地点に立脚し、その肉体的性において発想、認識することの独自性は、高橋新吉や三好達治を置いてみると明らかである。『高橋新吉の詩集』（日本未来派発行所 昭24・10^註）は、「日が照つてゐた／今から五億年前に」という「日」で始まり、「留守と言へ／ここには誰も居らぬと言へ／五億年経つたら帰つて来る」という「来るす」で終る。この詩集は、禅問答のような作品に満ちており、生命は時空に遍在するが、それも現象に過ぎず、時空を超えて神と宇宙が存在することが繰返し語られている。「一つのじやがいのものの中に／山も川もある」（「じやがいの」と、一見、犀星の「野も山も」と類似する表現も、基点としての肉体ではなく、遍在する生命の一つの形象として俯瞰する視点から描かれている。「宇宙の根本は刹那にも無い／過去も未来も全く同じである」（「根本」と時間が人間には属していないことを述べ、「私がここに居ることを誰も妨げるものはない／億万年の久しきに亘つて私はここに居ることにした／こことは心の未だ発せざる所を言ふのだ」（「ここ」と永遠の定点として、関係性というものが一切無い未生の地点を想定し、「死は未来にあるのではない 過去にも現在にもある。死はかくの如きである」（「死」と生命のサイクルに予定調和する時間の存在を否定する。犀星も新吉も、共に、時間的存在としての人間を痛感している。しかし、犀星の〈今ここ〉が、肉体を存在証明として、死すべき運命を受容しているのに対し、新吉の〈今ここ〉は生命を超えた不動の地点として想定され、時空を宇宙の仮象として捉えることで、生と死を相対化する。それにしても、「一つのじやがいのものの中に／山も川もある」という表現が、もしも犀星を触発したとすれば、全く異なる文脈において表現を移植し

てしまう詩人の能力として興味深い。

三好達治は、『百たびののち』（『定本三好達治全詩集』 昭37・3 筑摩書房^註）の「落葉つきて」で、「今しがた身じまひのできたばかりの黄昏どき」を「百年もながい間私はそれを眺めてゐた」と歌い、「さやうなら／こんばんは／遠い遠い過去の方から ぼつかり月が浮び出た／浮び出た追憶の／さうして この古い空洞^{くうどう}から出てゆくのは／さてもうあの世の新しい私でせうか」と「あの世」へと幽体離脱していくような夢想を語る。「ぼつかり」浮んだ月に誘われて現れた「あの世の新しい私」は、時満ちて地上でのサイクルを終え、自然の循環に回帰していく生命の姿である。肉体から離れていく個の時間という意識は、「ノート」「私の耳は聞いている」にも見られる。「ノート」では、「まだ……私の過去は私のものだ／あたたかい冬の陽ざし／けふの陽ざしよ もつとの冬を私の上にふりそそげ／また私の過去は私のものだ」と四季の最後の季節である「冬の陽ざし」を浴びつつ、内的な時間が繋がっていると感受する。それが生きていることの晩年の実感である。「私」は、「ああかの待ちどほしい日まで／よき展望まで／荷造りをはつた身軽さの歌のはじまる日まで／冬の太陽よ いそげ いそげ」とこの実感を体いっぱい^註に貪ろうとする。「私の耳は聞いている」では、「ああ最後に 私の耳は聞いている 極北の海の けふも大きな怒りをもたらして轟くのを」と「独り者の 宿なしの 盲目の詩人」が「旅路のはて」に「五万年も古い人間の歴史」の声を聞いている光景を描く。「彼もまた天空一片の浮き雲のやうな人格だつた」のであり、「行き方知れずになつてしまつた」後、捉える主体不在の処では、「人間の歴史」も存在しない。「こめの歌 千鳥のつれ鳴き 小石のささやき／耳ある者は聴け……／そのあとに無心の声 無限の時が何を語るか」と自然を営みとして人間に寄り添わせる主体が去つた後の、意味づけられない時空を思い描く。達治においても、繋げ、区別し、さまざまな形で関係化を図ることで成立する生の時間と、一切の分節化が成立しない死の時間とは截然と区別されている。しかし、詩集のタイトルにもなっている「百たびののち」で、かつて訪れた仏国寺を回想し、「囀鳴するどきこゑ」も聞こえる冬の寺院に「生成流転」を思い、「百たびののちにさやかに ふたたび思ふ かの朝の清麗を」と語るように、変相する現象を通して存在する永遠の生命が窺える。人間は、個の時間を終えた後は自然に回帰し、生成流転の中で生れ変るといふ世界観が感じられる。達治にとって、過去は、扉

星のように「茫々何千年の歲月」でも「つぶれた」「死体」でもなく、肉体に内在化され、自らの肉体に属するものである。これは、大いなる連続性の中の一つの単位として個の生を捉えているからではないだろうか。達治において（今ここ）の意識は希薄であり、生と死は異なる次元への移行である印象を受ける。

今ここにある肉体が存在の根拠である犀星にとつて、生きるとは、揺れながら一日というサイクルを重ねていき、差異を孕んだ反復によつて辿り着く地点が見えないことでもある。「女ごのための最後の詩集」所収の「けふほれてあすわかれ」は、「何度でも女にほれてみたが／ほれるといふことに際限がない、／際限がないことのうるはしさ、／（略）／けふほれてあすわかれ／あすまたほれてあさつてわかれ／毎日ほれて毎日失くする／毎日貫ひ毎日こなれてしまふ、／茫々 生きて際限もない、……」と語る。「ほれて」「わかれ」ることは踵を接して訪れ、それぞれのタイミングを持ち、リズミカルな「際限」の無さを作り上げていく。これも、遙かな地点が「茫々」と形容される。いつまでもその行為が充足しないで、先へ先へと逃れていくことが、女性というテーマを追いかけ続ける意味であり、それが詩のリズムとして体现されている。

三 主体としての女性

「女ごのための最後の詩集」所収の「受話器のそばで」は、共有されるものとして時間に網をかける女性の声のドラマである。

ええ 五時がいいわ、

五時ね、

五時つてもうくらいわね、

五時つていいお時間ね、

まゐりますいつものところね。

菅谷規矩雄は、犀星晩年の詩について、「犀星の詩の究極は、むしろ聴覚に象徴されるのである。そこに犀星は、技法としては、いわばメタファ以上のメタファを実現しようとした。」と述べている。菅谷は、「メタファ以上のメタファ」を犀星の生い立ちに立ち戻って捉え、犀星自身が体験し得なかった「いのち」のきわみとしての（母なるもの）はなにか」という根源的な問いかけに対し、「情景の核心」即ち「人間の関係の根柢である（親なるものの先験的欠如）」という不条理」に「固着した韻律を、トータルに外化し、対象の内部に転移せしめ、ひいては自己を相対化しうる表現の方法」であるとしている。具体的に言えば、「ことばを発する声（イメジ）」が、「もともと男（犀星）によつてみられていた対象としてある女性の美」から「（美の）主体としての女性」として「ひとりあるきはじめるモメント」になることである。

詩人犀星の個人史から見れば、究極のテーマを充足する、エロティックな美意識を超えた表現方法の成立ということになる。個人的詩史の根源的モチーフという菅谷の指摘を踏まえて、作品が自立的に表現しているものに焦点を当てると、時間とコミュニケーションをめぐる本質的なドラマが見えてくる。「受話器のそばで」は、待ち合わせの時刻をめぐる女性の発話に終始しており、状況説明はない。女性が話している相手の顔も声も文脈も、読者には一切わからず、透明な存在である。従って、そこには、語りかけ、同意し、確認するというコミュニケーションがクローズアップされる。それは、「五時」という時刻を、誰のものでもない時間からあなたと私を繋ぐ時間に変えることでもある。「五時ね」「五時つてもうくらいわね」「五時つていいお時間ね」と「五時」をめぐる感想の変奏が、時間の共有を成立させる螺旋を描くような発話のリズムであり、そのまま詩のリズムになっている。犀星は、『女ひと』の中で、女性の感情表現について、「好き」といふたつた二文字で表現される言葉には、大変な効果のあるものである。好きね、好きになつたわ、好きよ、好きなんだもの、といふ数々の好きのあらはれは、全く何物もおよばない直情感があつた。」と述べている（「季節の声」）。あなたと私を繋ぐ簡潔な「好き」と「数々の好きのあらはれ」。核心とそれを強化する差異の仕組

みを擱んでいたからこそ、犀星は、繋ぐ発話を生き生きとリズムカルに描き出せたのである。

「五時」という設定については、葉山修平が『蜜のあはれ』との共通性を指摘しており、「作者のなかには「五時」という特別な思いがあり、それを「いい時間ね」「もうくらいわね」という感覚でとらえる、生活の堆積があつたと考えられる。」と述べている。葉山が指摘するように、『蜜のあはれ』では、「金魚」の「赤井赤子」が「いうれい」（田村ゆり子）の顔から「時間は五時、もしおてすきでございましてらお会ひくださいましと書いてあるわ」と「をぢさま」に会いたい時間を読み取っている（三、日はみじかく）。「四、いくつもある橋」では、赤井赤子に呼びとめられた「いうれい」が「五時といふ時間にはふたすぢの道があるのよ、一つは昼間のおかりの残つてゐる道のすぢ、も一つは、夕方のはじまる道のすぢ、それがすつと向うの方まで続いてゐるのね。」と応える。これに対し、赤子が「そのあひだを見きはめていらつしやるんでせう、きつと」と推測するように、「五時」とは分岐する時刻であり、始まりと終りの時刻である。「受話器のそばで」の「五時つてもうくらいわね」「五時つていいお時間ね」は、エロティックな予感を孕んだ時間として、あなたと私を繋ぐ発話に奥行きを与えるのである。

「めぐりあひ」では、「いくらたくさん逢つても／気まづくわかれる日があつたら、／つまないぢやないの、／お逢ひするのはいちどきりでいいのよ、／何十度お逢ひしても／人間のすることはみな同じだもの、／いちどきりでいいのよ。」と只の時間を固有の時間に変える緊張感の困難さを語る。逢うことは、「人間のすることはみな同じ」という平準化に墮してしまふ。このモチーフは、後に「はるあはれ」（『新潮』58巻8号、昭36・7）^註でも、歌詠みの男と関係を持った「文房具屋の夫人」に「一度だつて十度だつて同じことぢやないの。そのたつた一度といふことは物の深さはじまりなのよ。」と言わせているように、犀星の男女観に根差していることが窺える。

固有の時間の主体である女性は、男性に対して辛辣な目を向ける。詩集タイトルでもある「昨日いらつしつてください」は、不可能な要求で、男をからかう。

きのふ いらつしつてください。

きのふの今ごろいらつしつてください。

そして昨日の顔にお逢ひください、

わたくしは何時も昨日の中にもますから。

きのふのいまごろなら、

あなたは何でもお出来になつた筈です。

三浦仁は、この作品を読むポイントを「言葉の諧謔で男をからかっている軽妙な味わい」に置いて^註いる。三浦が指摘するように、「一昨日来い」(二度と来るな)という俗語を連想させながら「小意気に幾分の遊び心を伴って歌われている」ニユアンスは感じられるが、「女ごのための最後の詩集」所収、『昨日いらつしつて下さい』にも再録されている「けふといふ日」「こひびと達に代つて」「知らずにわかれた人びと」で繰返される、戻らぬ時間というテーマを置いてみると、この「遊び心」はなかなか残酷である。女にとっては「一昨日来い」であつても、男にとつて「昨日」は「茫茫何千年の歲月」(「けふといふ日」)の一つであり、「何処かに去つてしまつたものは／ふたたび戻つてくることはない」、「知らずにわかれた人びと」のである。「きのふいらつしつてください。／昨日へのみちはご存じの筈です、／昨日の中でどう廻りなさいませ。」と女は軽やかに言うが、男にとつては死の宣告にも等しい。「女ごのための最後の詩集」『昨日いらつしつて下さい』と続けて読むと、まだ生の半ばに達していない女と生の終りに近づいた男という対比的な構図が感じられる。「告別式」(「女ごのための最後の詩集」)では「わたくしまりましたとき／もう遅かつたのよ。だから何も／いへないぢやないの、／皆様に名前も告げずにかへりました。」と「告別」された亡き男に語りかけているし、「或るひとの時間」(同)では、「昨夜行つてね／けさ帰つてね／また夕方から行くのよ、／では一たいいあなたはそのやうにして／誰に逢ひにゆくの、／いつも 苦しきうに／うなつてゐるひとなのよ、／いいところぢやないわ、／けれどもその人はもう死ぬのよ、」とあつげらかんと「死」を語る。この直截な扱い方は、「死」が女の時間^註の地平線の向こう側に在るからであらう。「昨日」は肉体から抜け出しており「死」を感受する男と、「昨日」は自分

に属している女。「昨日いらつしつてください」は、異なる時間的位相にいる男に向けての女の無意識の残酷さがテーマなのではないだろうか。捨て台詞を披いて現れたような時間意識の典型が軽やかな口調で語られていく、軽さが重さに届いていることが奇妙な実存感覚を表出している。時間を身体に堆積する感覚があるからこそ、誰のものでもない時間を、あなたと私を繋ぐ時間へと変える主体になり得るのであろう。

菅谷は、『昨日いらつしつて下さい』所収の「けど」について、「《受話器のそばで》を、ひとつの往路とみなせば、『けど』は、小説から詩への復路、さいごの帰着点である。」と述べている。「けど、／だめなの。／けど、どうでも、／もう、いいわよ……」という「けど」は、菅谷が指摘するように、「混然とした〈情態〉そのものが、ひとつのひびきとして現前して、ことさらな解釈を不要のものとして」いる。場面や具体的な設定を必要とせずに、声のイメージだけで成立する詩とは、「小説を書きつくした作者にのみなしうるわざ」（菅谷）であろう。現前する声の空間という菅谷の指摘を、時間という晩年の詩のテーマに即して考えてみると、詩集未収録の作品ではあるが、「時計は停つてゐる」（『文芸』34巻1号 昭31・1）に、エロスの存在としての女性が集約されている。

ええ、

だつて

そお、

ふふ、

ぢあ。

ここに描かれているのは、時間との交合とも言えるエロスのな関係性であろう。時間を受け入れていく存在としての女性がイメージされる。これらの声は意味の文脈は持たないが、戯れる快樂の差異がそのままリズムになっている。これも、「数々の好きのあらはれ」の構造が、最も簡潔に表れている。

すらりと根元的な官能に届くからこそ、「夜までは」「去る」「問題」（いずれも『昨日いらつしつて下さい』所収）のような発話が可能になるのであるうか。「夜までは」は、「男といふものは／みなさん ぶらんこ・ぶらんこお下げになり、／知らん顔して歩いてゐらつしやる。／えらいひと、／えらくないひと、／やはりお下げになつていらつしやる。」と女は何気ない口調で男の体裁を無にしてしまう。「ぶらんこ・ぶらんこ」という悠然たるオノマトベが、可笑しみを誘う。男が「お下げに」なっていることについては、『蜜のあはれ』で「をぢさま」が、赤井赤子に「心臓も性器もおなじくらゐ大事なんだ。（略）そりや、をぢさんだつて性器といふものは、こいつが失くなつてしまへば、どんなに爽やかになるかも知れないと、ひそかに考へたこともあつたけれどね、やはりあつた方がいいし、あることは、どこかで何事かが行へる望みがあるといふもんだ。」と語る。「衢のながれ」（『中央公論』74巻10号 昭34・7）⁷⁸では、小説家である権九郎に「恥かしい物をぶら下げ、それは生きてゐるかぎりぶら下げてゐなければならぬことに、男性は時々これを回顧して此奴さへなかつたらもつと綺麗に生きることが出来るのにといふ、面白い反省を持たなければならぬものだ。実はかういふ物を下げてはゐるが、それは下げてゐないと同様にすべすべした股間の思ひ、ズボンの上からも平明な不潔感をともなはない気はいを見せるといふことが必要なのだ。」とより直接的な思ひを言わせている。権九郎にとつて、「不快感」は付き纏うが、「よはよはしい常にいたはつてやるより外に、仕やうのない雛様のやうなもの」なのである。「夜までは」には、小説で詳述されている、自分の一部でありながら扱いかねてしまう滑稽さと哀感、それ自身が自己主張してしまふ感覚が反映されている。「お天気は好いしあたたかい日に、／ぶらんこさんは包まれて、／包まれたうへにまた叮嚀に包まれて、／平気で何食はぬ顔で歩いてゐらつしやる。」と労わりとからかいの間を行くような視線である。

一方、「去る」では、「すこしばかり話をしただけで、／わづかな時間のあひだに、／あなたという男を見尽してしまつた、／あとには何ものこらない。／男は去る。／わたくしは見送る。／ぶらんぶらんしたものをお下げになり、／乞食のような男は去る。」と女の目は瞬時に男を破碎してしまう。こちらの「ぶらんぶらん」は、「夜までは」の「ぶらんこ・ぶらんこ」の暖かみはなく、女にはない過剰さの表象として露出されるのみである。『女ひと』の「季節の声」に

は、「女人は好き嫌ひの感情はつねにただの一言葉で表現してゐて、美事に突き放さなければならぬことは突き放してしまふ、たとえばいやよとか、きらひとかいふこの二様の言葉がそれである。あんたなんかきらひ、といふ短かいなかには到底追付くことのできない突き放しがあつた。」とある。断つ言葉の取り付く島の無さと繋ぐ言葉のニユアンスが、「夜までは」と「去る」にも投影されている。

「問題」は、「あんなひと／うんこをするの。／あんなきれいなひと、／どんなうんこをするの。」という率直な問いかけである。美貌の人は排泄をしないような顔をして生きていることの不思議さが、あどけない口調で発せられている。「衢のながれ」の権九郎は、「ズボンの上からも平明な不潔感をともなはない気はいいを見せることが必要なのだ。」と言つていたが、女性もそれ以上に、生き物の生臭さを見せないように生きているのである。生き物としての人間を露出させる女の目が、最も若い、少女と思われる設定に、最も端的に表れている。

四 観察者としての男性

男性が語り手である場合、女性とは異なつて、場面との距離感がある。

あなたは何時までそこにゐるのだ、

人は群れ 人は去り

円柱にもたれてあなたは誰を待つのだ、

夕刻の時はすでに去り、

あなたの眼は憎気てしまひ、

泣き出しさうである。

風さへさむく捲いてくる。

あなたの待つひととはもう来ないだらう、
僕もまた人にはぐれて此処に立つ、
この僕とあなたの間際を取持つ人はない、
その間際はたうに逸れてゐる、
あなたは此処で笑顔を失ふ、
僕も またあなたといふ瞬間を失ふのだ。

(「去る」・『昨日いらつしつて下さい』)

見知らぬ「あなた」と「僕」は、誰かを待つという時間を共有している。しかし、それは「あなた」とコミュニケーションを図る方向性は持たない。「僕とあなたの間際」は、あつたにせよ、とうに去つてしまつてしまつてゐる。ここでも、分岐点の象徴としての「夕刻」が効果的である。「あなた」は、過ぎ去つてしまつた時間に呆然としている。「僕」の鏡像でもある。「あなたは此処で笑顔を失ふ、／僕も またあなたといふ瞬間を失ふのだ。」という最終の二行は、生身の「あなた」の痛々しさが「あなたといふ瞬間」という出会いとすれ違いを象徴する抽象化された存在でもあるという、共感と想像の基盤となる感受性を伝えて印象的である。「僕」は、「あなた」と直接関係を繋ぐのではなく、想像を介して「あなた」を自分の時間意識に取り込むのである。

時間を共有していても、共有していることにはなく、時間の地平に向かう意識は、「めまひをしながら」(『昨日いらつしつて下さい』)で描かれる。「行く方にブランコがある。／君も僕もそれに乗りうつる。／めまひがつづいて睡くなる。／誰も其処から還つて来た人はない、／行くことだけがおきまりである。／すみれいろの美しい靴が見えるけれど、／僕はブランコの上で眩暈を続けてゐる。」と「行くことだけがおきまり」の地点とは、死の表象であろう。「君も僕も」共にブランコに乗り移つたにも関わらず、「君」は「すみれいろの美しい靴」を見せて一足お先に行つてしまつたようである。

「茫茫何千年の歲月」（「けふといふ日」）や「深い溝や 淵のやうなところ」「死体となつて墜ちてゆく」（「先きの日」と無限の闇として表象されている中で、このような夢幻的なイメージは珍しい。「地球の良日」（『新潮』51巻12号 昭29・12）という詩集には収録されていない作品がある。ここでは、夕映えの中で、過去に出会つた女性たちが次々と回想されていく。「あの女も どのひとと、／みんなが不倖で文なしでだから元気で、／ゆふ映えはなんて美しいものなんでせうね、／あの女も この女も 女のなかの女も、／街が楕円形になり真ん円くなり、地球儀になり、／四角八角ゆがみゆがんで崩れてしまひ、／みんな数寄屋橋の夕映えにまぎれ込んでしまふ、……／どの女も あのひとこのひとと。」とかつて、『星より来れる者』（大鏡閣 大11・2）の「ある雑景」や『田舎の花』（新潮社 大11・6）の「花卉」で試みたような畳み掛ける饒舌体を彷彿とさせつつ、幻影の群像が夕映えに吸い込まれていくイメージが描かれる。夕映えは過去を想起させる地平であり、一区切りの時間が終焉を迎える地平でもある。「めまひをしなが」の地球を舞台に見立ててのサーカスのようなイメージは、このような終末の祝祭感と通底しているようである。

「ブランコ」というモチーフは、『鉄集』（椎の木社 昭7・9）の「僕の遠近法」「映写機」「地球の裏側」で用いられていた。「映写機」では、「僕はブランコに飛び込む。／ブランコに逆さまに下がるのだが、／そこで人生観も遠近法も一変する。／僕は出鱈目になり、／僕は映写機を叩きこはす、／機械は粉微塵にこはれてしまふ。／僕の想像力は稀薄になり、／めまひを感じながら／支離滅裂な景色を継ぎ合はしてゐる。」と「ブランコ」は速度に満ちた都市文化の表象であり、「めまひを感じ」ている「僕」は、攪乱された身体で祝祭的空間に陶醉している。「地球の裏側」では、「ブランコは快活で、／木の葉にすれすれになるところまで、／僕を運んで呉れる。／僕は女にふれるやうに、／木の葉に頬を擦り寄せる。／僕は地球を幾廻りかする。／僕は地球の裏側まで見てしまふ。」と空中に飛び出していくような遠心力の快感が、より率直に描かれている。これらに比べて、「めまひをしなが」においては、「ブランコ」での飛翔はそのまま生の時間の向う側への跳躍である。そして、「君」と乗り移つても、跳躍は個の体験としてしか訪れず、終末の祝祭感に連動していく。

語り手の関心は、時計によつて計測される時間と個の意識との交錯にも向いている。「うとうとすれば」（『昨日いら

つしつて下さい」は、「時計は今夜も打ちつづける、／十一時打つてうとうとすれば、／もうすぐ十二時が打つ。／その間にうとうとし、／つゝに十一時と十二時とが続いて鳴り／かぞへると二十三も時計が鳴つてゐるのだ。」と意識によつて伸縮する時間を描く。これは、「おぼえてゐる」(同)の、「けふの時間と、／きのふの時間。／明日のいまごろの時間、／十年前におぼえのある時間の永さ。／二十年前の或る日の時計の針と、／その日の永い何十分間。／同じところを往来してみる時計は、／どれもきのふと同じことなのだ。／あすもあさつても同じことなんだ。」という規則正しく循環を繰返す客観的な時間、永劫回帰する文字盤上の時間への驚嘆に立脚している。犀星の金沢時代からの友人、田辺孝次の息子で、犀星と親交のあつた田辺徹は、犀星と時計について、「小さく精密な機械、とくにそれが目に見えない奥処で、正確な時間を美しく刻んでいる腕時計に、犀星は一目置いていた。家中の時計をびつたり合わせておくのも好きで、精密な作業をする時計に対する犀星の感情にはまるで宗教的ともいおうか、ほとんど時計崇拜アニミズムのようなものがあつた。」と回想している。犀星は、永遠のリズムを計量していく装置として、時計に超越的な感情を持つていたのである。

永遠のリズムを刻んでいく時計と人間の意識が交わるところに、詩想が生れる。「一時間」(『昨日いらつしつて下さい』)では、「十二時打つたらやすみませう。／一時打つたら起きませう。／ねてゐるひまは一時間、／気狂ひにならなければいいがね。」と憚ることなくナンセンスを語る。「チラチラするもの」(同)では、「チラと見ただけでいつもお終ひになる。／チラと見たものはいままでに見たことのないものである。／時計はいつ見てもおなじところだ。／けさから見つづけてゐるが、もう夕方である。」と瞬時の把握が痕跡をとどめぬ人間の視覚と、恒常的に瞬時が巡つてくる時計との相違に実存感覚を覚えてゐる。これは、時間感覚と計量化される時間が、当たり前のように生活の中で共存している面白さであり、不思議さである。そして、習慣化され気にも留めない事象を異化してしまう、犀星の感性の新鮮さである。

美と排泄をめぐる素朴かつ本質的な女性の疑問が、「問題」であつたが、それと対になるのが、「象とパラソル」であろう。「きみ」は、「パラソルを手に携ち、顔をかしげ、／につと嬌笑つて 気取つて、／きみは象を背景にして撮影し

た。」と動物園での記念写真が撮られる。第二連では、「きみは象が巨きいと言つて驚いた。／きみのはだかほど大きいものがないのに。／絵本、ボロの古洋服、／古新聞の活字の間を、／象はそのそりと歩いてゐた。／生きてゐる証拠には 見なさい、／うまのくそのようなくそが一盛りあつた。／象はくそは踏まずに避けて歩いてゐた／うまいもんだ。／きみはまた象の前で写真を撮つた。」と「絵本、ボロの古洋服、古新聞の活字」という持ち込まれた生活の残滓によつて、お出かけの空間は猥雑に活性化される。更に、象が「生きてゐる証拠」として、「うまのようなくそ」に注意を促すことによつて、お出かけの記念写真は、「象」と「きみ」が二つの肉体として写り込んでゐる實在性が前面化される。男性の観察する目は、排泄こそが生きている身体の証であると捉え、敢えて視界に入れる。これは、決して理屈っぽい地点から認識されているのではない。これより前の「愛と尾」(『人間』4巻1号 昭24・1)は、「犬は何時でも／くそがしたいのだ／そこで尾がいたのである」「犬は悲しくなると／くそをする／いつでもくそがしたいのだ」と排泄の欲望と身体・感情を直感的に繋げ、超論理的に断定している。瞬時に対象の本質を露出させてしまう女性の目と、対象の本質を捕捉する男性の目。犀星は、本質との関わり方を異なる性によつて描き分けている。

犀星は、過ぎ去つた時間の行方に〈死〉を実感し、生の終焉に祝祭的空間をイメージした。「晩年」所収の「始まりとをはり」では、「きみにはきみの／あなたにはあなたの果がない／あなたや君の果が何処にあるのか／果が見えて来ないのだ／それぞれにうつくしいのに／始まりは何時もあるのだけれど／三人の五人の十人のと 果がない」と現在から終りは見えないことを率直に述べている。そんな生の時間のリアリスト、犀星に、晩年の時間の当事者はどのように描かれるのであろうか。詩集タイトルと同じ「晩年」は、晩年という時期における幻想の再会を描いている。

僕はきみを呼びいれ

いままで何処にゐたかを聴いたが

きみは微笑み足を出してみせた

足はくろずんだ杭同様

なまめかしい様子もなかつた
僕も足を引き摺り出して見せ

もはや人の美をもたないことを白状した

二人は互の足を見ながら抱擁も
何もしないふくれつつらで

あばらやから雨あしを眺めた

「足」は、犀星のエロスの表象であった。「お艶の首」(『詩歌』4巻12号 大3・12)では「祭り込め この足／足の畜生／かついで跳れ この足／天知る地足る足／まことは愛と肉ばかり」、「電線渡り」(『異端』2巻1号 大4・1)では「天の足／いんよくの足／狂気の足／天真爛漫の足」「プロテアの足／やはらかく美しくすんなりとして／ずつと伸びたり」と熱っぽく官能的に「足」が歌われている。それは、「くろずんだ杭同様」であり、相手の女性のみならず、語っている「僕」の「足」ももはや「人の美をもたない」。杭という形容は、これ以前の作品でも、老年の表象として見られる。「俗調」「膝」悲曲の一章(『日記』昭25・1・23)では「人生五十年／ばらの花なぞ犬に喰はれてしまへ／あの膝もこの膝も／みんな棒杭のやうになつてしまつた。」「悲曲」(『詩界』2号 昭26・9)では「あなたの膝を削つて見たら／白いばらが こぼれさう、／そんなばらなぞ どうでもよい／ほんとに膝がお好きなら。」「人生六十年／白いばらなぞ犬にくはれてしまへ。／あの膝 この膝／みんな棒杭になつてしまつた。」と老いていく肉体のやるせなさが俗謡調で歌われている。随筆「一人の爺さんの話」(『北国新聞夕刊』昭27・1・3^盛)でも、「私自身は顔にしわができ、手足が棒杭のやうになり、そして、たうとう舌切雀のぢいさんのやうになつて了つた。」と自画像が描かれている。老いた肉体を象徴する語であるが、「晩年」では俗謡調で投げやりに歌うのではなく、正面からその寒々とした光景、「抱擁も／なにもしないふくれつつら」という互いの惨状に互いが共感も同情もできない光景を描いている。そんな二人が、おそらくは、向き合うのではなく並んで坐っているのだろう、「あばらやから雨あしを眺め」

ている様は、一抹の諧諷味がある。どうにもならないお互い様の現状を描いてみせたところに、晩年という時期のリアリティがある。

これに比べて、「誰かに」は、より素つ気無く、事実を投げ出すように語っている印象を受ける。

誰かに逢ひ

話をしかけられた

くらい中であつた

何かの中心に私はゐた

誰かに逢へる予感はくづれ

誰かはすぐに去つて了つた

つまらないただの女であつた

女は長い赤いきれを引きずり

それをふむやうな位置に私はゐた

富岡多恵子は、犀星晩年の詩について、「詩」をいやというほど知った「小説家」の「詩」であると言い、「詩といふものの衣裳へではなしに骨とかスチとかへの、無造作ななぐりこみ」であると述べる。「晩年」「誰かに」については、「事実の状況は詩のカタチが保護し、詩のカタチという技術が隠蔽するが、悲痛はそこからはみ出して来る。書き手が、悲痛という事実をはみ出して見せてもいいと思つているからである。」と詩の形式や修辞や美意識をめぐる幻想を壊した地点に、晩年の心象が表出され、逆説的に詩が成立していると述べている。「現実の中に事実を認識」し、その核心を掴み取るという富岡の指摘は、そもそも、口語自由詩の原点なのではなからうか。富岡は、これらの作品の核心は、「詩作品という虚構」ではなく「ヒトの「晩年」にある悲痛という事実」の表出にあると述べる。その「事実」

が、説明ではなく、重層的なメタファによって表出されているからこそ、「詩」なのである。闇の中で、自分の身体が察知する範囲の外は溶解していくような感覚。話しかけた誰かもすぐに立ち去っていく。「つまらないただの女」と言い切ってしまう「晩年」の目の苛酷さ。身体性の衰えと、保持されている目の捕捉力。そして、「つまらないただの女」は「長い赤いきれ」を引き摺っていく。これは、犀星が育った兩宝院や西の廓界限、そこで関わった女性達の圧縮された残像である。「性に目覚める頃」（『中央公論』34巻10号 大8・10）の賽銭を盗む女の「やや明るい紅の帯」や「幼年時代」（『中央公論』34巻8号 大8・8）の「姉」が「赤い布片きれ」で縫ってくれた地藏の衣や、「海の僧院」（『報知新聞』大9・3・11〜4・17）の尼僧「丹嶺」が法衣に縫い付けていた「赤いちりめんの袖ぐち」等が想起されてくる。それらの、性と成長に纏わる事象が、帯でも襦袢でも縮緬でもなく、最も単純なモノに還元される。「私」の「それをふむやうな位置」という愛憎が入り混じった関係性の表象。ここに描かれているのは、「悲痛」という一語には収斂されない、晩年期の身体を通じた狭まる空間と総括された過去との交錯である。観察する男性は、エロスの時間の果て、死の手に訪れるであろう事象を想望するのである。

終りに

晩年の犀星の詩のメタファは、喩えるものと喩えられるものという前後関係を超えて、相互にメタファとなり、自立した世界を成立させた。それは、見ることを徹底した果てに訪れた世界の見え方である。相違と類似が繋ぎ直され、新たな世界が開示される。

自分その中に容れている世界が、身体感覚を通して内在化され、自分の一部と化していく反転する肉体性は、晩年のテーマである、時間をめぐる実存性に根差しているだろう。自立するメタファを操る主体としての語り手は女性である。女性は、あなたに語りかけることによって、誰のものでもない時間を二人が共有する時間に変え、あなたと私を繋ぐ。果ては、時間を受け入れる、体の中で時間が止まっているような感覚が、意味を持たない声のみで表出される。語

りかけていく、あるいは声を発する差異と反復が、詩のリズムである。

これに対し、男性が語り手である場合、あなたと私を繋ぐのではなく、引いた距離からあなたを観察し、あるいはあなたを横に置いて、時間意識を確かめようとする。あなたは、私の個の時間意識を映し出す、並立的な存在なのである。計量される時計の時間と身体感覚の交差をめぐるモノローグ的発話が、詩のリズムとなる。

犀星は、自己を先験的に意味づけてくれる（母なるもの）の欠落を、（女ひと）の造形によって充填し、存在の極限を声として表出した。仮構された性（女性）の中で主体の核心が成立し、現実の性（男性）は主体の外に押し出されて観察者となる。晩年の犀星は、二つの性を介して声と意味を往還しつつ、生の根源をめぐる固着を解き放ち、存在の本質を表出していったのである。

注

- 注1 『定本室生犀星全詩集』第3巻（冬樹社 昭53・11）の「解題」（『続女ひと』）
- 注2 『室生犀星全集』第2巻（新潮社 昭40・4）の「月報」。
- 注3 これについては、九里「肉体的還元という起点——戦時下の犀星詩——」（宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所『研究年報』44号 平23・3）において考察した。
- 注4 引用は『室生犀星全集』第11巻（新潮社 昭40・1）による。
- 注5 引用は『室生犀星全集』第12巻（新潮社 昭41・8）による。
- 注6 引用は注5に同じ。
- 注7 引用は『蕤陶』（有信堂 昭35・1）所収による。
- 注8 引用は注7に同じ。
- 注9 引用は注7に同じ。

注10 引用は『定本 西脇順三郎全集』第1巻（筑摩書房 平5・12）による。

注11 引用は『日本の詩歌3 石川啄木集』（中公文庫 昭49・8）による。

注12 引用は『現代日本詩人全集』12 草野心平・高橋新吉・中原中也・尾形龜之助・八木重吉・逸見猶吉集』（創元社 昭29・4）による。

注13 引用は『三好達治全集』第3巻（筑摩書房 昭40・12）による。

注14 菅谷規矩雄『近代詩十章』（大和書房 昭57・10）の「室生犀星——詩の初期と晩期」。

注15 葉山修平『「昨日いらつしつて下さい」』『「蜜のあはれ」を読む』（『室生犀星研究』15輯 平9・6）

注16 引用は注4に同じ。

注17 引用は注5に同じ。

注18 三浦仁『室生犀星 詩業と鑑賞』（おうふう 平17・4）の「作品鑑賞／『昨日いらつしつて下さい』」。

注19 注14に同じ。

注20 引用は注4に同じ。

注21 田辺徹『回想の室生犀星——文学の背景——』（博文館新社 平12・3）の「野にある人」。

注22 引用は『誰が屋根の下』（村山書店 昭31・10）による。

注23 富岡多恵子『近代日本詩人選』 室生犀星（筑摩書房 昭57・12）の「詩の晩年」。

注24 以下、「性に目覚める頃」「幼年時代」「海の僧院」の引用は『室生犀星全集』第1巻（新潮社 昭39・3）による。

* テキストは『定本室生犀星全詩集』全3巻（冬樹社 昭53・11）による。振り仮名は適宜省略し、原則として旧字体は新字体に改めた。
なお、著作の初出は『定本室生犀星全詩集』の「解題」及び『室生犀星文学年譜』（室生朝子・本多浩・星野晃一編 明治書院 昭57・11）による。

漢語系感謝表現の源流

田 島 優

はじめに

感謝表現の発想法の変化に関しては、田島優（二〇〇九）において今後の課題として次のようなことを列挙した。

- ・発想法の変化がなぜ生じたのか。またなぜその時代なのか。
- ・感謝表現において、和語から漢語への動きが見られるのはなぜなのか。
- ・感謝表現が単一方向から双方向への言語行動へと変化したのはなぜか。

本稿では、これらの課題の二番目に挙げた漢語系感謝表現の出現について考察していこうと思う。すなわち、中世後期から近世前期に使用されるようになった漢語系感謝表現である「冥加無い」「勿体無い」「慮外」という表現が、どのように出現してきたのか、またなぜこの時代に出現してきたのかについて考えてみたい。

一 キリシタン資料での扱い

漢語系感謝表現のうち、中世から近世への過渡期に作成された『日葡辞書』（一六〇三〜〇四年）において感謝表現として意味記述されているのは、先に挙げた中では「冥加無い」だけである。見出しは「冥加」であるが、感謝表現と

して使用されるのは「冥加も無い」の場合である。

Miōga ミヤウガ (冥加) よい運命。例 Miōgamonai hito. (冥加も無い人) 不運な人、または、不仕合せな人。『Miōgano tōugita hito. (冥加の尽きた人) 同上。この語は、時には、ある人が自分に相応した程度以上に、あるいは予期した以上に恩恵や厚誼を受けたのに対して、深く感謝する場合にも用いられる。例。

Miōgamonai coto. (冥加もないこと)

また『天草版平家物語』(一五九二年)には、感謝の意を表していると思われる「冥加無い」の使用例がある。

VM. Cono chāu nōde igūto tōuide, machitto vocatariare.

(右馬) この茶を飲んで息を継いで、まことに お語りあれ)

Q1. Ha, coreua catajigenai; miōgamo nai vohade coso gozare; gocuto miyemaraxita.

(喜) はあ、これはかたじけない；冥加もないお茶で、極と見えまらした) (第十 pp.284~285)

ここではまず感謝の意を示す挨拶表現として「かたじけない」を用いて、さらに「冥加もないお茶でこそござれ」と感謝の内容を表しているようである。「かたじけない」はその当時においてごく一般的な感謝表現であった。『日葡辞書』には次のように説明されており、感謝表現であることが明示されている。

Catajigenai カタジケナイ (辱い・忝い) お礼の言葉。あるいは、ある事に対して謝意を表する言葉。

なお、先の『天草版平家物語』に用いられていた「冥加も無い」の例に対して、その「ことばのやわらげ」では次のような説明が施されている。

Miōgamo nai. Mottaimo naitoyū coto. (冥加もない 勿体もないと言ひこと)

この説明から「冥加も無い」＝「勿体も無い」の關係が窺える。すなわち「冥加も無い」が感謝表現であれば、同じく「勿体無い」も感謝表現ということになる。ただし『日葡辞書』の記述からは「勿体無い」が感謝表現であることは窺えない。

Mottainai. モットイナイ (勿体ない) 堪えがたい(こと)、または、不都合な(こと)

「勿体無い」については、キリシタン資料ではロドリゲスの『日本大文典』（一六〇四年）第二卷第六の「品詞」の項に、文中での使用例が二例見られる。しかし、いずれの例も相手からの厚意が関わっていないことから、感謝表現ではなく「堪えがたい」や「不都合」の意味として解釈されるものである。

・Issai vosoruru tocoro naitoua vosoroxiya! Mottainai mottainaya. Monog.^(註)
(一切恐るる所ないと恐るしや。勿体ない、勿体なや。)

〈訳〉死後恐れるべきものがないと言ふとは、何とまあ恐ろしく、言ふべからざる事であらう。「物語」(判官御覽)にてやらあ熊野参りの昌尊に繩をかくるとは勿体ないと御錠あれば、云々。)

「慮外」についても『日葡辞書』の記述を記しておく。ともに補遺での項目である。

Riognai リヨグワイ(慮外) Vomoino foca. (おもひの外) はからずも、または、思っていたのとは違つて。
Riognaina リヨグワイナ(慮外な) 思っていたのとは違つて起つた(こと) 文書語。

この記述からは、「勿体無い」と同様に、「慮外」がその当時感謝表現として用いられていたを窺うことは困難である。漢語系感謝表現ではないので、本稿においては詳細には検討しないが、中世後期頃から使用され、現在でも代表的な感謝表現として使用されている「ありがたい」についても少し見とおそう。『日葡辞書』に見出し語として採用されており、また『日本大文典』にも用例が見られる。なお『日葡辞書』の「アリガタヤ」の用例は、『日本大文典』の「客物語」によるものである。

Arigatai. アリガタイ(有難い) 神聖な(もの)、または、感謝や尊敬に値するような(もの)。『また、珍しく
下手な(もの)』 Arigatasa. (有り難さ) Arigató. (有難う) 『日葡辞書』

Arigataya. アリガタヤ(有難や) 尊敬、崇敬、感謝の意味を示す語。例 Ara arigataya tótoyai. (あら有難や、
尊や) なんと神聖な、崇め尊ぶべきことださう。 『日葡辞書』

Ara arigataya, tótoyay : cono zaxiquino sannintomoni tentóno vonaureminio comutato zonzuru.

Quiaeu Monog.

(あら有難や、尊とや、この座敷の三人共に天道の御憐みを蒙むつたと存ずる。「客物語」) (『日本大文典』)
Macotoni arigatai voncocorozaxinite gozasoro, queoua mata vehunite vofcuredzureni gozasorouan fodoni
saqueno susumebayato zonji soro. Kenju vtrai.
sagueno susumebayato zonji soro. Kenju vtrai.
(誠に有難い御志にて御座候、今日は又雨中にて御徒然に御座候はん程に、酒を勧めばやと存じ候。 「千手謡」)

(『日本大文典』)

両書から「ありがたい」が感謝の意を表していることが確認できる。ただし、『日葡辞書』と『日本大文典』の「客物語」の例からは「ありがたい」が神仏に関わる感謝表現のように思われる。しかし、本稿でこれから見ていく貴族の日記などの用例によると、「ありがたい」が必ずしも神仏関係に限定されている表現とはいえない。

・裏松^{ヨリ}孝継朝臣^ニ例直垂・帷賜之、難有々々、即伝遣也。

(『教言卿記』 応永一三(一四〇六)年六月二九日)⁽⁴³⁾

・抑彼讚事、隆増如形一声計伝置候て、上様申入候条、冥顕之至、且者歡喜、且者其恐候哉、委細被仰下候、難有畏入候、兼又両種重宝下給候条、凡過分之至極

(僧隆増書状『醍醐寺文書』 永享九(一四三七)年二月五日)

以上見てきたキリシタン文献における感謝表現についての扱いをまとめてみる。『日葡辞書』において、和語の「かたじけない」はお礼の言葉として扱われている。また同じく和語である「ありがたい」も感謝の意を表す表現である。ただし、「有ることのまれな高貴・神聖な対象に対する尊崇の念を主として、それに伴う感謝の意を表し」(『時代別国語辞典 室町時代編』)ているとされる。一方漢語系感謝表現では、「冥加無い」は「冥加も無い」の形で、ある場合に感謝表現として使用される。「勿体無い」は、『日葡辞書』や『日本大文典』からは「堪えがたい」や「不都合」の意味しか見られない。ただし『天草版平家物語』の「ことばのやわらげ」では、「冥加も無い」の意味説明として「勿体も無い」が当てられており、両者は同義であったことがわかる。そして『天草版平家物語』の「冥加も無い」の箇所は、

「堪えがたい」や「不都合だ」の意味ではなく、感謝の意を表しているようである。「ことばのやわらげ」の記述通りであれば、「勿体も無い」もある場合には感謝の意を表すこともあったといえよう。なお「慮外」については、『日葡辞書』では、「思っていたのとは違つて」という「意外さ」を表しており、この記述からは「慮外」が感謝表現であったことを推測するのはむずかしい。

二 「冥加無い」と古記録・古文書

一六五〇年に刊行された、ことばの乱れについて言及した書である『かたこと』には、ある田舎では「冥加無い」が貴人の訪問に対する感謝表現として使用されていたことが確認できる。この記述によれば、その当時京都ではこのような場合には「冥加無い」が使用されていなかったようである。

・然るを、此ころかたつ田舎人の云るを聞侍れば、けりやう尊貴の人の疎屋へ御入あるやうのおりふし、あるじがたの人の言葉に、さて扱もくけふの御成は冥加なひ御ことにてさふらふなどいふこと侍り。これもてのほかひがことなる是以外の僻事成べしと云り。冥加に叶ひて侍るなどとはいふべきこと也。但冥加無の無は無の字の心にはあらで、な、といへる付言葉にや。縦へば物のたらはぬことをはしたとも申し、はしたなきともいふ。又ははらぐるなる事をきたなきなどいふやうのなき歎。しからば、冥加なひは、只冥加なといふ言葉なりとの遁れも侍るべし。

(巻一)

このような記述がなされたのは、著者である安原貞室には「冥加無い」に生じた意味の転用が理解出来ていなかったのである。貞室は、身分の高い人に対して「冥加無い」(神仏の恵みが無い)と挨拶するのは失礼にあたり、「冥加に叶ひて侍る」(神仏の恵みに叶っています)というべきであると考えたのである。

貴人が訪問した際の感謝表現としての「冥加無い」の使用は、戦国時代の武士の書簡などに見ることができ。例えば前関白九条政基の『政基公旅引付』に使用例がある。『政基公旅引付』は、政基が家領であった和泉国日根荘に下向した、文亀元(一五〇一)年三月から永正元(一五〇四)年一二月までの日記である。その最初のあたりには政基が日

根莊へ下向した際の書簡が記録されている。それは自分宛の書簡であったり、自分に関わる内容であったりする。

・ 下守護弥九郎者御下国目出存、殊渡御無冥加候、尤雖可懸御目、四五日以外歡樂之間無其儀候、必御在庄之間^(注4)致祇候可申入之由懇切之返事也
(文龜元年三月二十九日)

(下守護弥九郎は、御下国目出存じ、殊に渡御、冥加なく候。もつとも御目に懸かるべしといへども、四、五日もつての外の歡樂の間、その儀なく候。必ず御在庄の間に祇候を致し、申し入るべきの由、懇切の返事なり。)

・ 就中如御状御家門御下向、忝過分至候、無冥加被存候、万事可然様御取合奉憑候、恐々謹言

(文龜元年四月五日)

(就中、御状の如く御家門御下向、忝く過分の至りに候。冥加なく存じられ候。万事然るべき様、御取合、憑み奉り候。恐々謹言。)

前者は、九条政基が堺の上下兩守護の館へ挨拶のために立ち寄つたが、兩守護ともに病気を理由に対応せず、それぞれの申次が代わりに丁寧な返事をした。その際の下守護であった弥九郎(細川政久)から政基への返事の内容を記したものである。政基が和泉国へやつて来たことに対して「無冥加候」と述べている。後者は、上守護であった細川元常の守護代であった五郎次郎(松浦守)から室町幕府管領の細川政元の内衆であった安富元家への返事である。その中で、「御家門(九条政基)」が和泉国にやつて来たことに対して「忝過分至候、無冥加被存候」と述べている。ここには「忝過分至候」という表現とともに使用されている。「過分」も古文書類にはよく使用される感謝表現である。「過分」については第五節「過分」と古記録・古文書」で改めて考察する。

古記録や古文書類を見ていくと、「冥加無い」は訪問時だけでなく幅広く使用されていたことがわかる。例えば『毛利家文書』では、天文八(一五三九)年九月二八日付けの内藤左京大進(内藤隆時)宛毛利元就の「請文案」に次のような例が見られる。

・ 謹言上仕候、抑先日対興禪寺、愚意之通漏泄候処、達上聞、御書頂戴、剩被載誓言候、誠無冥加、為恐之至、非言語之所及候、後証之家珍不可過之、何面目如之哉、忝存候、弥可勵分際之忠節之由、宜預御披露候、恐惶謹言

私の考えをお聞き下さり、そして書状をいただき、その上そこには誓言まで記されていた。そのことに対し「誠無冥加」と述べ、恐れ多くてことばで表すことができないと感謝の意を表し、忠節を誓っている。

また『細川家史料』^(註)には、細川忠利が肥後への帰国にあたって、熊本城普請について將軍家光への上申の取り次ぎを様々な人に依頼した、その礼状である寛永一三(一六三六)年八月三日の書状が多数収載されている。そこには「冥加無い」の使用が認められる。次に挙げるのは、月番である老中阿部忠秋から家光への上申にあつての老中土井利勝宛礼状であるが、酒井忠勝宛の礼状も同文である。両者への取りなしのお札に対しては「忝ない」が使用されており、「冥加無い」は使者が家光から帷や道服などを拝領したと、熊本城普請に対し家光が認めたことに対して用いられている。

・在所へ罷著候付而使者を上申候処、御前へ被召出、御帷御単物三・御道服一拝領、無冥加儀共奉存候、可然候様ニ御取成、可御忝候、殊熊本普請之儀御番ニ付而豊後殿被仰上候処、此前被仰出候ニ不相替被仰出、無冥加儀と奉存候、是又御取成、可忝候、恐惶謹言

また、家光への上申の役目を果たした阿部忠秋宛の書状では、最初に熊本城普請についての上申の依頼に対しては「忝奉存候」とだけ述べ、使者がお目見えをし家光から道服などを拝領したことに対してはやはり「冥加無い」が使用されている。

・次、在所へ参候儀ニ使者を上申候処、御前へ被召出、其上御道服・御帷子拝領、冥加も無御座儀ニ御座候、恐惶謹言

また、春日局に対しても、家光が私の望みをお聞き下さったことの御礼を述べている。そこには家光への感謝表現として「冥加無い」が使用されている。女性への書状であるので仮名が主体になっている。

かゝ殿へは、上さま御直ニ、われく事をきもいられ候様ニと仰せられ候よし、其分にて候哉、かたしけなき儀、是のみにかきらす候へ共、あまりみやうかなく候まゝ、此御れい、かならずく仰上られくたさるへく候、そのため申入れ候、めてたくかしく

また、その前年の寛永一二（一六三五）年正月二日には、細川忠利の子息である光尚が痲瘡にかかり、家光からのお見舞いに対して、家光への御礼の取りなしに対する書状や、御礼を述べている多くの書状が収載されている。そこには多くの人への書状が収載されており、様々な感謝表現が見られる。少し挙げてみると次のような表現が使用されている。

・〈家光に対しての礼〉 誠以忝儀共冥加至極存候

（松平信綱・阿部忠秋・三浦正次・阿部重次・太田資宗銘々宛書状）

・〈春日に対する礼〉 扱く御ねん入候て過分に存候 〈家光に対する礼〉 忝仕合、申上候はんやうも御さなく候

（寿林宛書状）

・御心つけのたん、過分あさからす存候 〈家光に対する礼〉 かたしけなき 御意 冥加も御さなき仕合、御礼を可申上やうも無御座そんし奉り候

（春日局宛書状）

これらの用例から、「冥加無い」はかなり身分の高い人物に対して用いられる感謝表現であることがわかる。前稿「冥加無い」考（以下、田島（一九九二a）とする）では、御伽草子や謡曲、狂言における「冥加無い」の用例を扱ったが、そこでも高貴な人物に使用されていた。いずれも『かたこと』同様会話文に用いられており、話しことばでの使用であり、書きことばであった「冥加無い」が話しことばでも使用されるようになったことが窺われる。

「冥加無い」が感謝表現として使用される場合の語構成については、『かたこと』に見られたように、非存在の形容詞の「ない」ではなく程度の甚だしさを表す接尾辞の「ない」として扱われることが多い。しかし、「冥加も無い」のように「冥加」と「無い」の間に助詞の「も」が挿入されたり、「ない」が「ござない」のように敬意表現をとる場合がある。服部四郎（一九五〇）は附属語と附属形式とを見分ける原則を上げているが、「冥加無い」の場合はその原則Ⅱの「二つの形式の間に別の単語が自由に現れる場合にはその各々は自由形式である」に該当しており、「ない」は自由形式、すなわち形容詞の「ない」と見るべきである。

三 「勿体無い」と古記録・古文書

先に挙げた『政基公旅引付』には「勿体無い」も使用されている。ただしそこでの意味用法は感謝表現ではなく、『日葡辞書』の記述にある「堪えがたい」や「不都合」の意ばかりである。

・九条殿様御領日根野・入山田事、御押妨之儀未休之由驚存候、於此御領者不可^御昆^御余候、嚴重被仰付候者、被対当方可為無御等閑驗之処、如此御無沙汰無勿躰候

(文龜元(一五〇一)年三月二二日 安富元家から和泉下守護代である斎藤勝実宛書状)

(九条殿様御領日根野・入山田の事。御押妨の儀、いまだ休まざるの由、驚き存じ候。この御領においては、自余に混すべからず候。嚴重に仰せ付けられ候はば、当方に対せられ、御等閑なき驗たるべきのところ、此の如き御沙汰、勿躰なく候。)

この書状では、日野根や入山田は九条政基の御領であるにも関わらず、上・下守護がいまだに法に背いてその領地に入り込んで勝手にふるまっている。そのことを「堪えがたいことだ」と述べているのである。次の年の文龜二年一月一三日付けの安富元家から斎藤勝実への書状においても、「勿体無い」の使用が認められる。

・就日野根・入山田村之事、尊報之趣驚存候、以代々御支証御当知行之間、被成御下知上者速可被止其妨御事候、但如承子細候者、被出帶御証文於 公方可有御落居之処、不能其儀時者一向自由御申候哉、無勿躰存候

(日野根・入山田村の事につき、尊報の趣、驚き存じ候。代々御支証をもつて御知行の間、御下知を成さる上は、速やかにその妨げを止めるべきの御事に候。但し承る如き子細に候はば、御証文を公方に^御出^御帶^御せられ、御落居あるべきのところ、その儀に能はざる時は、一向自由の御申しに候や。勿躰なく存じ候。)

斎藤勝実からの書状に対し怒りを示している。九条良政ははつきりとした証拠があつて、日根野村や入山田村を支配しているのであるから、その邪魔をやめるべきである。しかし聞くところでは、將軍足利義澄による裁断がうまく進ま

ない時は、思う存分に気ままな振舞いをすると言っているようだが、それは「堪えがたいと思う」と述べている。

古記録や古文書類を見ていくと、「勿体無い」の多くの使用例を拾うことができる。ただし、『鎌倉遺文』にみる中世のことば辞典（ことばの中世史研究会編 二〇〇七年 東京堂）における「勿体ない」の項によると、中世ではおもに「あるべきさまをはずれていて不都合である」（『日国』）という語義で使用されていたようである。また『鎌倉遺文』では「無勿体」と「無物体」とが同義で使用されており、ほぼ同数の用例が見られるという。東京大学史料編纂所のデータベースで検索すると、「無物体」は東寺百合文書や金沢文庫文書などに見られる。これらの史料には「無勿体」も同じく使用されている。この併用は「勿体無い」の「勿体」がもともとは「物体」であったことを証明するものであり、『伊呂波字類抄』の「も」の韻字に「物体」が登載されているのも納得がゆくところである。ただし、『下学集』が「勿々無也 勿躰二字即無正躰義也」と述べているように、一五世紀中頃には「勿体」が「物体」であったことがわからなくなっているようである。そのことよって「勿」を否定辞として「無」と同義と解釈するようになり、「無勿体」では二重否定になってしまい、語構成と語義とが一致していないと考えるようになる。そこで、近世の学者達は「勿体」|| 「物体」を証明するために、「物」の字がもともとは「勿」と記述している中国の『六書正譌』などを探し求め、それを利用して説明しなければならなかったのである。^(註⑩)

先に述べたように、「勿体無い」の多くの例が「不都合」・「堪えがたい」という意味であるが、中世も後期頃になると感謝表現を表していると思われる例が見受けられる。『実隆公記』に次のような使用例がある。^(註⑪)

・彼哥合判詞、午後書終之、遣阿野許。及晩相公来。不審所々被尋之。自是直可持参云々。則又有使者、令披露之处、費筆之条無勿体、言語道断殊勝之由被仰云々。畏申了（永正七（一五二〇）年五月一六日）^(註⑫)

日記の内容は次のようである。將軍である足利義尹から依頼のあった哥合わせの判詞を午後に書き終え、伝奏であった阿野季綱の許に遣わした。息子である公条（相公）が晩に来て不明な箇所についての質問があり、これからすぐに持参しなければならぬとのことである。また使者が来て、將軍足利義尹から、判詞をわざわざ書いて下さったことは「勿体無い」ことであり、大変感心なことであるという仰せがあった。そして恐縮して申し上げた。

また『毛利家文書』にも次のような使用が見られる。

・ 連々心底之通申上候処、為御返事、御内証以御神文被仰聞候段、誠之無勿躰存候、(中略)被 仰聞条々、生々
世々忝奉存候事
(慶長六(一六〇一)年九月一〇日 毛利宗休(元政)起請文 榎中(榎本元吉)宛)

・ 先度者御内証、宰相様御同前(秀で)具被仰聞候段、誠々生々世々忝次第、中々申上も疎候、幾度申候ても、今度不
思儀之成行にて、去年已来彼是御心遣、さても無勿躰存計候、
(年未詳) 八月七日 毛利宗休(元政) 榎中宛書状)

ともに文の最後に「右於偽申者、日本国中大小之神祇、弓矢八幡、別而者嚴嶋両社大明神、愛宕、白山、天満大自在天神之可罷蒙御罰者也、仍誓紙物件」(慶長六年の書状による)のような記述があり、安芸毛利氏の当主である輝元(慶長六年)や、輝元・秀元(年未詳)への忠誠を誓った起請文であることがわかる。前者は、宗休(元政)が申し上げたことに対し、毛利輝元が神文(起請文)を用いて聞き入れた旨を伝えてきたのに対して、「誠之無勿躰趣申上候」と述べている。一方後者は輝元や秀元から去年以来様々な心遣いを受けたことを「無勿躰存計候」と述べている。ともに「勿体無い」が感謝の意で使用されていることがわかる。

先に見たように『下学集』では、「勿々無也」と述べた後で、「勿躰二字即無正躰義也」としている。そこに「勿体無い」＝「正体無い」の関係が浮かび上がってくる。両者の関係については『かたこと』(一六五〇年)でも確認できる。
る。

・ 正体なきといふべき時に、勿躰なしといふは誤たること葉なりと云り。勿躰の二字を、躰なしとよめば、勿躰なし
とはいらぬ重言かと云り。(卷一)

すなわち当時「勿体無い」と「正体無い」とが同義で使われていたことがわかる。なお『日葡辞書』では『Xōrai(正体)』の見出しで「まことの实体(本体)」とある。「正体無い」についてはXōdainai coto(シャウダイナイ)と連濁形になっており、そこには次のような記述がなされている。

Xōdainai coto. シャウダイナイコト(正体ない事) むぢやな締まりのない事。例、Xōdaino nai fto(正体もな

い人)すなわち、Yacutaimo naiffo. (益体もない人)生活の乱れた、だらしない人。『Yodaimonō sageuo nodā. (正体もなう酒を飲んだ)すなわち、きりもなく、むちやむちやに酒を飲んだ。

「正体無い」は、狂言でも酒に酔った場合に使用されているが、その他に人に惚れたり、物に夢中になったり、またくたびれたりした時など、様々な場合に用いられている。

- ・さけにようてはあくぎやく仕たるが、此ほどしやだもなくなつたべよて、のばらにふしていたれば (「あく太郎」)
- ・あふをわかれとはたれかおしやりそめつらふ、あら、しやうだひなしと、まよひほれたや (「はな」)
- ・是にいなかもとみえて、うり物にほめいつて正体もなひ (「ながみつ」)
- ・ながのたびにくたびれて正体がなひよ (「じしやく」)

しかし『政基公旅引付』では、「勿体無い」の「あるべきさまをはずれていて不都合だ」(『日国』)の意味に近い用法での「正体無い」の使用が認められる。

- ・召定雄之処、為遊山罷出了、仍直三召長法寺、不事間可切棄事無正躰之由仰付処江、定雄又參了、仰付此子細、只先可生取也 (永正元(一五〇三)年三月二八日)

(定雄を召すのところ、遊山のため罷り出で了んぬ。よつて直に長法寺を召し、事問はず、切り棄つべきの事、正躰なきの由、仰せ付くるのところへ、定雄また参り了んぬ。この子細を仰せ付け、ただまづ生け取るべきなり。)

- ・既被捨置御領之条、以外様候き、其後無正躰候処、御家門様依不慮□□向、于今被相拘候 (永正元年七月二五日)
(既に御領を捨て置かるの条、もつての外の様に候き。その後、正躰なく候ところ、御家門様不慮の御下向により、今に相拘へられ候。)

『政基公旅引付』を読み下して注釈を施している『新修泉佐野市史 五』では、前者に対しては「正当な理由がない、不当であるということ」、後者に関しては「実態がともなわず正常ではない」と頭注が付されている。このような意味は、「無正体」以外に「不可有正体(正体あるべからず)」という表現でも記されている。

- ・抑日根野東方之儀、自地□国方^上扱子細条々也、仍如此令沙汰者不可有正躰之条、以一行委仰付了。

(文亀二(一五〇二)年一〇月九日)

(そもそも日根野東方の儀、地口(下)より国方を扱ふ子細、条々なり。よつて此の如く沙汰せしめば、正躰あるべからざるの条、一行をもつて委しく仰せ付け了んぬ。)

・相調群勢可放火也、一日二日延引ハ不苦、只今小勢_三差懸令不覚者、自余之郷内成敗不可有正躰。

(文亀三年七月九日)

(群勢を相調へ、放火すべきなり。一日、二日、延引は苦しからず。只今、小勢(下)にて差し懸け不覚せしめば、自余の郷内の成敗、正躰あるべからず。)

前者には「正當な行為ではない」、後者には「有名無実になること」と注が施されている。また「正体無い」の用例には次のような「一人前ではない(人間として十分ではない)」のような意味での使用も見られる。頭注では「頼りない」となっている。ただし、『日葡辞書』の記述にあつた「生活の乱れた、だらしない」という意味で解釈できるのかもしれない。

・於科条者雖不輕、地下人ハ一人も正体無ラシキ也、地下案堵可宥免之由仰了。

(永正元年七月一九日)

(科条においては軽からずといへども、地下人は一人も正躰無きながらをしきなり。地下安堵の事、宥免すべきの由仰せ了んぬ。)

このように「正体無い」は様々な使用されているが、本来の意味は「そのものの本来の姿でない」ということになろう。これは「勿(物)体無い」の本来の意味である「物のあるべき姿ではない」と通じる。この点では、両者は共通しているが、「勿体無い」が感謝表現として用いられるのに対して、「正体無い」にはそのような意味用法は存在しない。

四 「慮外」と古記録・古文書

「慮外」も、「冥加無い」や「勿体無い」と同じく『政基公旅引付』に使用されている。「冥加無い」や「勿体無い」

と比較して「慮外」は多用されている。「慮外」は、『日葡辞書』では「思つていたのとは違つて」という「意外さ」を示す語として記述されていた。この『政基公旅引付』では、「意外さ」でもマイナスの意味での使用となつている。

・当国在庄の間、依為守護（あつた）□礼遣之処、不請取子細何事哉、慮外（あつた）。

（文亀元年四月四日）

（当国在庄の間、守護たるにより、礼として遣はすのところ、請け取らざる子細何事や。慮外（あつた）。）

・老者今令下向之処、其方披官人佐竹猶及押妨之沙汰、慮外無極候。
（文亀元年四月五日）

（老者、今下向せしむるところ、その方披官人佐竹、なほ押妨の沙汰に及ぶの条、慮外極まりなく候。）

「慮外」についての先行論文としては、樂竹氏に「慮外」の意味変化について」（『日本と中国』ことばの梯 佐治圭三教授古稀記念論文集』くろしお出版 二〇〇〇年）がある。ここでは、古記録や古文書を用いて、「慮外」の意味の変化過程について考察されている。この論文の要点を示せば次のようになる。

平安時代における「慮外」は「思いがけない、意外」という中国語の本来の意味を中心義として踏襲するが、「思いがけない、有難い、かたじけない」といったような臨時的な派生義が生じてくる。室町時代に入ると、前の時代の臨時的な意味を土台に、「思いがけなく」好ましいこと、行為について言うときはそこから連想して、「有難く、かたじけない、恐縮であること」と、逆に「思いがけない」不法、不当なこと、行為について言うときはそこから連想が働いて「無礼、不躰なこと」という本来の中国語にはなかつた意味が派生、定着するようになる。江戸時代になると、話しことばとしても使用されるようになり、「慮外ながら」という新しい語形態が生じ副詞的に使用される。意味は「恐縮ながら、はばかりながら」というようなことを表す。目上に対する目下からの感謝表現として、「かたじけない、恐縮」という意味でも「慮外」が使用されるようになる。

この論考には、古記録や古文書において感謝の気持ちを表している例として次のものが挙げられている。しかし用例を詳細に見ていくと、これらの用例が變氏の言うような「有難く、かたじけない、恐縮」の意と解釈してよいか疑問に思えてくる。

・十日晴、奉行職事々、重申遣了、

其後以外鬱々、慮外、兼又大祀御奉行事御訪之儀申定候、此上者存知勿論候、早々可有申御沙汰候、事々期面候、謹言
(親長卿記 文正元(一四六六)年六月一〇日)

・此間恐鬱慮外存候、兼又花山へ遣書状候、内々状にも、以此旨可令洩申給、尚頓頭首謹言

(宣胤卿記 永正三(一五〇六)年十一月一九日)
・久不申通、恐鬱無極候、余面談之次も候はて慮外候
(宣胤卿記 永正一四(一五一七)年後一〇月一二日)

これらの用例において、「慮外」は「鬱々」「恐鬱」「候はで」という表現とともに使用されている。「鬱々」は『日葡辞書』に *Ytut* ウツウツ (鬱々) 副詞。不愉快であること、または、ひどく心がふさいでいること。文書語」とあるように、感謝を表すのに適した表現だとは思えない。また「恐鬱」は、『日葡辞書』には見出し語として登載されていないが、古記録における「恐鬱」の例を見ていくと、ここに挙げた三例目のように、その前に「久不申通」「不入見参」「其後良久不啓案内」などといった否定表現が現れることが多い。このようなことから、「恐鬱」はお詫びの挨拶表現に使用される語のようである。三例目の「慮外」も「面談之次も候はで」と否定表現に続いている。

これらの例はいずれも、相手からの厚意に対する返答ではない。したがって、薬氏が述べるような「差出人の受信者への感謝の気持ちを表」している例とはいいたくない。「有難く、かたじけない」という感謝の意と、「恐縮」とを一緒に扱っていることが問題である。このことは辞書の意味記述についても言えることである。「恐縮」には、相手に迷惑をかけて身もちままるほど恐れ入る場合と、相手からの厚意を受けて身もちままるほど恐れ入る場合とがあり、「恐縮」だけでは曖昧なのである。両者の違いは相手からの厚意を表す動作が前以て存在しているかどうかである。感謝表現はあくまでも相手からの厚意に対するお礼の表現なのである。

古記録類において「慮外」が感謝表現として使用されていないわけではない。萬里小路時房の『建内記』には次のような例が見られる。

・追伸 私御巻数拝領、慮外之至候、御祈念喜入候、期面謝候
(文安四(一四四七)年二月一五日)
話しことばである狂言においては、例えば虎明本では「慮外」はマイナス的な用法での使用や、「慮外なれども」と

いう副詞的な意味での使用が見られる。例えば『大蔵虎明本狂言集の研究』（表現社 一九八三年）では、次に挙げる「どぶかつちり」の例に対しては「ぶしつけ。無礼。」と、また「したうはうがく」の例に対しても「無礼ですが。ぶしつけですが。」と注を施している。

・ 勾当「汝にも何とぞしてくわんをさせたひと思ふ、くわんをせねは、平家をかたる事がならぬ、さりながらした稽古をはしたらよからふ 菊一「それは忝なふ御さる 私もそれかのそみて御され共慮外で御さると存て、彖申さなんでござる

・ 太郎冠者「申たちとりよぐわひなれども、申たひ事がござる

（虎明本狂言「したうはうがく」）

「慮外」は、ある厚意的な発言内容に対して、「慮外」（失礼なことになります）という恐縮の姿勢を示すことによつて、感謝の意を表しているといえよう。次の「よろい」では果報者が「床机に腰をかけなさい」と言つたことに對し、「それは慮外でござる」と返答し、それに対し「いや苦しうない」と述べている。「樽賀」の場合では、何某が「もつとくつろいで呼びなさい」と言つたのに對し、その通りに「やい」と呼んだ。それに対して、何某が「はい」と答えてきたので、「さてもさても慮外な事でござる」と言つた。またそれに対し何某は「まだ時宜を言うか」と述べている。「じぎ」に対して、「遠慮。辞退。」（『大蔵虎明本狂言の研究』）、「恐縮した言葉。遠慮。」（『大蔵虎明本能狂言集 翻刻註解』）という注が施されている。

・ 果報者「いや汝よめ 太郎冠者「是はしやうぎにこしをかけた者がよむ事でござる 果報者「それならば是非

におよばぬ、なんぢ是にこしをかけい 太郎冠者「それはりよぐわいで御さる 果報者「いやくるしうなひ、

よろいのかげさせらるゝと思ふ 太郎冠者「尤もよひ御がつてんで御さる

・ 賀「銀三郎 何某「お前に 賀「やれくかたじけなひ（つくばふ） 何某「其やうに云てはうちの者のや

うに有まひ程に、をしくつろひでよばしめ 賀「畏まった、やいくこひ やひ 何某「あつ

賀「扱もくりによぐわいな事で御さる 何某「またおぬしはじぎを云か 賀「かしこまつた

（虎明本狂言「樽賀」）

虎寛本になると、おもに酒をついで貰った時の慣用的な感謝表現として「慮外」が使用されるようになる。

・主「やれ〜夫は大儀や。先一つのめ。シテ「おしやくは是へ被下い。主「身共がついで遣らう。

シテ「是はりよ外に御ざる。

(虎寛本狂言「きづねづか」)

・伯父「手間の入らぬ様に大盃を出いた。さらば一つのめ。シテ「御酌は是へ被下れい。伯父「イヤ〜身共がついで遣らふ。シテ「是は慮外に御座るが、其儀成らば一つつがせられて被下い。

(虎寛本狂言「すあふおとし」)

ただし、以前の用法の残存と云つてよいのか、次の「きかずぎとう」の例は相手への感謝表現としてとることができよう。また後者の「しどうはうがく」の例は、「真平ゆるさせられい」とあるように、失礼を詫びた上での感謝の意の表明と言えようか。

・主「其儀成らば手を取つておませう。菊都「是は慮外に御座る。主「さあ〜おりやれ〜。

(虎寛本狂言「きかずぎとう」)

・主「はて、そち持て乘れ。シテ「イヤ申、こなたはから身でさへ落させらるゝを、何と物を持て乗らるゝ物で御ざるぞ。是はたゞこなた乗せられい。主「是非に及ばぬ。太刀やわたしは身共が持て取らせう。

シテ「こなたの持せらるゝ。主「中〜シテ「夫は近來慮外な事で御座る。真平ゆるさせられい。

主「少しも苦しくない事じや。

(虎寛本狂言「しどうはうがく」)

「慮外」の用例を検討してきた結果、「慮外」は「意外さ」を表す語であり、プラスやマイナスの両方面で使用されていた。感謝表現としての「慮外」は次第に相手からの厚意的な申し出に対する返答として用いられるようになる。最初はその申し出の「意外さ」を表していたが、「慮外」がマイナスの意味(「失礼」)で使用されることが多くなると、申し出に対して、相手にそのようにしてもらつと、あるいは自分が相手の申し出通りにすることは「失礼なことになります」と表明することによつて、感謝の意を表すことになる。相手の言う通りにすることは、私には恐れ多いことだといふ恐縮の態度を表しているのである。これは「かたじけない」と共通しているといえよう。

五 「過分」と古記録・古文書

感謝を表す「過分」は、これまで扱ってきた資料の中にも現れていた。

・抑彼讚事、隆増如形一声計伝置候て、上様申入候条、冥顕之至、且者歡喜、且者其恐候哉、委細被仰下候、難有畏入候、兼又両種重宝下給候条、凡過分之至極

(僧隆増書状『醍醐寺文書』永享九(一四三七)年二月五日)

・就中如御状御家門御下向、忝過分至候、無冥加被存候、万事可然様御取合奉憑候、恐々謹言

(文龜元(二五〇一)年四月五日)

(就中、御状の如く御家門御下向、忝く過分の至りに候。冥加なく存じられ候。万事然るべき様、御取合、憑み奉り候。恐々謹言。)

・(春日に対する礼) 扱く御ねん入候て過分に存候 (家光に対する礼) 忝仕合、申上候はんやうも御さなく候

(寿林宛書状 寛永一一(一六三五)年正月二日)

・御心つけのたん、過分あさからす存候 (家光に対する礼) かたしけなき 御意 冥加も御さなき仕合、御礼を可

(春日局宛書状 寛永一二(一六三六)年正月二日)

現と思われる「過分之至」は一五世紀前半頃から、また「過分存候」は一六世紀前半頃から見え始める。

・后内々得形勢之処、早速昇進過分之至也、有其懼事也 (建内記 永享元(一四二九)年七月一三日)

・拝領了、不思寄候、連々芳賜過分之至候、能々可秘藏候 (建内記 文安四(一四四七)年一〇月二九日)

・尊書令拝見候、仍御公用之儀相調、渡申候、就中筆五对被下候、過分存候

(大徳寺文書 天文三(一五三四)年九月一七日)

・但御用もなく候や、態御使礼、過分存候

(島津家文書 文禄二(一五九七)年二月二八日)

田島(二〇〇九)ではおもに否定詞を伴った感謝表現を扱ったため、「過分」については扱わなかった。しかし田島(二〇一一)では、日本放送協会編『全国方言資料』(日本放送出版会 一九六六(一九六七年)の談話資料をもとに感謝を表していると思われる表現を抜き出した。その中に「過分」の方言形であるカンプンが山形県東田川郡朝日村大鳥(現在 鶴岡市大鳥)で使用されていた。感謝表現の全国的な分布状況を示している国立国語研究所編『方言文法全国地図 5集』図二七〇(大蔵省印刷局 二〇〇二年)には、カンプン系の表現が秋田県山本郡八森町と山形県東朝日村(『全国方言資料』と同地域)で報告されている。

なおカンプンについては、夙に柳田国男の『毎日の言葉』(一九四六年)の「有難ウ」の項目において、次のように述べられている。

信州の北部から越後にかけて、カンプンヤ又はカンプンといふ礼の言葉があります。是は歌舞伎で武士などがいふ「過分ぢや」も同じで、もとは自分などの分に過ぎたる好意、即ち思ひもよらぬ悦びだといふ意味、即ち是だけは相手に向つていふ言葉ですが、後にはやはり形式に流れて、心からさう思はぬ場合にも使ひました。

「冥加無い」や「勿体無い」が相手を思いやる表現であるのに対し、この「過分」は自分(の悦び)の感情を表しているといえよう。

『日葡辞書』には、「過分」が比喩的ではあるが感謝表現であることが明記されている。

Quabunna クワブンナ (過分な) 豊富な(もの)。また、沢山な(もの)。また、比喩。ありがたく思つて謝意を表わす言葉。

Quabunni クワブンニ (過分に) 副詞。豊富に、あるいは、沢山に。† Quabunni zonzuru. (過分に存ずる) 深く感謝する、あるいは、非常にありがたく思う。

狂言にも感謝表現として次のような使用例があり、話しことばでも使用されていることが確認できる。

・大名「此あふぎをとらする 新座「過分にござる

(虎明本狂言「秀句唐傘」)

・教え手「それは一段じや、かならずもつて帰て、ちとすそわけさしめ 賀「かたじけなふこそござれ、おしへさせらるゝさへ御ざらふに、ゑほしまてかさせられて、過分に御ざる (虎明本狂言「鶏賀」)

虎明本狂言(一六四二年)では「過分」は下から上への感謝表現として使用されているが、虎寛本狂言(一七九二年)では上から下への感謝表現として使用されていると思われる例がある。

・シテⅡ大名「今は書にことゝく合ふて満足する。また山一つあなたへ同道せうといへば、行うと有て過分に存る 粟田口「何方へ成共参りませう。(粟田口)

「過分に存る」が、確かに大名から粟田口への御礼なのか、この書き方ではわかりづらいが、『狂言記』(一六六〇年)や『狂言記 外五十番』(一七〇〇年)の次のような例での敬語の使用状況からどちらが上位の人物か明確であり、これらの例から上から下への感謝表現として「過分」が使用されていたことが確認できよう。

・九郎二郎「此の時分を存じましたらば、手伝いに参りませう物をは 庄右衛門「おふ、過分におりやる、手伝い人は、あまた多ふおぢやつたいの (『狂言記』「八句連歌」)

・大名「これゝ猿引、無心言ひたいが聞こうか 猿引「何成ともうけたまはりませう 大名「過分におじやる、御礼申さう」 猿引「迷惑な (『狂言記』「猿歌」)

『狂言記』類においては、「過分」は下から上へも、逆に上から下へも、また同輩同士においても使用されている。『日本国語大辞典 第二版』によると、「過分」の一用法として「(主に同輩や目下の人に対して、感動詞のように用いて) ありがとう、御苦労さま、おせわさまなどの意味を表わす」があり、その初出の用例として一六五九年の咄本『百物語』が上がっている。「過分」が口語化されたことにより、下から上ばかりではなく、上から下への感謝表現としても活用されるようになった。

おわりに(書きことばから話しことばへ)

江戸時代に話しことばとして使用されていた漢語系感謝表現は、いずれも中世後期の貴族の日記や古文書などに使用されていた表現であることが確認できた。池上禎造(一九五三)は、中世末期の『金句集』において格言の内容を和らげた「心」でも漢語が使用されていることを指摘し、ある種の漢語は口語化が既に進んでいたことを指摘している。また、近世の文献において、漢語に対するあて字や仮名表記がかなり見られることも漢語の口語化を意味しているよう。漢語の口語化という現象の流れに従って、漢語系感謝表現も話しことばとして使用されるようになったのであろう。なお、この時期に漢語の口語化が進んだ原因については、力不足でまだ明確にできない。今後の課題としたい。

「冥加無い」は、近松門左衛門の『博多小女郎波枕』(一七一八年初演)に「はああ、冥加ない有難いと夫婦わつと泣き出し」と使用されていることからすると、『かたこと』が片田舎でと指摘しているのは「冥加無い」の訪問時の挨拶表現での使用であろう。しかし、「冥加無い」の語構成と意味との不一致という意識からか、次第に「冥加が余る」とか「冥加恐ろし」などの表現へと移っていき、「冥加無い」は使用されなくなる。

「慮外」は酒の場での感謝表現としては、例えば『日本国語大辞典 第二版』では一七八四年の歌舞伎「隅田川続梯」の用例が示されている。しかし、「慮外」自体はマイナスの用法で使用されることが多く、また感謝表現としても自分の無礼さを述べた上での感謝という、まわりくどい表現でもあり、次第に使用されなくなっていく。

「過分」は、次第に同輩からのあるいは上から下への御礼の表現として使用されるようになる。感謝表現が、下から上への感謝から双方向の感謝というシステムの転換によって、上からの感謝表現として利用されるようになったのである。 「過分」の方向性の変更の背景には、「過分」が感情をストレートに表明していることが関係しているよう。狂言における上から下への表現としては、まだ感謝表現とまではいえないが、「うれしや」や「満足した」のような喜びの表現が使用されていた。それらの語との共通性によって上から下への表現に変更されたのであろう。ただし現代のような

上下関係の幅が狭い時代においては、柳田が述べているように「過分」という表現は武士が使用するようなイメージがあり、横柄な感じがする。最近では感謝表現として使用されることは少なくなり、「過分なおこそばを頂戴して」のように、改まった場面において、名詞を修飾する用法で使用されている。

これまで扱ってきた漢語系感謝表現の中で、現代でも使用されていると感じられるのは「勿体無い」だけであろう。ただし、この表現も今日では感謝の挨拶表現としてあまり用いられなくなっている。

古記録や古文書などで使用されていた漢語系の感謝表現が中世後期から近世にかけて話しことばとしても活用されるようになった。しかし、現代では漢語系感謝表現の使用は少なくなり、「ありがとう」や「すみません」といった和語系感謝表現が中心となっている。

注

- 1 『日葡辞書』の訳については『邦訳日葡辞書』（一九八〇年 岩波書店）を利用した。
- 2 『日本大文典』の訳などについては土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』（一九五五年 三省堂）を利用した。
- 3 この用例は『時代別国語大辞典 室町時代編』を参考にした。
- 4 『政基公旅引付』の本文は、中世公家日記研究会編『政基公旅引付 本文篇・研究抄録篇・索引篇』（一九九六年 和泉書院）を利用した。
- 5 『政基公旅引付』の読み下しは、『新修泉佐野市史⁵ 史料篇 中世II』（二〇〇一年 泉佐野市）を利用した。
- 6 古記録や古文書の用例の検索にあたっては東京大学史料編纂所のデータベースを利用した。
- 7 『毛利家文書』の本文は、『大日本古文書 家わけ八ノ一』（一九二〇年 東京帝国大学／一九七九年覆刻 東京大学出版会）を利用した。

- 8 『細川家史料』の本文は、『大日本近世史料 十九・二十』(二〇〇四年 東京大学史料編纂所)を利用した。
- 9 田島(一九九二b)参照。
- 10 この用例は『時代別国語大辞典 室町時代編』を参考にした。
- 11 芳賀幸四郎著『三条西実隆』(吉川弘文館 一九六〇年)では、この記事について次のように説明されている。義尹は実隆を推重すること厚く、(中略) また陳祖田らの狂歌歌合せの判詞を頼んだりしている。(中略) この歌合せに判詞は快諾し、やがて自ら染筆して呈上した。これに対し、義尹は「筆を費すの条、勿体なし。言語道断、殊勝の由」の謝辞を送ってきた。
(新装版 163頁)
- 12 大塚光信編『大藏虎明能狂言集 翻刻註解』(二〇〇六年 清文堂出版)
- 13 「冥加無い」の場合、「冥加(神仏の恵み)」が「無い」のは、厚意的なことをして下さった目上の人である。私にこのようなことをなさるのはあなたにとって「神仏の恵みがない」ことですというような発想である。同様に「勿体無い」も私のこのようなことをなさるのはあなたのためであるべき姿ではないですということになる。そこまで語源へ戻らなくても、私にこのようなことをなさるのはあなたにとって「不都合なこと、堪え難いこと」ことになる。いずれも相手への思いやりの上になりにたっている感謝表現といえよう。感謝表現の発想法については、田島(二〇〇九)を参照されたい。
- 14 『狂言記』類とは、新日本古典文学大系『狂言記』に所収されている次のものを指す。『狂言記』・『狂言記外五十番』・『続狂言記』(一七〇〇年)、『狂言記 拾遺』(一七三〇年)。

参考文献

- 池上禎造(一九五三) 近代日本語と漢語語彙(『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂) 後に、『漢語研究の構想』(一九八四年 岩波書店) 所収
- ことばの中世史研究会編(二〇〇七) 『鎌倉遺文』にみる中世のことば辞典(東京堂出版)
- 田島優(一九九二a) 「冥加無い」考(『説林』四十号 愛知県立大学)

- 田島優（一九九二b）「勿体なし」：「勿体」考―『かたこと』を読む―（『東海学園国語国文』四一号 東海学園女子短期大学）
- 田島優（二〇〇九）感謝表現から見た発想法の変化（『台大日本語研究』一七期 台湾大学）
- 田島優（二〇一一）北陸地方など日本海側に見られる感謝表現（『人文学会誌』一二号 宮城学院女子大学大学院）
- 藥竹民（二〇〇〇）「慮外」の意味変化について（『日本と中国ことばの梯 佐治圭三教授古稀記念論文集』くろしお出版）
- 服部四郎（一九五〇）附屬語と附屬形式（『言語研究』一五号）後に、『言語学の方法』（一九六〇年 岩波書店）所収

付記 古記録や古文書について不慣れなため、読みや解釈に誤りがあるかもしれない。御教示下さい。

二〇一一年度 第八回「創作文学賞」
選考結果について

日本文学会 創作文学賞委員

二〇〇四年に創設された本賞も今年度で第八回を迎えました。今回から規定枚数を変更し、枚数の幅を広げて作品を募りました。

ジャンル・テーマ自由、四百字詰め原稿用紙換算で五枚〜二五枚以内の小説という内容で募集を行い、結果八作品の応募がありました。

今回選考にあたったのは、学科長の星山健先生、日本文学会の委員六名です。作者名をふせた状態で応募作品すべてに目を通しました。作品一つ一つに対して合評しあい、最終的な賞は投票によって決定しました。審査会では佳作以下の賞の決定は意見が割れ、話し合いと評決を繰り返し、次のような結論に至りました。

結果を報告致します。(学年は応募当時のもの)

最優秀賞 該当作なし

優秀賞 『七つの子』二年 石井杏紗美

*一貫したテーマ性と情景・心理描写の

緻密さが評価されました。

佳作 『神依り人』二年 蒼華 (PN)

*作品の完成度が高く、凝った設定と世界観をうまく活かしていました。

『ひつじさんとぼく』二年 江崎聡美

*少ない枚数ながら含みのある文章で主人公の感情を表現していました。

日常の風景や出来事を扱った作品が多く見られました。八作品中四つが家族や兄弟関係を取り上げていたことも興味深く思われます。ファンタジー的要素を交えつつも、身近な問題、悩み、テーマを作品化しようという視点が感じられました。

今回も最優秀賞は出ませんでした。応募作品の全体的な質の向上が見受けられました。今後、多くの秀作の応募があることを期待します。

問題93 Fさんの状況を把握した訪問介護員の行動として、適切なものを一つ選びなさい。

- 1 介護支援専門員の訪問を待つように伝えた。
- 2 訪問介護サービスの「調理」を「入浴」に変更した。
- 3 事業所のサービス提供責任者に報告した。
- 4 介護内容の変更をP市役所に依頼した。
- 5 娘に家事を手伝うように指導した。

- (1) <<http://www.bimaconc.jp/>> (2011年12月7日)
- (2) 『公益財団法人社会福祉振興・試験センター』
<<http://www.sssc.or.jp/kaigo/gaiyou.html>> (2012年4月23日)
- (3) 『厚生労働省』
<<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/other07/index.html>>
(2012年4月23日)
- (4) 『財団法人自治体国際化協会』
<<http://www.clair.or.jp/j/forum/series/pdf/j29.pdf>> (2012年4月23日)
- (5) 特定非営利活動法人 トラストウイング
<http://www.trustwing.org/ph_03.html> (2012年4月23日)
- (6) 『日本語読解学習支援システム リーディング チュウ太』
<<http://language.tiu.ac.jp/>> (2011年12月7日)
- (7) 第23回 介護技術(一問一答問題)

問題83 一人暮らしのEさん(80歳)は、屋内は伝い歩きをし、調理はいすに座って行っている。Eさんの台所の環境整備として、最も適切なもの一つ選びなさい。

- 1 調理台周辺に部分敷きのマットを敷く。
- 2 床材は滑りにくいものにする。
- 3 調理台は高めにする。
- 4 シンクは深めにする。
- 5 調理台と食卓の間は広く空ける。

第23回 介護技術(事例問題)

次の事例を読んで、問題92から問題94までについて答えなさい。

[事例]

P市に住むFさん(85歳、男性、要介護1)は、下肢の筋力が低下し歩行に支障があり、室内の家具を使って伝い歩きをしている。調理と掃除の訪問介護サービスを週2回利用している。Fさんは知的障害のある娘(48歳)と二人暮らしであり、娘は日中、作業所に通っている。今回の訪問時にソファで横になって動こうとしないFさんに声をかけたところ「最近、浴室で転んだ」と話した。きれい好きなFさんであったが、髪は汚れひげも伸びていた。Fさんは前回の訪問時と同じシャツを着ており、洗濯かごには娘の衣類が入っていた。また、ソファの下に湿布や鎮静剤の葉の袋が落ちていた。

- ム』『2009年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp. 176-181
- (6) 中川健司(2010)「介護福祉士候補者が国家試験を受験する上で必要な漢字知識の検証」『日本語教育』147号、pp. 67-80
 - (7) 日本語教育学会「看護と介護の日本語教育」ワーキンググループ(2010)「介護福祉士国家試験問題の日本語の難しさについて考えるための基礎資料(改訂版)ー第21回・第22回試験の全問分析結果のまとめ(2010年12月)ー」
(<http://www.nkg.or.jp/kangokaigo/images/kisoshiryou-v2.pdf>)
(2012年4月29日)
 - (8) 野村愛、川村よし子(2010)「外国人介護士のための日本語読解学習支援システムの開発と評価」『2010年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp. 294-299
 - (9) 三枝令子(2009)「EPAによる外国人看護師・介護福祉士候補者の受け入れと日本語教育ー国家試験に関連した動きと展望ー 介護福祉士国家試験の分析」『2009年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp. 52-54
 - (10) 宮崎里司(2009)「外国人看護・介護士候補者に対する日本語教育ー外国人労働者の観点からー 外国人介護ヘルパーのための日本語支援教室ーPolicy Activism(市民参加による政策決定)型日本語教育の試みー」『2009年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp. 38-40
 - (11) 西尾実・岩渕越太郎・水谷静夫編(2011)『岩波 国語辞典第7版新版』岩波書店出版
 - (12) 三省堂編修所(2011)『デイリーコンサイス英和和英辞典第7版』三省堂出版
 - (13) コンデックス情報研究所(2008)『いちばんわかりやすい! 介護福祉士合格テキスト'09年版』成美堂出版
 - (14) コンデックス情報研究所編著(2011)『詳解 介護福祉士過去5年問題集'12年度版』成美堂出版
 - (15) 福祉教育研究会(2004)『使いやすいホームヘルパー 2級講座テキスト 第3章 介護学』日本教育クリエイト

参考資料

- (1) 『一般社団法人 外国人看護師・介護福祉士支援協議会』

一定の規模や職員数などの資格要件を満たした上で、半年間の日本語研修の費用の一部負担や、国家試験受験に向けた研修態勢の設備を義務づけられている。

- (4) 遠藤(2012)によると、例えばニトログリセリンnitroglycerinのnitroは英語話者はnaitrouのように発音するので「ニトログリセリン」と表記されたものとnitroglycerinとが一致しない。このような齟齬を防ぐために外来語には原語を併記することが望ましいとしている。
- (5) 2011年度からは新カリキュラム①人間の尊厳と自立、介護の基本、②人間関係とコミュニケーション、コミュニケーション技術、③社会の理解、④生活支援技術、⑤介護過程、⑥発達と老化の理解、⑦認知症の理解、⑧障害の理解、⑨こころとからだのしくみ、⑩総合問題の10科目に変更されている。
- (6) 一問一答問題と事例問題の例を参考資料(7)に載せる。

参考文献

- (1) 植村英晴(2009)「外国人看護・介護士候補者に対する日本語教育—外国人労働者政策の観点から— 介護需要とフィリピン系介護職員の状況」『2009年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp. 29-31
- (2) 遠藤織枝(2009)「E P Aによる外国人看護師・介護福祉士候補者の受け入れと日本語教育～国家試験に関連した動きと展望～ 日本語教育学会ワーキンググループ(以下「WG」)について」『2009年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 43-44
- (3) 遠藤織枝(2012)「介護福祉士国家試験問題の日本語の平易化をめぐる—第23回・第24回試験からみた問題点— 日本語教育学会「看護・介護の日本語教育」ワーキンググループ」(<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000028hzh-att/2r98520000028i82.pdf>) (2012年4月29日)
- (4) 梶本歩美(2007)「介護者送り出し国フィリピンの事情 —誰と介護を担うのか」『異文化介護と多文化共生 —誰が介護を担うのか—』pp. 264-309
- (5) 登里民子、栗原幸則、今井寿枝、石井容子(2009)「インドネシア人介護福祉士候補者を対象とする初級からの専門日本語教育研修プログラ

る。しかし、級外の語であっても「マット」のように実物を見れば理解しやすいもの、または“service”のように英語を示せば意味が分かりやすくなるものがあることが分かった。このように級外の外来語が必ずしも全て難解であるわけではないが、頻出している語そのものの意味は難しくなくても、伴われる語の難易度が高かったり、混種語になると難しい語になるものがあったりすることも明らかになった。そのため、特に漢語と組み合わせられた外来語に注意する必要があるだろう。

今回は介護技術の科目（過去5回分）のみの外来語調査であるため、介護業界で扱われている外来語全てが明らかになったわけではない。介護技術の科目で使用されている外来語や混種語は96語（過去5回分）で、他の科目を合わせるとさらに膨大な量の外来語・混種語が出現していると予想される。その中でも、出現数が少ない下位の語を候補者に提示し、使えるように指導することは容易ではないだろう。しかしそうした語であっても介護現場で必要ない語であるとは必ずしも言えない。多くの外来語を学ぶことは候補者にとっても負担であろうが、教師側がともに使われやすい語を提示したり、混種語の場合は語構成を示したり、易しい語に言い換えたりしながら、理解がしやすい方法を提案できればその負担も軽減できるのではないだろうか。

今後は全ての科目に対象を広げ、使用されている外来語の傾向を探ること、既存の日本語教材で扱われている外来語との比較を行い、候補者に対する日本語教育現場に必要な外来語の教育についてさらに詳細な検討を行っていくことを課題としたい。

注

- (1) 2006年9月9日に署名された、日本とフィリピン間の看護師・介護士の受け入れ政策。
- (2) 「旧日本語能力試験2級・3級の語彙」とは、2009年まで採用されていた日本語能力検定試験を基準にして語彙の級分けをしたものである。級の判定には『リーディング チュウ太』を用いた。2010年に日本語能力試験は改正され、級分けがN1、N2、N3、N4、N5と5段階となった。
- (3) この就労は、あくまで日本の国家資格を取得するための準備期間の一環としての就労であるため、4年の就労のみで介護福祉士試験は受けない、ということは原則認められていない。なお、受け入れる施設側は、

2007	「Nさんの - と介護計画に関する次の記述のうち、…」
2009	「Mさんの現在の状態の - に関する次の記述のうち、…」
2011	「現時点でのFさんの生活を - する際に、優先されるものを一つ選びなさい」
	その他
2008	「身体面、環境面などの - を行う」

外来語の「アセスメント」は岩波国語辞典(第7版)によると物事の総体としての量・価値の計算的評価である。一方、デイリーコンサイス英和辞典(第7版)の“assessment”は①財産評価②(収入)査定③賦課④割当(額)⑤評価、意見の意味だと記されている。

介護業界のアセスメントの意味は「利用者の生活における評価」だと考えられる。この語は利用者の名前を伴うことが多く、また「身体」「健康」「環境」などの「生活」に関わる語を伴う場合があるためである。この定義だと、英語と外来語の意味の「評価」という部分が重なる。「評価」は2級の語であるため、候補者が理解しやすい語であるとは言いがたい。そのため利用者や高齢者のイラストなどを指しながら「(彼らの)今の具合を知ること」などのように平易な語で示すことで理解がしやすくなるのではないだろうか。

なお、「評価」という漢語は介護技術科目で使用されていない。しかし、「健康状態の確認を…(介護技術2011)」というように「確認」という語が、「Fさんの状況を把握した訪問介護の行動として…(同2011)」のように「状態を把握した」が「アセスメント」と似たような意味で出現している。こうした類似した意味の漢語との違いについても留意する必要があると思われる。

4. まとめと今後の課題

本稿では、国家試験に頻出する外来語を調査し、日本語教育現場でこれらの語を扱う際の注意点について考察した。過去5回分の国家試験の問題の調査により、介護技術で使用されたのは外来語57語、混種語39語の計96語であることが分かった。その中でも頻度の高い上位10語は4級4語、2級3語、級外14語あり、さらに、上位10語以下の頻度の少ない語は4級5語、3級1語、2級7語、1級3語、級外20語であった。級外の語が多いことから、介護技術の科目で使用される外来語は候補者にとって学習が難しいと考えられ

軽減されるだろう。しかし、外来語よりも英語のほうが意味の種類は多いため、“service”は場面によって意味が変わることに留意しなければならない。外来語の「サービス」の意味を知らなければ、国家試験で英語のどの意味を当てはめたらよいか候補者が戸惑う可能性がある。そのため英語よりも意味が縮小された「サービス」という外来語の使い方に留意する必要がある。この語は出現した2回の両文に「利用」という漢語を伴う傾向が見られたため、ふたつはセットにして提示すると良いだろう。また、混種語の「訪問介護サービス」は施設ではなく介護員が自宅を訪問するサービスであるが、「週2回」という表現が3回中2回使用されている。この語に関しては、頻度を表す語とともに使われる傾向があることも補うと良いと考える。

表13 介護技術
「サービス」及び関連する外来語・混種語 例文

年	語	問題文
2008	サービス	「Hさんが現在利用している - は、…」
2010		「他の - の利用などケアマネージャーと相談して…」
2011	サービス提供	「事業所の - に報告した」
2010	責任者	「週2回の - が計画された」
2011	訪問介護サービス	「調理と掃除の - を週2回利用している」
2011		「 - の『調理』を『入浴』に変更した」
2008	施設サービス	「 - に対する感想や要望などについて…」

(7) 介護技術における「アセスメント」

「アセスメント」は難易度の高い級外の語である。試験問題で頻出しており、主要な用語であることがうかがえる。

表14 介護技術
「アセスメント」が使用されている例文

年	語	問題文
		質問項目での使用
2007	アセスメント	「健康状態の - に関する次の記述のうち、…選びなさい」
2007		「Hさんの - に関する次の記述のうち、…」

である。「シャワー浴」以外の語は物を表しているので「使用する」や「使う」といった動詞を伴うことが多い。

これらの語の中で注意すべきは「シャワー浴」という語である。「シャワー」は4級、「浴」が級外である。「浴」は「浴びる」の略であるが、「浴びる」という語を知らなければそれが略された語であると理解することが出来ない。「シャワー浴」を理解するためには「浴びる」という語も学習することが必要となる。

表12 介護技術
「シャワー」及び関連する外来語・混種語 例文

年	語	対象文
2007	シャワー	「- は、必ず介護職員自身の肌で温度を確認して使用する」
2007		「- は肩から足元へと十分に温めていくようにかける」
2007	シャワーチェア	「- を使って自分のペースで行っている」
2009		「- の購入を勧める」
2011		「- を使用する」
2007	シャワーボトル	「- などを使って陰部洗浄をする」
2007		「週一回程度の- が認められている」
2007	シャワー浴	「Yさんの- については、浴室が狭いこともあり、…」

(6) 介護技術における「サービス」

「サービス」は2級の語で、岩波国語辞典(第7版)によると、個人(客・来訪者)や社会や家族に対する、奉仕的な活動、また職務としての役割提供の意として定義されている。「奉仕」は同辞典で国家や社会や目上の者などのために、私心を捨てて力を尽くすこととなっており、介護事業は国家の介護保険によって利益を得ているため、「奉仕」と「サービス」の意はほぼ同じものであると思われる。介護業界では「奉仕的活動」という意味でとらえるのと分かりやすい。一方、英語の“service”は、デイリーコンサイス英和辞典(第7版)によると①奉仕②職務・公務・軍役・兵役③(役所などの)局、部、課④礼拝(式)⑤助力⑥世話⑦貢献⑧有益⑨給仕⑩修理⑪食器の一式⑫(汽車・船の)便⑬(郵便・電話・ガス・水道などの)公益事業の意である。「サービス」は英語の“service”と「奉仕」という意味で共通している。このことから、英語が理解できる候補者には「サービス」を英語で示した方が負担は

味も追加で提示すると良いだろう。

(4) 介護技術における「マット」

「マット」は過去5回分で1回のみ、「調理台周辺に部分敷きのマットを敷く(2011)」で使用されている。「マットレス」、「バスマット」、「エアマット」、「電動エアマット」のように「マット」に関わる他の語との組み合わせで頻出される傾向がある。これらの語は全て級外の語彙である。「バスマット」と「電動エアマット」は「使用」という語とともに使われている。「マット」は薄いものから厚いもの、小さいものから大きいものと様々なものがあり、使用用途も異なるため伴われる語は様々なものになるが、「使用」という語は「使う」意味であるため「マット」に伴われやすい語のようである。英語の“mat”は固有名詞であるためか意味もほぼ同様なので、英語表記で提示するか、もしくは実物を示して「マット」と発音すれば理解しやすい語であると言える。

表11 介護技術
「マット」に関連する外来語・混種語 例文

年	語	問題文
		使用する
2011	バスマット	「滑らない - を使用する」
2009	電動エアマッ ト	「 - を使用している場合でも、…」
2010		「 - の使用を勧める」
		その他
2009	マットレス	「 - は柔らかなものにする」
2010		「身体と - との間にできた空間はそのままにした」
2007	エアマット	「 - は、臥床時の耐圧分散を図ることを目的としている」
2011		「ベッドと - の貸与を受け、…」

(5) 介護技術における「シャワー」

「シャワー」は4級の語彙であり、平易な語だと言える。「シャワーチェア」は風呂場で使われる高めの椅子、「シャワーボトル」は身体の障害によって風呂場まで行けない場合にベッドの上などで洗浄するためのお湯を入れたボトル、「シャワー浴」は風呂には入らずシャワーだけで済ませること

学習する必要がある。

(3)介護技術における「ケア」

「ケア」は全体の合計で2回の使用であるが、介護技術の中では単独で使用されるよりも、他の語と結び付く場合が多い。また介護業界での意味は明確に定義されておらず、難易度の高い級外の語彙である。

表10 介護技術
「ケア」が使用されている例文

年	問題文
2008	「爪及びその - に関する次の記述のうち、…」
2011	「妻の悲嘆への - はGさんの死後から行う」

「ケア」は『岩波国語辞典第7版』（2011）によると、①介護②世話③手入れ④管理の意味である。それに対し、『デイリーコンサイス英和英辞典第7版』（2011）によると、英語の“care”は①心配②気苦労③関心事④世話⑤看護⑥監督⑦骨折り⑧配慮、注意、用心の意味である。

表10(1)は「手入れ」、(2)は「世話」もしくは「心配」が意味として近いと思われる。また、混種語の「口腔ケア」は口の中を手入れすることであるので、ここでのケアは「手入れ」の意味になる。「手入れ」という言葉は「介護技術」科目の中に出現しておらず、介護現場でもあまり使用されることはないため、(1)や「口腔ケア」の場合は「手入れ」ではなく「ケア」と外来語で表記しているものと考えられる。「〇〇ケア」のようにケアに伴われるものとして「デイケア」「精神的ケア」があり、「デイケア（1日の世話）」「精神的ケア（精神的な負担に対しての世話）」の意味になる。これらのように「ケア」は世話や手入れの意味で使用される場合が多い。また、介護技術科目では「(利用者の) お世話をする」と言う表現は見られず、介護現場でもあまり使用されないため、国家試験では「ケア」と表されていると思われる。

「ケア」と“care”は「世話」の意味で重なるところがあるが、「手入れ」と言う意味は英語の“care”にはなく、外来語の「ケア」の意味でしか使用されていないため、候補者には英語をまず提示し、その上で「手入れ」の意

2009	(6)「利用者の身体状況に合わせて - の頭側を挙上する」
------	-------------------------------

この結果から読み取れることは「端」や「横」といった位置を表す語が「ベッド」に伴われることが多いということである。高齢者が寝たきりの状態や身体に不自由がある場合にベッドの周りが生活の範囲となるために位置を表す語が「ベッド」に伴って使用されるものと考えられる。また、「ベッド上」という語も過去5回分で6回使用されており、位置を表す言葉「横」「端」「上」は「ベッド」と伴う場合が多い語として提示する必要があるだろう。

次に、(ii)の場合の例文を表9に挙げる。

表9 介護技術
「ベッド」が使用されている例文(ii)

年	問題文
	腰掛ける
2009	(1)「右片麻痺の利用者が、-の端に腰掛けて <u>いる</u> 状態から…」
2009	(2)「-に深く腰掛けるよう促す」
2010	(3)「-の端に腰掛ける座位では、…」
2010	(4)「一定時間-の端に腰掛けることを勧める」
	その他
2007	(5)「-からの転落による骨折を予防するために、…」
2008	(6)「-から離床することが困難となり、…」
2008	(7)「食事は-に運び、…」
2010	(8)「また、日中でも-で眠っていることが目立ち、…」
2010	(9)「Fさんは-に臥床 ^{がしよ} している状態が多く見られるようになってきた」
2011	(10)「-とエアマットの貸与を受け、日常生活は全介助である」

ベッドという語とともに使われる傾向のある動詞は「腰掛ける」である。介護技術ではベッドで横になっている状態から起き上がるまでの一連の動作の仕方を問題にしているため、この動詞が多用されるのだろう。また、ベッドや布団の上で「寝ている」状態を介護用語では(9)「-に臥床している」と表現する。「臥床」は難解な語であるが、介護業界ではよく使用される言葉で介護福祉士のテキストなどにも頻出するため、ベッドとの組み合わせで

表7 介護技術
「ポータブルトイレ」が使用されている例文

年	問題文
	使用
2007	(1)「夜間は - を使用している」
2007	(2)「 - の使用を禁止した」
2010	(3)「ベッドの横で - を使用して、…」
	排泄(排尿)
2008	(4)「朝食後に - で排泄を試みる」
2010	(5)「夜間は - で介助を受けながら排泄し、…」
2010	(6)「 - での排泄」
2007	(7)「昼間はベッド柵につかまりながら、 - になんとか移り排尿するが、…」
	その他
2007	(8)「 - に腰掛けて、…」
2009	(9)「 - は小型で軽いものを選ぶ」
2011	(10)「室内に - を置く」

(2) 介護技術における「ベッド」

「ベッド」は物そのものの意味で使用されており、4級レベルの語で語そのものの難易度は高くない。伴われる語は(i)位置を表す語や(ii)「腰掛ける」という動詞である。位置を表す語を含む例文を表8に示す。

表8 介護技術
「ベッド」が使用されている例文(i)

年	問題文
	端
2009	(1)「右片麻痺の利用者が、 - の端に腰掛けている状態から…」
2010	(2)「 - の端に腰掛ける座位では、…」
2010	(3)「一定時間 - の端に腰掛けることを勧める」
	横
2010	(4)「 - の横でポータブルトイレを使用して、…」
2010	(5)「 - の横には汚れたおむつがそのまま置いてあった」
	その他

おり、「-に間に合わない」は「失禁してしまう」に近いニュアンスになる。表6(2)「-に呼ばれて大変」は、「妻はFさんに-についてきてほしいと呼ばれて大変」という意味であるため、トイレがFさんの妻を呼んでいるわけではない。候補者にとってこの語自体が難しいものでなくても、「-に呼ばれる」のように、後に続く語によって意味が分からなくなる、または誤って読み解く可能性が皆無ではないだろう。

表6 介護技術
「トイレ」が使用されている例文(ii)

年	問題文
2009	「しかし、-に間に合わないことがあったり、…」
2010	「最近になってFさんの妻が、『夜、何度も-に呼ばれて大変。…』」

介護技術における「トイレ」の語彙レベルは4級と平易であるが、その後続く語によって意味合いが変わってくることもあるため、候補者には「誘導」や「-に呼ばれる」「-に間に合わない」などのような連語的につながる言葉との学習が必要だろう。なお、「手洗い」「化粧室」「便所」のような類義語は過去5回分では記されていなかった。負担を減らすことも考慮して候補者には類義語を教える必要はないが、実生活には「手洗い」「化粧室」はよく使うことと、「便所」も方言のある地域では利用者が使うことにも触れておいたほうが良いと思われる。

ここで「トイレ」に関連する語として頻出している「ポータブルトイレ」についても触れたい。これは室内などに置いておくことができる簡易トイレのことで、介護現場では排泄介助の際に使用されることが多い。この語は級外であり、難易度は比較的高い語であると言える。ポータブルトイレは歩行に障害のある高齢者のために室内に置いておくものなので、「使用する」「排泄する(排尿する)」の表現とともに多く使用されている。「ポータブルトイレ」が「トイレ」と異なるのは、簡易のものであるために持ち運びができ、(10)のように「置く」という動詞が続く場合があるという点である。

2007	(2)「排泄のリズムを観察し、定期的に - まで誘導する」
2009	(3)「妻は腰痛を抱えながら昼夜を問わず ^⑥ - まで介助しているため、…」
2010	(4)「最近、訪問介護員が訪問すると、Fさんの - までの介助を妻はかろうじて行っており、…」
	- (に)誘導
2007	(5)「排泄のリズムを観察し、定期的に - まで誘導する」
2008	(6)「尿失禁があるのでリハビリパンツを使用し、職員が - に誘導している」
2008	(7)「朝食後の - 誘導は、よい排泄習慣につながる」
2010	(8)「 - への誘導は意図的に行わない」
	(場所)や(場所)
2010	(9)「 - や居室が分からなくなることがある」
2009	(10)「廊下や - に手すりを設置することについて話し合う」
	- で(の)排泄
2009	(11)「Mさんは ^① - で排泄することを強く希望し、妻の介助で ^② - まで移動し排泄ができている」
2010	(12)「安心できる言葉かけと態度で誘導し、 - での排泄を継続する」
	その他
2010	(13)「移動は車いすを使用し、日中は - 、夜間はポータブルトイレで介助を受けながら…」
2011	(14)「一人で - に行かないよう伝える」
2007	(15)「日中の排泄は - で行い、…」

(i) の場合は場所そのものの意味となり、助詞の範囲を示す「まで」や方向を示す「に」例示を示す「や」、行為の場所を示す「で」、「誘導」という語が後続する傾向が見られた。「誘導」は1級レベルと難しい語彙である。「誘導」という語は人や物がある地点や状態に導いていく意味で使われ、「トイレ」の語の後に「誘導」という語が伴うことによって、その混種語自体が場所そのものへ行くことの意味として表される。「誘導」という言葉自体は排泄介助(つまり排泄時の手助け)のみでしか出現していない。移動などの介助の場面では「移動」「移乗」と表現されており、「誘導」は使用されることがないため、「トイレ」とセットで示すことが必要である。

(ii) の場合、(1)「 - に間に合わない」というのは、ただ単に場所の意味で使用しているのではなく、行為をすることそのものに意味を置き替えて

級外+2級	6語 (6.25%)	例) ノンレム睡眠、筋力トレーニング
1級	3語 (3.12%)	例) マッサージ、スペース
1級+2級 2級+1級	2語 (2.08%)	例) パジャマ姿 心臓マッサージ
2級	10語 (9.6%)	例) リズム、エネルギー
2級+1級+2級	2語 (2.08%)	例) 訪問介護サービス、カロリー摂取量
2級+2級	2語 (2.08%)	例) 意識レベル、書道サークル
3級	1語 (1.04%)	例) カーテン
4級	9語 (9.37%)	例) トイレ、ベッド、シャワー
4級+1級	2語 (2.08%)	例) トイレ誘導、ベッド柵
その他	18語 (18.75%)	例) ストマ用装具 (級外+3級+級外)

3-2-3 文脈の中で持つ意味と伴われる語の傾向

ここでは出現回数の多かった外来語及び混種語が文脈の中でどのような意味を持ち、また、どのような語とともに使われる傾向があったかについて整理する。さらに、これらの語を日本語教育の現場で扱う際にどのような点に留意すべきかについても検討していきたい。

取り上げる外来語と混種語は、頻出していた1)「トイレ」2)「ベッド」3)「ケア」4)「マット」5)「シャワー」6)「サービス」7)「アセスメント」とこれらに関連する混種語とする。これらを取り上げるのは、実際の介護現場に関わる利用者とのコミュニケーションの仕方や様々な介助に関わる語として優先度が高く、また介護現場での使用率も高いのではないかと判断したためである。

(1) 介護技術における「トイレ」

介護技術で頻出していた「トイレ」は、(i) 場所そのものの意味 (ii) 行為の意味に大別することが出来る。

表5 介護技術
「トイレ」が使用されている例文(i)

年	問題文
	- まで ~
2007	(1)「排泄は - まで行っていたが、間に合わないことが…」

6) サービス	0	1	0	1	0	2
サービス提供責任者	0	0	0	0	1	1
訪問介護サービス	0	0	0	1	2	3
施設サービス	0	1	0	0	0	1
						7
7) アセスメント	3	1	1	0	1	6
再アセスメント	0	1	0	0	0	1
						7
8) ユニット	0	0	7	0	0	7
9) スプーン	0	2	2	1	0	5
10) リズム	3	0	0	0	0	3
レクリエーション	0	3	0	0	0	3

3-2-2 外来語の難易度

介護技術で出現した外来語（混種語を含む）について、旧日本語能力試験に基づいた語彙レベルを測るウェブサイト『リーディング チュウ太』で調査した。結果は表4の通りである。以下、本稿における語彙の難易度は、この旧日本語能力試験の基準に基づくものとする。

級外（34語）が最も多く、また1級2級の語彙は3級4級の語彙よりも多く見られる傾向があった。また、「その他」の中には、混種語の「サービス提供責任者」のように「サービス（2級）＋提供（1級）＋責任（2級）＋者（2級）」と一つの用語に対して3種類の級が含まれているものがあり、難易度の高い語が繋がっていることが分かる。混種語は特に「級外＋△級」が多いため全体的に語彙の難易度が高いという結果になった。級外の語には「留置カテーテル」「ストマ用器具」など、日本人でも普段聞き慣れない語があり、級外用語の理解が問題になると思われる。

表4 介護技術の外来語と混種語の難易度

旧日本語能力試験の語彙レベル	語の数 (%)	例
級外	34語 (35.41%)	例) マットレス、アセスメント
級外＋級外	7語 (7.29%)	例) 口腔ケア、食材リスト

	テレビ、バス、パターン、バランス、ホール、マスク、カーテン、ケースカンファレンス、リフト、ピーナッツ、プリン、ベルト、パスワード、ケース、シャツ、シンク、ロフトランド・クラッチ、再アセスメント、心臓マッサージ、一時救命処置(BLS)ガイドライ
--	---

表3 頻度の高かった外来語のグループ

	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	合計
1) トイレ	3	3	5	4	1	16
トイレ内	0	1	0	0	0	1
トイレ誘導	0	1	0	0	0	1
ポータブルトイレ	4	1	1	3	1	10
トイレレットペーパー	0	0	0	0	1	1
						29
2) ベッド	1	2	3	6	1	13
ベッド上	4	0	0	0	2	6
ベッド柵	1	0	0	0	0	1
						20
3) ケア	0	1	0	0	1	2
ケアプラン	0	1	0	0	0	1
ケアマネージャー	0	0	0	1	0	1
デイケア	2	0	2	0	0	4
口腔ケア	0	1	0	1	0	2
精神的ケア	0	1	0	0	0	1
						11
4) マット	0	0	0	0	1	1
マットレス	0	0	1	1	0	2
バスマット	0	0	0	0	1	1
エアマット	1	0	0	0	1	2
電動エアマット	0	0	1	1	0	2
						8
5) シャワー	2	0	0	0	0	2
シャワー浴	2	0	0	0	0	2
シャワーチェアー	1	0	1	0	1	3
シャワーボトル	1	0	0	0	0	1
						8

あった。「トイレ内」「トイレ誘導」「トイレレットペーパー」「ポータブルトイレ」のように他の語と結び付いた語を合わせると29回になる。次は「ベッド」13回の使用で、こちらも「ベッド上」のような語を合わせると、19回になる。「アセスメント」や「スプーン」等も各回で頻出されていた。なお、「ユニット」は計7回の使用であるが2009年でしか使われていなかった。同様に2回以上使用されているものの、過去5回分の内1回分の中でしか使用されていないものが11語見られた。

「シャワーチェアー」は1回分での出現数が少ないものの、2007・2009・2011年に出現し年ごとの出現率が高い。また、「マット」は「エアマット」や「電動エアマット」「マットレス」等のような語を合わせると合計で7回使用されており、2007～2011年の全てに使用されている。

1)「トイレ」2)「ベッド」3)「ケア」4)「マット」5)「シャワー」6)「サービス」7)「アセスメント」は、これらの外来語と漢語が結び付いた混種語が出現しており、それらと合わせると全体的に頻出していることが分かる。なお、過去5回分の外来語42語の内、1度のみ使用の外来語は計27語と半数以上である。

まず、表2に過去5回分に出現した外来語及び混種語の全てを示し、次に頻度の高かった上位10語とその外来語と漢語が結び付いた混種語のグループを表3に示す。

表2 介護技術で使用されていた外来語及び混種語

10回以上の語	トイレ(16)、ベッド(13)、ポータブルトイレ(10)
5回以上の語	ユニット(7)、アセスメント(6)、ベッド上(6)、スプーン(5)
2回以上の語	デイケア(4)、シャワーチェアー(3)、リズム(3)、レクリエーション(3)、訪問介護サービス(3)、ケア(2)、口腔ケア(2)、電動エアマット(2)、マットレス(2)、エアマット(2)、シャワー(2)、シャワー浴(2)、サービス(2)、ベース(2)、リハビリパンツ(2)、ガーゼ(2)、ソファ(2)、連絡ノート(2)、ハイムリック法(2)、意識レベル(2)、筋力トレーニング(2)
1回のみ	トイレ内、トイレ誘導、トイレレットペーパー、ベッド柵、ケアプラン、ケアマネージャー、サービス提供責任者、精神的ケア、施設サービス、マット、バスマット、シャワーボトル、マッサージ、エネルギー、ショートステイ、タオル、テーブル、プライド、アームレスト、インフルエンザ、カンファレンス、スペース、ズボン、デイルーム、トータルバランス、メンテナンス、カラオケ、

ある。2011年までの国家試験の出題範囲は、社会福祉概論、老人福祉論、障害者福祉論、リハビリテーション論、社会福祉援助技術、レクリエーション活動援助法、老人・障害者の心理、家政学概論、医学一般、精神保健、介護概論、介護技術、形態別介護技術の13科目である^{注5}。

介護技術の科目は他の科目に比べ問題範囲が広く、実際の介護現場に関わる利用者とのコミュニケーションの仕方や様々な介助に関する問題が多いため、対象とした。この科目は介護の基本技法とトイレや風呂場等の各場面における援助についての設問が多く、問いに対して回答群から正しいものを一つ選択する一問一答問題と、介護現場の日常を描いた長文を読解してから後の設問に答える事例問題が出題されている^{注6}。

調査にあたっては以下の方法をとった。

- ①過去5回分の試験問題の文章から外来語（混種語も含める）をピックアップする。
- ②語の数と種類、また旧日本語能力試験を基準とした難易度を調べる。
- ③頻度の高い上位の語に関して、その語の持つ意味、ともに使われる傾向のある語を整理する。

さらにこれらの結果を踏まえ、候補者の外来語理解のために日本語教育側がどのような学習支援を行えるのかについて検討していきたい。

3-2 調査結果

介護技術で使用された外来語の種類は57語、混種39語の計96語であった。表1に過去5回分に出現した両語の数を示す（繰り返し使用されている語も含める）。

表1 2007から2011年の介護技術における外来語と混種語

	2007	2008	2009	2010	2011	合計
外来語	29	24	31	24	18	126
混種語	13	14	9	8	9	53
合計	42	38	40	32	27	179

3-2-1 使用されていた外来語の種類と数

過去5回分で最も多用されていた外来語は「トイレ」で、16回の使用で

りするなどの改正が試験問題に見受けられ、2011年度の看護師国家試験の合格率11.3%（受験者数415名合格者数47名）に比べて介護福祉士試験の合格率が22.6%高い結果となった。しかし、介護福祉士国家試験37.9%の合格率が高いとは言い難い。候補者が解答しやすい試験への改正は今後も考え得るだろうが、専門用語を含めた日本語学習は非常に重要な課題として残っている。

候補者が国家試験を受験する上で必要な語の知識に関する先行研究では、中川（2010）が漢語知識の調査を行っている。中川（2010）は国家試験に対応するだけの漢字力を身につけるには目安で合計550～600字を学ぶ必要があるとし、既存の漢字教材では国家試験に頻出する漢字を必ずしもカバーできていないことを指摘している。

漢語だけでなく国家試験で使用される「外来語」も注目されるようになっており、調査には日本語教育学会「看護と介護の日本語教育」ワーキンググループ（2010）や、遠藤（2012）がある。前者は国家試験の中の外来語を含む介護方法・用具などの介護用語を示す語群の分析を行い、「アームレスト」「アイソトニックゼリー」等は日本語の中の外来語としてあまり一般的でない語が多く、この種の語には原語のスペルをつけることで負担がやや軽減されることを指摘している。また、遠藤（2012）は国家試験の中の日本語の平易化について調査し、外来語について原語と意味が一致しているものについては、原語の併記が望ましいとしている^{注4}。

しかし、これらはいずれも国家試験内容の改正の余地について調査しているものであり、国家試験の中の外来語を試験前の学習の段階でどのようにして候補者に提示できるかを調査しているものではない。国家試験の中で頻出する外来語を中心にして候補者への提示方法を探る調査は、管見の限りでは見受けられない。今後さらにEPAによる候補者は増加すると予想されるため、各科目における外来語の分析や調査は必要となるだろう。そこで本研究では、国家試験の中のある一科目で頻出される外来語及び混種語の種類や難易度について調査し、日本語教育現場においてこれらの語を扱う際にどのような点に留意すべきかについて検討する。

3. 調査：国家試験問題の中の外来語

3-1 対象と方法

調査対象は2007年から2011年までの介護技術という科目の国家試験問題で

使用されるものであるため、ここで明らかになった結果は介護現場での円滑なコミュニケーションのための学習支援にも役立つものになることが期待される。なお、本稿で取り上げる外来語とは外国語由来の語でカタカナ表記のものとし、和語や漢語との組み合わせである混種語も含めることとする。

2. 候補者の介護福祉士国家試験受験について

近年、少子高齢化の深刻化による介護現場の人員不足が問題となっているが、EPAによって2008年からインドネシア人介護福祉士候補者（104名）、2009年からはフィリピン人候補者（217名）が来日し、介護現場で就労している。彼らは来日後、財団法人海外技術者研修協会（AOTS）または独立行政法人国際交流基金（JF）が実施する半年間の日本語研修を受け、その後全国各地の介護施設で働きながら、4年以内に国家試験合格を目指すことになっている^{注3}。国家試験の合格者は就労の継続が可能になり、不合格者は帰国となるが、母国での模擬試験を行う救済措置が取られている。EPAによる候補者の受験機会は、看護師国家試験は滞在期間内に3回あるが、介護福祉士国家試験については1回のみと差し迫った状況にあり、受験においては介護の専門用語が候補者にとって障壁になると考えられる。

三枝（2009）は、国家試験の中の難解な専門用語や言い回しが候補者の負担となることを指摘し、日本語能力を測定するのであれば、どのような日本語が必要か調べた上でそれを測定するテストが用意されるべきで、国家試験の試験問題は別に考えるべきであると示している。また植村（2009）が指摘しているように、「ジョクソウ」「褥瘡^{じょくそう}」「とこずれ」「床ずれ」のように同じ意味の介護用語でも音と表記の仕方が異なる場合があり、そのような膨大な量の学習は候補者たちにとって重い負担である。

2009年2月18日に日本語教育学会大会委員会は、国家試験による候補者の負担を軽減させる試みとして、「漢字ルビを振る」ことや「専門言葉の一部を分かりやすくするなど配慮を求める」といった、厚生労働大臣に当てた要望書を厚生労働省副大臣に手渡した。その結果、初めて行われたEPAの候補者を含む2011年度の国家試験（2012年1月29日実施）で、インドネシア人受験者94名中合格者35名、フィリピン人受験者1名中合格者1名と、合わせて36名の合格（合格率37.9%）が厚生労働省により発表された。実際に、2011年度の国家試験では難しい漢字にルビが振られたり専門用語の一部に英訳を付けた

介護現場で使用される外来語に関する考察

—— 介護福祉士国家試験問題の調査から ——

安 藤 静 香

1. はじめに

日本とフィリピン・インドネシア間で交わされた経済連携協定（Economic Partnership Agreement；EPA^{註1}）によって外国人介護福祉士候補者たちが来日し、現在その多くの人々が介護現場で働いている。彼らは4年間の就労を通して最終的には介護福祉士国家試験（以下、国家試験とする）を受け、合格しなければ帰国を余儀なくされる。そのため、本人も受け入れ側の施設も言語学習やその支援に懸命に取り組んでいるが、国家試験の問題内容は日本人と同様のものであるため、介護現場で働きながら勉強し、合格することは容易なことではない。EPAによって受け入れが開始された外国人看護師候補者に対する対応と同様に、介護福祉士候補者（以下、候補者とする）に対する日本語教育・学習支援は喫緊の課題となっている。

こうした背景を受け、筆者は介護現場で就労する外国人スタッフが抱える日本語学习上の問題点を探るため、予備調査で台湾人介護士に聞き取り調査を行った。そのとき得られたのは「外来語が難しい」という回答であった。台湾のように非英語圏出身の人々が英語など欧米の言語由来の外来語の理解に苦しむことは想像がつきやすい。しかし英語圏の人であっても、日本語化された発音の外来語は易しいものではない。意味が原語とは異なっている場合もあろう。介護の専門用語の中にどのような外来語があり、難しさがあるのか、その実態を調査することは今後さらに増える可能性のある候補者に対する日本語学習支援の一助になると思われる。そこで本稿では過去5回分の国家試験に出題された外来語を取り上げ、どのような語が頻出しているのか、数と種類、旧日本語能力試験^{註2}における難易度を調査する。さらに、その語が文脈の中で持つ意味と伴われる語について傾向を探り、候補者を対象とした日本語教育現場でこれらの語を扱う際にどのような点に留意すべきかについて検討する。試験に出題される外来語は介護現場でもよく

- 感動詞』明治書院
- 小野米一(1996)「移住と方言」『方言の現在』明治書院
- 加藤正信(1988)「方言と共通語」『講座 日本語と日本語教育』明治書院
- 琴 鐘愛(2003)「仙台市方言における談話展開の方法—説明的場面で使用される談話標識から見る—」『文芸研究』155
- (2004)「仙台市方言における談話標識の出現傾向」『国語学研究』43
- (2005)「日本語方言における談話標識の出現傾向—東京方言、大阪方言、仙台方言の比較—」『日本語の研究』1巻2号
- グループジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 佐藤祐希子(2003)「「気づかない方言」の意味論的考察—仙台市における程度副詞的な「イキナリ」—」『国語学』54巻1号
- 佐藤亮一(2005)「地域社会における方言使用の現状と将来」『表現と文体』明治書院
- 田村 昭(1966)『仙台方言集 東北の方言』仙台宝文堂
- 中田祝夫(1983)『古語大辞典』小学館
- 平山輝男(2001)『日本のことばシリーズ3 岩手のことば』明治書院
- 藤原与一(1997)『日本語方言辞書—昭和・平成の生活後—』東京堂出版

手に働きかけながら談話を展開するという仙台方言の特徴が現れている。また、相手との会話をはずませる手段として（無意識に）使用される。そして、同意の「そうだね。」という意味で使用される。

使用する相手は、なんでも話せる友人に特に使用される。次に、兄弟姉妹・年下に使用され、母、父、祖父母など家族が続く。すなわち、心理的に近い間柄の相手に使用される。つまり、会話に同意しないときや心理的に遠い関係、親しくない相手や敬語を使用する相手、自分より目上の人に対しては、方言「ダカラ」を使用すると失礼にあたり、敬語を使用する場合には、方言「ダカラ」は使用しないからである。このように、使用する場面や使用する相手を調べてみると、仙台市方言「ダカラ」は、やはり同意を表す相づち表現で、心理的に近い間柄で使用することができると判断することができる。このことから、心理的に近い間柄では気軽に使用することが出来ると分かったが、その反面、親しくない相手や敬意を表す相手に使用すると、失礼にあたるということも今回の調査で分かった。

以上のことから、仙台市方言「ダカラ」には、以下の使用するための条件があると判断できる。

- ・二人以上で会話＝話しことば
- ・相手の話に同意、同感、同調したとき
- ・会話の返答、またはあいづちをうつとき
- ・相手の会話が共通の事柄（共通認識）となること
- ・話し相手が自分と心理的に近い関係にある場合

今回調査を行ってみて、今まで意識していなかった仙台市方言「ダカラ」について詳しく知ることが出来た。先行研究が少なかったため、自らアンケートを行ったり面接調査を行ったりと大変だったが、仙台市方言である相づち表現「ダカラ」について追認することが出来たと思う。しかし、仙台市方言「ダカラ」について調査を行ったが、男女の比率や高齢層の情報の少なさが数値に影響を与えている可能性もあるのではないかとと思われる。

参考文献

- 『日本国語大辞典 第二版』（2001）第8巻 小学館
 浅野健二(1985)『仙台方言辞典』 東京堂出版
 井出 至(1973)「接続詞とは何か—研究史・学説史の展望—」『品詞別日本文法講座 接続詞・

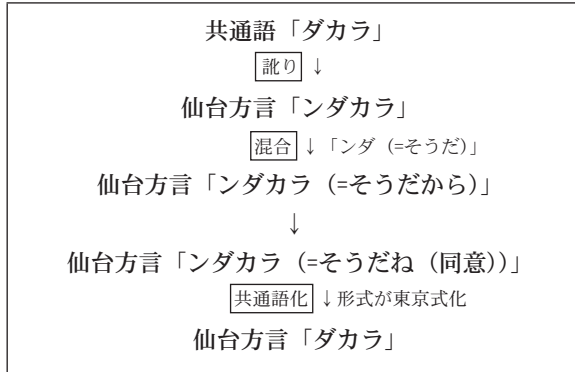


図6 仙台方言「ダカラ」の言語変化

仙台方言「ダカラ」も、もとは、共通語「ダカラ」が訛り、「ンダカラ」というようになる。その後、もともとあった、仙台方言「ンダ (=そうだ)」が混ざり、「ンダカラ (=そうだから)」へと、意味が変化した。ところが、テレビの影響などで東京式化、つまり共通語化していき、意味は変化した「そうだね。」のまま、形のみ共通語「ダカラ」に変化したと考えられるのである。そのため、もともと共通語だったものが様々な派生により方言になったのだが、形式が共通語化したため、方言という意識が持ちにくく、「気づかない方言」となった可能性がある。

おわりに

前章（第4章）により、仙台市で使用される相づち的な「ダカラ」は、共通語の「ダカラ」が基盤となり、様々なことばの影響を受け、言語変化、また方言の共通語化の結果生じたものと結論付けられる。

本稿では、仙台市方言の相づち的な「ダカラ」は、共通語とは異なり、どのような場で使用され、どんな意味が含まれているのかをみてきた。ここでは面接調査やアンケート調査など、以上の結果を総合し、仙台市方言の相づち的な「ダカラ」の特徴を整理したい。

使用する場面は、次のような場面で使用される。それは、最初の発話者の発言に同意・共感・同感・同調したとき、相手のことばが正しいと思ったときである。特に、相手の会話に同意を表す場面で使用される。それは、琴(2005)が提示する相手への情報共有の働きかけ、つまり、情報の共有を積極的に相

の「ダカラ」の使用例と同じであることに気がつく。「ンダカラ」の意味が「ダカラ」と同じ意味であることを考えると、「ンダカラ」から「ダカラ」へと変化したものと考えられる。

宮城県出身の70代と80代の女性2名に面接調査を行ったところ、「んだから」はよく使用しているということであった。例えば、子どもに以前から部屋で走ると転ぶので走らないようにと注意を促していたが、その後、子どもが部屋で走り、やはり転んでしまった場合、「んだから言ったでないの!」と、「んだから」を「そうだから」という意味で使用しているという。しかし、この場合の「ダカラ」は、共通語の接続詞として使用されている話し相手の発言内容や置かれた状況を前提にして、「だからね」と発話的に用いる「だから」を訛ったものと考えられる。そのため、仙台方言として以前からあった、「そうだ。」の意味の「んだ」と「そうだから」の意味の「んだから」が混ざり、「そうだね。」の意味になり、仙台の方言として定着したものではないかと考えられる。使用されていくごとに、「ンダカラ」の「ダカラ」の前の「ン」が、省略され、「ダカラ」になったのではないかと考えられる。そのため、秋田方言の「ンダカラ」は、「ン」が省略されることなく方言として残っていると思われる。

これを踏まえて、共通語の「ダカラ」と仙台市方言の相づち的な「ダカラ」の通時的な関係について考察する。図1と図2を比較してみると、共通語の「ダカラ」と仙台方言の相づち的な「ダカラ」には、共通点と相違点がある。共通点は、どちらも聞き手Bの会話が「だから」から始まること、相違点は、方言「ダカラ」は、同意の場合に使用されており、共通語「ダカラ」に関しては、説明する場面で使用されるということである。また、秋田方言である「ンダカラ」の意味や使用用法から、仙台市方言「ダカラ」と使用用途が同じであることが分かった。

小野(1996)は、方言の世代による言語変化は、1世から2世、または3世までは受け継がれるが、3世または4世では共通語化していくと示している。また、3世または4世で全て共通語化するのではなく、新しくことばを取り入れることで少しずつ変化するとも考えられている。最近では、テレビの影響もあり、若者を中心に東京式化への傾向もみられるという。

小野(1996)に当てはめると、図6のようになる。

信明集「今日のうちに否ともうとも言い果てよ人頼めなる事なせられそ」や、日葡辞書「ウム、 自分に向かって言われたことに同意するとか、それを了解したとかを示す感動詞」のように、承諾を表す語として極めて古いことばとされている。

また、日葡辞書で「ウム」とされているが、「ン」は助動詞「ム」が平安時代中頃からその発音の変化に伴って「ン」と表されるようになったものとされている。

そして、「んだ」は、「フダ」「ホダ」とも言う。そして、強調するときは重ねて使用される。このことから、ダカラを二回続けて使用するときは、内容を盛り上げるためでもあり、強調するためであることが分かる。

その延長線として、「んだから」ということばも使われていた。「んだから」は、そうなの、または、そうそう、私もそう思うという意味として使用され、相手のことばに同意したとき、また、相手のことばが正しいと思ったときに使用されている。

藤原(1996)では、「んだ」は、そうだ。または、そうです。の応答辞とされている。奥州地方では、よく使用され、「ンダ。ンダ。」(そうだ。そうだ。<そうです。そうです。>)のように言われることも多い。これは、老若男女にこの返事ことばがよく聞かれる。山形県西南岸でも、「そうです。」という意味で「ンダ」は使用される。また、近畿南半域でも、「ンダー」というのが聞かれる。徳島県下でも、「ンダ」がよく使用され、鹿児島県薩摩などにも「ンダ」がある。これらは、いわゆる発語ふうのものであって、奥羽地方でのようなダ助動詞に関わるものではない。感声ふうの、いわゆる発語がこのようにおこなわれている。先ほど述べた、鹿児島県薩摩では、あらまあの意として、「んだしたもん」(感動詞)が使用されている。「んだしたもん」は、女性が使用するもので、「んだ」は「私は」という説と感動詞という説がある。秋田県では、宮城県の「ダカラ」と同じく、そうだね。の意として、「ンダカラ」が使用され、秋田県南部の八島地方では、「そうでしょ?」の意味で「ンダンダ ホ。」と使用されている。秋田県の「ンダカラ」の使用例は以下の通りである。

例 A:「今日さびなー (=今日は寒いなあ)」

B:「んだから (=そうだね)」

この秋田県で使用される「ンダカラ」の使用例をみてみると、仙台市方言

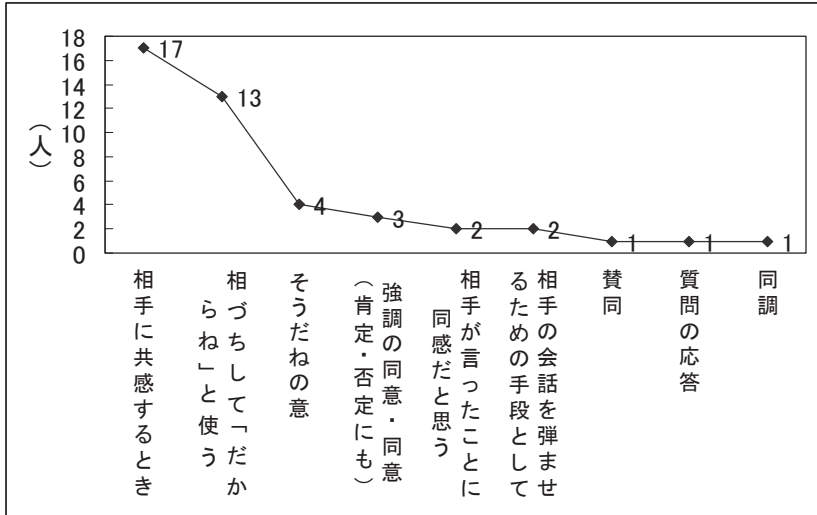


図5 どのように使用しているか

この結果をみると、やはり、相手に共感するときが一番多く使用していることが分かった。次に相づちとして「だからね」として使うとある。また、内容が肯定的・否定的関係なく、相手が言ったことに共感・賛同・同感・同調した際には、方言「ダカラ」を使用していることが分かった。

第4章 仙台方言ダカラの発生

仙台では、昔から『んだ』=そうだ」という相手の言ったことに対して、その通りだという気持ちを表す相づち表現が使われていた。これは隣の県、岩手県でも使用されている。また、そうだねという意で「んだっちゃ」、そうではなくてという意で「んでねくて」などが使用されていた。これら全ては相手が今話していることを指している。仙台方言では、感動詞の「ン」があり、相手の意向を了解、または承諾したことを表す語として使われていた。そのため、了解・承諾を意味する「ン」は、仙台方言では以下のように使用されていた。

- ・んだねや=そうだね
- ・んだね=そうですね
- ・んん=はい
- ・んだから=そうね、だから
- ・んでがすとも=そうですね

「うん」の「ン」は、浅野 (1985) などによると、

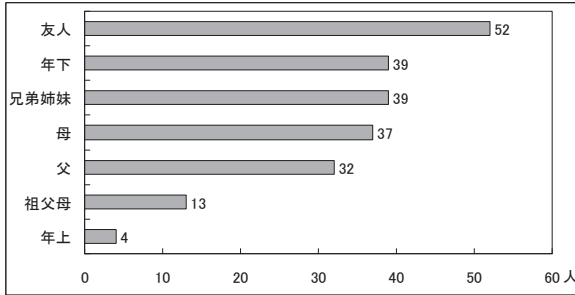


図4
仙台市方言「ダカラ」を使用する相手

この図から、友人への使用が一番多いことが分かる。そして、兄弟姉妹、年下、次に母、父、祖父母、年上という順になっている。兄弟姉妹に関しては、対象者にいるかないかによるが、いる人のほとんどが兄弟姉妹相手に使用していると答えた。両親については、アンケートの対象者の多くが女性だったためか、父親より母親への使用が多かった。祖父母への使用は、兄弟姉妹と同じでいるかないかにもよるが、祖父母へは使用しないと答えた人が多かった。

対象者の多くはあまり意識していないようだが、祖父母と話すときは、方言「だから」ではなく、「そうなの」などの標準語で伝えている。

最後に一番少なかったのは、年上に対してである。項目上、年上としたが、友人のように親しい間柄では、年上でも使用するという意見が多くあった。しかし、それ以外は目上の人に対して方言「ダカラ」を使用すると失礼に当たるといった意見や、敬語を使用する場合は、方言「ダカラ」は使用しないという意見があり、年上である祖父母に対しても同じことが言えるであろう。

これにより、方言「ダカラ」は、気軽に話すことが出来る相手、敬語を使用しない相手、つまり、心理的に近い間柄の相手にのみ使用されることが考えられる。

回答3. 使用する場面

次の質問では、方言「ダカラ」はどういったときに使用しているのかを尋ねた。その結果が図5である。

多く使用しているとし、発話権の取得・維持を明確にしていると述べている。それは、説明的場面における高年齢層話者の使用について考察した結果であった。仙台市方言の説明的場面で使用される「ダカラ」の談話標識とその機能については、以下の通りである。

〈表1〉 仙台市方言の説明的場面で使用される
談話標識「ダカラ」とその機能

代表形	具体的形式	機能
ダカラ	ダ、ダー、ダカ、ダカラ、ダカラー、 ンダカラ、ンダカラー、ダガ、ダガラ、 ンダガラー、ダーラ、ンダラ、ンダーラ、 ダケ、ダッケ	発話権取得 発話権維持

琴（2003）は、仙台市方言の談話展開の方法を明らかにした結果、仙台市方言話者は「ダカラ、ネ、サ、ヤハリ、ホラ、デショー（↑）、ネ（↑）、ヨネ（↑）、ツチャ、ツチャネ（↑）、ウン、エ」などの談話標識を頻繁に用いることによって、発話権の取得や維持をハッキリ表明し、情報の共有を前提にしていることを明示、情報の共有を要求・確認し、かつ、自分が展開する話の世界を相手が理解したかも確かめながら、さらに、そこまでの話を自分の中で整理して自分で確認し、そうすることで相手も納得させながら話を進めるという結論に達した。

そのため、共通語であるにも関わらず、方言と共通語の意味を混合してしまったのは、仙台市方言話者にとって説明的場面において、談話標識「ダカラ」を会話の初めに多く使用していること。また、「ダカラ」を使用することで発話権を取得・維持していることがあげられる。

回答2. 使用する相手

使用の有無で、使用すると答えた人に仙台市方言の相づち的な「ダカラ」を使用する相手はどういう人が質問を行った。筆者が当てたいくつかの項目を選んでもらったが、使用する相手は年代によってはあまり変わらなかった。そのため、どの相手に多く使用するのかをまとめた。その結果が図4である。

では、アンケート調査で行った用例ではどのようなものに言語意識が分かれたのだろうか。

きちんと方言と認識された用例と方言と共通語の意味を混合された用例とは、以下の通りである。また、()内の数字は誤答した人数である。

●正しく方言と認識された用例

1. A: 今日のテスト難しかった
B: だから・・・全然勉強してないのに。
2. A: いい天気だね。
B: だから! 洗濯日和だし!
3. A: 昨日の向井くんカッコよかった!
B: だから! 超やばかった!
4. A: なんでこんなに地震が多いんだろうね。
B: だからね。

●方言と共通語の意味を混合している用例

1. A: 今夜は雨になるそうですね。
B: だから、私、傘を持って来ました。(8)
2. A: あの子とはたった一度会っただけだよ!
B: だから? (5)
3. A: ちょっと、どういうこと?
B: 別に特別のことはないよ。
A: だから、どういうことって聞いているんだよ。(2)
4. A: なんで電話してくれなかったの?
B: だから、時間がなかったんだ! (3)

これらを比較すると、両者の共通点と相違点が見えてくる。

共通点は、どちらもBの会話が「だから」から始まっていることである。このため、「ダカラ」は聞き手の会話の初めに表れるために、後者も方言「ダカラ」であると誤認されたのではないか。次に、相違点は、前者は全て、同意として使用されており、後者に関しては、全て説明する場面で使用されていることが分かる。※後者の1=あやふや表現。

では、なぜ、後者は方言として考えられたのか。

琴(2003)では、情報を効果的に伝えられる談話標識として、仙台方言では、仙台市方言話者が説明的場面において「ダカラ」を他の談話標識よりも

まず、はじめに、方言話者が、方言特有の「ダカラ」に方言という意識（以下、方言意識）を持ち、共通語の「ダカラ」に共通語という意識（以下、共通語意識）を持つのであれば、それぞれの「ダカラ」は異なる文体もしくは場面で使用されるべきものとして意識されている、もしくは、同音異義語として認識されている可能性が考えられる。しかし、もし共通語の用法と方言特有の用法に対する言語意識が一貫しているのであれば、方言話者にとって仙台市方言「ダカラ」は、共通語の用法と方言特有の用法を持つ多義語として認識されているとも考えられる。

今回の調査では、「ダカラ」を用いた共通語の用法の例文（接続詞的な「ダカラ」を代表させた）と方言特有の用法の例文を示した上で、それぞれの用法の「ダカラ」が共通語か方言か尋ねた。調査結果をグラフにしたのが図3である。共通語の用法の「ダカラ」と方言特有の「ダカラ」を同じ言語意識、すなわち共通語か方言かで一括する人の割合を世代別にまとめた。

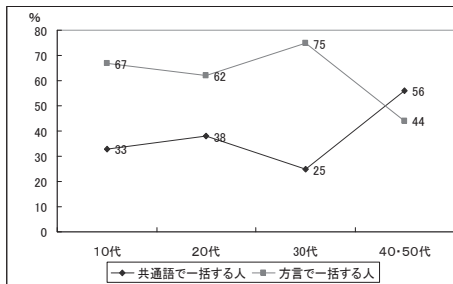


図3 「ダカラ」の言語意識
～共通語の用法と方言特有の
用法を同じ意識でとらえる
人の割合～

年代に関わらず、全体的に見ると、全体の約60%は、共通語か方言かをきちんと区別することが出来ていることがわかった。しかし、残りの約40%は、一部の用例に関しては方言と共通語の意味を混合している。

興味深いのは、方言特有の「ダカラ」と共通語の「ダカラ」を一括する言語意識に世代差があることである。方言という意識で一括する人は、30代が75%であり、この世代が一番方言の用法としてとらえている結果となった。次は10代67%、20代62%と続き、40・50代以上で44%と一気に下がる。それに対し、共通語という意識で一括する人は、10代で33%、20代で38%、30代で25%であり、40・50代以上で56%と一気に上昇する。このような世代差が生じた原因は、方言「ダカラ」の使用の有無によるものではないかと考えられる。

いるのである。そこで会話が終わったり、会話が続きたりする。

応用1では、基本形とほとんど変わらないが、聞き手Bの「ダカラ」の語尾に「ネ」がつく。琴(2003)は、

「ネ」は感動詞、間投助詞、終助詞の三つの品詞にまたがると述べ、それにより、念押し(感)と情報共有確認(感(終))、引き込み(間(終))のどれかに当てはまるが、「ダカラ」は同意を示しているため、ここでは情報共有確認の「ネ」が使用される。それにより、相手の会話に対し、より一層同意を示している。

応用2では、話し手Aは変わらないが、聞き手Bが相手(話し手)との会話を盛り上げるために「ダカラ」を二回続ける。つまり、「ダカラダカラ」となるのである。その後は、基本形と同じく、会話が終わったり、会話が続きたりする。しかし、「ダカラ」を二回使用する応用2では、会話を盛り上げる効果があるので、会話が途切れる場合は少ない。つまり、仙台方言「ダカラ」を使用するパターンは、話し手Aは変わらず、聞き手Bの気持ちにより変わってくる。

図1と図2を比較してみると、共通語「ダカラ」を二人で使用する用法と、方言「ダカラ」の用法の形式が非常によく似ているということが分かる。

では、「ダカラ」の使用者は、方言特有の用法の「ダカラ」や共通語の用法の「ダカラ」に対してどのような意識を持っているのだろうか。

第3章 アンケート(仙台方言ダカラの確認)

仙台方言「ダカラ」について、各年代に分けて簡単なアンケートを実施した。対象は、仙台市に在住、または、通勤、通学している人である。調査の目的は、①方言「ダカラ」と共通語「ダカラ」の言語意識、②方言「ダカラ」を使用する相手、③方言「ダカラ」の使用場面を知るためである。

具体的な質問項目は以下の3項目である。

質問1. 例としてあげた文の「ダカラ」は共通語か方言か

質問2. 誰との会話で主に使用するか(友人、家族など)

質問3. どの場面で使用するか

※女65名、男4名、計69名、内10代31名、20代26名、30代以上15名

アンケート調査の結果を報告する。

回答1. 共通語と方言の区別

か。

筆者が面接調査をした、20代の調査対象者によると、テンションが上がり、気がつくと「ダカラ」を二・三回繰り返しているそうだ。もっと詳しく尋ねてみると、こんな理由が見えてきた。理由としては、「ダカラ」を二・三回使用するの、話し相手との会話を盛り上げるためであるという。「ダカラ」を一回使用するよりも、二回続けて使用するほうが、イントネーションが上がり、会話がはずむ。そのため、「ダカラ」の後に、様々な内容を気軽に入れることができる。このことから、二回続けて使用するほうがテンションを上げたまま、さまざまな内容の会話を盛り込むことができ、二人の会話に弾みと楽しさを与える効果があると考えられる。

以上の分析から、仙台方言「ダカラ」は、相手がいて初めて使用することが可能であることが分かった。つまり、相手がいなければ使用することは出来ないのである。

それを表したのが図2である。

形式	用法
基本形	A : 前文 B : 「(前文に対して同意の場合) ダカラ」
応用 1	A : 前文 B : 「(前文に対して同意の場合) ダカラ」 + 「ネ (情報共有確認)」
応用 2	A : 前文 B : 「(前文に対して同意の場合) ダカラ」 × 2 (テンションが上がっている場合)

図2 仙台市方言「ダカラ」の用法

共通語「ダカラ」と同様に、使用するパターンは二つある。共通語と異なる点は、必ず話し相手がいなければならない点である。仙台方言「ダカラ」は、相手のことばに同意、または相手のことばが正しいと思ったときに使用される。そのため、一人では使用することができない。

基本的な形式では、まず、話し手Aが会話を持ち込むことで始まる。次に、聞き手Bが話し手Aに対し、同意、または正しいと思えば「ダカラ」を用

第2章 仙台方言ダカラの意味用法

仙台市方言における「ダカラ」は、話し相手のあいづちとして使用される。したがって、ここでは、まず、筆者が行った面接調査の結果をもとに、あいづちとしての仙台方言「ダカラ」の意味分析を行う。仙台方言「ダカラ」は、次のように使用される。

- (8) A:「レポート終わってない。ヤバイ。」
 B: (同じく終わっていない、ヤバイと思っていた)
 「だから…全然やってない。」
- (9) A:「テストとっても難しかったね。」
 B: (難しいと思った)「だからね。」
- (10) A:「昨日のテレビ見た?あの人格好良かったよね。」
 B: (格好良いと思った)「だからだから。」

以上の使用例は、最初の発話者の発言に同意・共感・同感・同調した場合に用いられる。琴(2005)によると、仙台市方言は、情報の共有を積極的に相手に働きかけながら談話を展開する方言である。また、談話の開始においても途中においても、常に発話権が自分(話者)にあることをアピールしながら話を進める方言であると指摘されている。その点では、発話者の発言に同意を表すことは談話展開における仙台市方言の典型的なものであるといえる。

(8)の場合、ここでは、同感を表す。

(9)の場合、「ダカラ」の語尾に「ね」が付き、「だからね」となっているが、この語尾「ね」は、他者への働きを表している。また、仙台市方言の「ダカラ」は同意を求めている。

(10)の場合、Aがテレビに映る人を格好良いと思い、Bもそれに対し、格好良いと思ったのだから、Aに対し同感を覚えている。このときBは「ダカラ」を一回だけ使用するだけで良いのだが、「ダカラダカラ」と「ダカラ」を二回繰り返している。これは、繰り返すからといって(8)や(9)と意味が異なるわけではない。

仙台市方言の「ダカラ」は、書き言葉が主要な共通語「ダカラ」とは異なり、話し言葉として使用される。仙台市方言「ダカラ」は話し相手がい始めて使用することができる。では、なぜ仙台市方言「ダカラ」を一回使用するだけで意味が伝わるのに、わざわざ二回つなげて使用する必要があるのだろうか

(6) は、会話の中で主張を表す用法。因果関係を表すのではなく、聞き手と意見の食い違いなどがある場合、「私が言いたいのはこういうことなのだ。」と話し手の発言意図を聞き手に理解させようとするときに用いる。

(7) A：何で電話してくれなかったの。

B：だから、時間がなかったんだ。

(7) は、(6) と同じ主張を表すのだが、ここでは言い訳をする場合の用法として使われている。自分の主張を強く表現するため、押し付けがましく失礼なニュアンスを伴うことが多い。

以上の分析から、共通語「ダカラ」は、前文があって初めて使用することが出来る。それを表したのが図1である。

人数	用法
一人	前文 + 「ダカラ」 + 理由・原因
二人	A：前文 B：「ダカラ」理由・原因

図1 共通語「ダカラ」の用法

パターンとしては、会話の中で、一人で使用するものと二人で文を分けて使用するものの2つがある。

一人で使用する場合、必ず前文 + 「ダカラ」 + 理由・原因となる。二人で使用する場合は、一人目の会話を前文と考えて、二人目がそれに理由・原因を述べる場合に発話的に使用する。最終的に、「ダカラ」を使用することにより、前文に対して理由・原因・根拠・結果・意見を明白にすることができる。

類似の接続詞に、「したがって」「よって」「(それ)ゆえに」などがあるが、「だから」が専ら口頭語として用いられるのに対して、これらは口頭語として用いられるのはほとんど無い。特に、「よって」は表彰状など形式的な公的文书など、客観的で論理的な論証するような文章に用いる。そのため、その場合には「だから」を用いることはない。

て導き出される帰結を述べる場合に用いる。後の文には事実を述べる文ばかりでなく、推量・依頼・勧誘など、様々なタイプの文が続く。丁寧な形としては、「ですから」がある。

また、同じ帰結の形としては次のパターンがある。

(2) A：今夜は雨になるそうですね。

B：だから、私、傘を持って来ました。

これは、会話の場合で、理由と帰結を二人が分担して述べるような用法。(1)では、一人で理由と帰結を述べているが、(2)のように二人が分担しても活用することができる。

(3) A：今日は加藤先生、休講だそうだよ。

B：ああ、そう。だからいくら待っても誰も来ないわけか。

これは、「だから・・・のだ／・・・わけだ」という形で活用されている。ある事実が分かったときに、そこから導き出された当然の結果だと納得する気持ちを伴って現状を表すのに使う。会話の場合は、相手の発言で、原因・理由が明らかになったような場合に用いられ、文末には確認の「ね」や納得を表す「か」を伴う。「だから」の最初の音に強勢がおかれ、強くやや長く発音される。

(4) A：できることは全部やったつもりです。

B：だから、何なんですか。

この「ダカラ」は、(1)の帰結とは異なり、会話の用法で「だから」の後に質問が続く。これは、因果関係を表すのではなく、聞き手の発言を受けた際、「だからあなたは何が言いたいのか」と、相手の発言意図をはっきりさせようと要求する用法。そのため、「それで」「で」で置き換えることができる。

(5) A：たった一度会っただけだよ。

B：だから？

これは、(4)と同じ質問を表している。ところが、発音に関しては上昇調で発音され、後半が省略されることもある。失礼なニュアンスがあるため、この用法では、文末が丁寧体であっても「ですから」は使用しにくい。

(6) A：ちょっと、どういうことですか。

B：別に特別のことはないよ。

A：だから、どういうことって聞いているんだよ。

そのため、様々な地域の人との交流が増えるに当たり、初めて方言だと気付くものがしばしばある。なかでも、共通語と形式が同じものは、方言であってもそれを使用している地域では、なかなか方言だと気づかれない。そのため、佐藤祐子（2003）で指摘されるように、方言話者が方言という意識を持ちにくく、「気付かない方言」や「気付かれにくい方言」など様々な名称で呼ばれている。そのようなものとして、仙台方言の「ダカラ」がある。その「ダカラ」が共通語とは異なり、どのような場で使用され、どんな意味が含まれているのか疑問に思い、とりあげることにした。

第1章 共通語のダカラの意味用法

仙台方言の「ダカラ」の意味についてみる前に、まず共通語の「ダカラ」の意味を把握しておく。「ダカラ」とは、前文の叙述を受けて、それを代行する助動詞「だ」に接続助詞「から」が結合し、更に自立語化し、順接の関係を示す接続語となったものである。

井出（1973）によると、接続詞とは、

単独で一文節をなし、活用がなく、主語にも述語にも修飾語にも被修飾語にもならず、間投助詞以外の助詞をつけないもので、機能的には、前の文、または語の意味を承けて、之を後に来る語や文に続けるものであって、これによって、前の文や語と後の文や語とがどんな関係でつながるかを示すものである

とし、接続語を対等の関係を表すものと従属の関係を表すものの二つに分類している。そして、「ダカラ」は後者の従属の関係を表すものとしている。

接続語における「ダカラ」は、先行の事柄の当然の結果として起こること、または原因・理由になる意を示す。話し相手の発言内容や置かれた状況を前提にして、「だからね・・・」と発話的に用いたり、「だから言ったじゃないか」と自分の発言が話し相手の今の状況を予想して注意を促すように用いたりする。また、共通語「ダカラ」は、書きことばとしても話しことばとしても用いられるが、主に書きことばとして使用されることが多い。共通語の「ダカラ」は以下のように使用される。※使用例はグループジャマシイ（1998）を引用。

（1）踏切で事故があった。だから、学校に遅刻してしまった。

この「だから」は、前の文を原因・理由・根拠として、そこから結果とし

相づち表現「だから」の使い分け

真山 季実子

はじめに

方言は、共通語・標準語に対して、ある地方で用いられる特有のことば、または特定の階層に用いられる独自ののことばである。加藤（1988）が指摘するとおり、現代の地方人は、方言と共通語の二重生活を営んでいる場合が多い。最近では、地方育ちの土着の人でも共通語しか話さない人をかなり見かけるようになり、逆にその方言しか話せないという人はいなくなったようである。そのため、一般の地方人は、改まった場合や他地域の人と話す場合は共通語で、土地の人同士でくつろいで話すときには、方言そのものか、方言的な色彩のある話しぶりをするという人が多くなっている。また、方言と共通語は、外国語同士の切り替えと違って、両方の要素を適当に配合することが可能であって、その調合の度合いの判断が話し手の良識にまかされるため、場面的に割り切れない難しさがあると同時に、その言語自体も境界の難しいものが多い。そのため、佐藤亮一（2005）も指摘するように、現在では、老いも若きも方言と共通語を場面に応じて無意識に、しかも巧みに使い分けている。

方言といっても様々な見方がある。例えば、時間の軸からみても古くから使われているものを「伝統方言」といい、逆に新しく発生したものを「新方言」と呼ぶ。また、共通語との関わりからみても、一般的な方言に対して、共通語との接触によって生じた「中間方言」や「ネオ方言」と呼ばれるものがある。あるいは、使用者の認識の差をもとに、方言らしい方言と、そうとは知らずに使っている「気づかない方言」がある。

方言は共通語ではないため、使用者が気づきやすいものだと思うられるかもしれないが、使用者で普段から意識してことばを使う人はほとんどいない。そのため、使用者がある方言に対して常時使用している場合、気づかれぬものがほとんどである。特に気づかれにくい理由としては、方言の形態があげられる。方言には、共通語にはない形式のものと、共通語にある形式でありながら、その意味や使用法に地域的な違いがみられるものがある。

《二〇一一年度》(平成二十三年)

日本文学科卒業論文題目

『搜神記』を通して見た動物のイメージ……………阿部 珠里
 — 中国の鳥のイメージについて……………
 楊貴妃論……………阿部 沙喜
 日本語教育における漢字指導……………阿部 里美
 漢詩における梅・桃・牡丹・蓬・菊の様相……………安倍 ひろみ
 — 『中国文学歳時記』を中心に……………
 『助六由縁江戸桜』の研究……………安藤 彩香
 介護の日本語……………安藤 静香
 — 介護福祉士国家試験の中の外來語と混種語……………
 明治期の語彙について……………荒川 仁美
 — 「楽天」と「自任」を中心に……………
 東北で使われる気づかない方言の分布について……………馬場 未知瑠
 古代神話のコスモロジー……………千葉 えりか
 — 記紀における此界と異界……………
 『搜神記』にみる動物怪異論……………縮 和香子
 創作「時の旅人」……………遠藤 千幸
 『今とりかへばや』における女君の生き方……………古田 夕子
 創作「千羽鶴」……………古山 沙里
 日韓大学生の歴史認識の相違点……………原田 真奈美

— 朝鮮植民地期の同化政策による日本語教育を中心に……………樋口 真希
 『紫式部日記』の女房批評……………
 — 紫式部が描いた理想の女房像の研究……………
 現代に残る江戸語の変遷……………堀越 梨江
 意見表明の仕方に関する日英対照研究……………岩間 朋子
 『平家物語』における女性たち……………鎌田 里枝
 選択される言葉づかいとしての女性語……………狩野 亜由美
 李白論「自然描写から見る人生観」……………木幡 冬花
 太宰治『女生徒』論……………昆 有香
 『平家物語』における武士像……………小関 エリカ
 創作「空に浮かぶ星を食べた」……………工藤 エリカ
 創作「青の向こう」……………黒澤 紫織
 相づち表現「ダカラ」の使いわけ……………真山 季実子
 文字から見る平安時代の文学……………面谷 万里奈
 『浮世風呂』における会話の文末表現……………三浦 彩
 — 間投助詞・終助詞の比較より……………
 森茉莉『甘い蜜の部屋』論……………三浦 彩佳
 創作「星におやすみ」……………森田 みやか
 樋口一葉を中心にみる当て字の世界……………中尾 早希
 太宰治研究『人間失格』と太宰治の生涯……………中山 由依
 日本語のアスペクト表現……………大森 はる香
 「テイル」の誤用に関する一考察……………大友 亜矢
 『万葉集』にみる高橋虫麻呂……………
 — 東国・伝説歌を中心に……………

宮沢賢治『貝の火』研究……………	小山	みき
ミステリーとしての『本朝桜陰比事』……………	齋藤	まどか
ことばの意味変化「めっちゃくちゃ」について……………	櫻井	未奈
創作「ジオルジュ・メリエスの月世界旅行」……………	櫻井	悠希
説話から見られる中国と日本のつながり……………	三條	利華
芥川龍之介論考『羅生門』成立研究……………	佐々木	未來
女性キャラクターが使用する役割語について……………	佐瀬	仁美
—漫画を中心に—		
『舞姫』の総合研究……………	佐藤	あかね
近松世話物悲劇研究……………	佐藤	宏美
年少者のための日本語教育における		
国語科指導について……………	佐藤	佳那子
—JSLカリキュラムを基盤として—		
日本語教育における敬語―日韓比較……………	佐藤	美帆
創作「さよならをいえるまで」……………	佐藤	渚
会話における終助詞……………	佐藤	菜摘
—教材と発話コーパスを比較して—		
創作「むすびの森」……………	島貫	実季
近松門左衛門―曾根崎心中について……………	鈴木	まり子
太宰治『斜陽』の研究……………	橘	幸希
—滅びの美しさや「道徳革命」を中心に—		
『源氏物語』における物の怪……………	高橋	有紀江
江戸川乱歩研究『押絵と旅する男』を中心に……………	高山	亜未奈
西鶴諸国ばなし―話とその構成に見る魅力……………	豊島	みのり

創作「完璧な水槽」……………	鷲尾	日香里
類義語の意味分析……………	渡辺	絵理
—「我慢」と「辛抱」、「堪える」と「耐える」について—		
『源氏物語』における植物―橘と松の比較……………	渡辺	えりか
創作「美波」……………	渡邊	美里
植民地朝鮮における日本語教育について……………	八重樫	希
創作「即興曲」……………	山形	まどか
創作「雨音が掻き消して」……………	吉尾	藍
芥川龍之介『河童』論―芥川における河童……………	浅野	温子
ヒット広告・ロングセラー商品における		
キャッチコピーの分析……………	国井	真希
—日本語のレトリックにおける観点から—		
司馬遼太郎研究……………	阿部	雅子
宮沢賢治研究……………	青池	沙織
—『どんぐりと山猫』における異世界—		
恩田陸研究『三月は深き紅の淵を』を中心に……………	越後	美咲
創作「月世界逃避行」……………	江刺	宏美
創作「空の五線譜」……………	原	咲恵子
大岡昇平研究……………	早坂	幸
中国人学習者の発音について……………	平塚	愛奈
『源氏物語』における恨み……………	星	菜美
マンガにおけるオノマトペの役割……………	石渡	杏奈
創作「シクラメンな彼女について」……………	板橋	奈美
創作「望まれぬ花嫁」……………	伊東	晴香

『源氏物語』の研究……………	伊藤優香	日本語の中の高文脈性について……………	大友理沙
— 光源氏と左大臣家との関わり—		創作「ひかりとかげ」……………	大槻望
光源氏の栄華と憂愁……………	影山美雪	李白論―詩における月の比喩……………	齊藤奈
宮城県出身大学生の方言使用について……………	加藤亜祐美	小川未明研究……………	笹原詩織
『それから』考―代助と三千年の「幸」― ^{アリウス}	川村南	江戸の恋―『好色五人女』を参考にして―……………	佐々木奈美
『隋唐演義』論……………	川嶋ゆりの	モダリティ表現の誤用についての一考察……………	佐竹愛紗
助動詞について……………	菊地珠理	『搜神記』に見られる蛇・龍について……………	佐藤晴香
— 打消推量「まじ」「じ」の変遷—		『源氏物語』末摘花の役割……………	佐藤恵衣
中国文学における龍について……………	木嶋千尋	敬語の動向―メディアと敬語の関わり―……………	佐藤実紗
小川未明研究……………	橘川貴美	太宰治研究―『津軽』を中心に―……………	佐藤由布紀
親密度と直接的・間接的方略との関係性……………	小出智佳子	配慮表現の使用に関する……………	瀬沼貴恵
— メールと会話を調査対象に—		日本語母語話者と学習者の比較……………	
『破戒』研究―作品の改訂を中心に―……………	今野芙美	万葉女歌論……………	白鳥沙希
風土記神話における神の考察……………	今野裕希	中国文学に見られる蛇の特異性について……………	杉内秀美
光源氏最愛の女君―紫の上―……………	栗田真理絵	— 中国における蛇について—……………	
『世間胸算用』の世界……………	村松佳歩	歌を用いた日本語教育について……………	鈴木綾乃
志賀直哉の研究―『和解』を中心に―……………	西ヶ谷恵夢	森鷗外研究―『堺事件』を中心に―……………	壽松木愛美
宮沢賢治研究―『注文の多い料理店』を中心に―……………	荻原麻衣	日本語母語話者の「あいまい表現」について……………	鈴木美生
外国人生徒を対象とする国語科指導案の作成……………	大泉有香	『源氏物語』翻案小説……………	高橋美希
創作「それでも、私たちが」……………	岡田絵里	上級者向け映像生教材に関する研究……………	高橋みゆき
志賀直哉研究―『濁つた頭』を中心に―……………	小野久美子	万葉挽歌論―その愛の表現……………	高橋悠加
山形県尾花沢市方言の研究……………	大類美幸	若者ことばについて……………	高橋友美子
日本のあいち比較……………	大竹優佳	創作「星詠みの巫女と幸運の星」……………	高久由貴
— 日本語学習者のコミュニケーション能力の向上を目指して—		『源氏物語』―光源氏による藤壺への思慕―……………	高野沙葉子

『よだかの星』にみる宮沢賢治の宗教観……………	武山未佳
近松作品からみる心中……………	富岡和
井上靖論―自伝的小説『しろばんば』を中心に……………	津田麻衣子
断りの表現に関する一考察……………	内山空美子
―日本語教育の観点から―	
鏡花作品における女性と語り……………	渡邊英
―『高野聖』を中心に―	
『源氏物語』における母親……………	渡部久子
―藤壺の宮・六条御息所・明石の君から考える―	
宮沢賢治の研究……………	山内みな子
―『どんぐりと山猫』を中心に―	
日本文学と中国文学にみられる……………	中村美穂
異常出生譚について―弁慶と劉邦を中心に―	
創作「樹洞の土」……………	小松美紅
創作「黒猫びより」……………	五十嵐由季

《二〇二二(平成二十四)年度》

日本文学科講義題目

澤 邊 裕 子

近代文学ⅠB・ⅡB (有島武郎の研究)

日本文学基礎演習A・B

資格個別研修Ⅰ・Ⅱ (自分で学び、資格を

取り、自己を磨く)

資格個別研修A・B (自分で学び、資格を

取り、自己を磨く)

日本語教育概説A・B (日本語教育入門)

日本語教育演習Ⅰ・Ⅱ (外国人の視点から

日本語の文法を捉える)

日本語教育発展演習Ⅰ・Ⅱ (語用論と生き

た日本語の教材化について学び、授業

案・教材案を作成する)

日本語教育実習Ⅱ (日本語学校における教

育実習)

日本語概説A・B

日本文学基礎演習A・B

日本語学演習Ⅰ・Ⅱ (明治時代の翻訳を考

える)

日本語学発展演習Ⅰ・Ⅱ (日本霊異記説話

の変容)

日本文学基礎演習A・B

中国文学発展演習Ⅰ・Ⅱ (『資治通鑑』に

描かれた則天武后・楊貴妃の生涯を読

み解く)

深 澤 昌 夫

日本文化史A・B (古典芸能史入門)

日本文化演習Ⅰ・Ⅱ (近松半二作『奥州安

達原』を読む)

身体表現研究Ⅱ (コミュニケーション能力

の育成)

日本文化発展演習Ⅰ・Ⅱ (西鶴と近松の「お

夏清十郎」「おさん茂兵衛」の読み比べ)

日本文学史A (古代から中世)

日本文学基礎演習A・B

古典文学演習ⅠA・ⅡA (『更級日記』の

講読)

古典文学発展演習ⅠB・ⅡB (『源氏物語』

の研究)

日本文学史B (近代文学史)

日本文学基礎演習A・B

近代文学演習ⅠB・ⅡB (自然主義文学・

反自然主義文学の概要を学ぶ)

近代文学発展演習ⅠA・ⅡA (女性作家の

作品、小林多喜二の文学を読む)

伊 狩 弘

田 中 和 夫

犬飼公之	古典文学発展演習ⅠA・ⅡA (『万葉集』の挽歌、『古今集』の哀傷歌)	佐倉由泰	係で必要な自己表現を實踐で学ぶ 芸能文化論Ⅰ・Ⅱ(十一・十二世紀の奥羽にかかわる文学表現を読み解く)
相澤秀夫	古典文学ⅠA・ⅡA (伝承物語) 国語科教材研究	佐佐木邦子	創作表現研究Ⅲ・Ⅳ(小説を中心に多様な種類の作品を読み、他人の共感を得る文章について考える)
石川秀巳	古典文学ⅠB・ⅡB (『南総里見八犬伝』の解説)	佐藤伸宏	近代文学演習ⅠA・ⅡA(国木田独歩の小説を精読する)
市瀬智紀	対照言語学		比較文学(比較文学とよばれる文学研究の方法の有効性について理解を深める)
程艶春	対照言語学		メディア・編集研究Ⅰ・Ⅱ(メディアコミュニケーション)
梶賀千鶴子	身体表現研究Ⅰ(ミュージカルによる「活きたことば」とその表現方法の研究)	猿渡学	国語科実践研究A・B
小林隆	現代語Ⅰ・Ⅱ(方言の研究)	末永精悦	基礎講読C・D(和歌に対する読解力を養う)
門間純子	書道Ⅲ・Ⅳ	菅基久子	第二言語習得論Ⅰ・Ⅱ(第二言語習得のメカニズムについて学ぶ)
中地文	近代文学ⅠA・ⅡA(児童文学研究)	菅谷奈津恵	第二言語習得論Ⅰ・Ⅱ(第二言語習得のメカニズムについて学ぶ)
中村唯史	表象文化論Ⅰ(ロシア)連の映画の考察 表象文化論Ⅱ(日本の女流マンガの考察)		日本語音声学(日本語教育に必要な音声教育の能力を身につける)
中澤信幸	日本語史Ⅰ・Ⅱ(過去から現在までの日本語と日本語研究の歴史の変遷について)	助川泰彦	日本語教育実習Ⅰ(日本語学校における教育実習の準備として模擬授業を行う)
大西克巳	中国文学演習Ⅰ・Ⅱ(漢文訓読法の習得) 中国文学Ⅰ・Ⅱ(中国知識人「士大夫」の思考様式の一端を明らかにする)	鈴木由利子	民俗学Ⅰ・Ⅱ(地域に伝承された民俗事象のもつ意味を理解する)
大沼郁子	創作表現研究Ⅰ・Ⅱ(児童文学作品を創る)	建部恭子	書道Ⅰ・Ⅱ
押谷祐子	異文化コミュニケーション(異文化・多文化に「共感」できる感性を養う)		
六華亭遊花	日本語コミュニケーションスキル(対人関		

千葉 正昭

基礎講読 G・H (日本近代文学の史的展開を視野に入れながら〔異界〕が描かれた作品を読む)

近代文学発展演習 I B・II B (谷崎潤一郎・

太宰治の作品の精読)

津田 大樹

基礎講読 E・F (『万葉集』講読)

空井 伸一

古典文学演習 I B・II B (井原西鶴『西鶴諸国ばなし』を読む)

氏家 千恵

基礎講読 I・J (日本昔話入門)

渡部 東一郎

基礎講読 A (漢文入門)

基礎講読 B (『史記』の留侯世家を講読す

る)

受贈図書目録(二〇一一年四月～二〇一二年三月)

- 國語國文學報 69 (愛知教育大学国語国文学研究室)
愛知教育大学大学院国語研究 19 (愛知教育大学大学院国語教育専攻)
日本文化論叢 19 (愛知教育大学日本文化研究室)
緑岡詞林 35 (青山学院大学日文院生の会)
青山語文 41 (青山学院大学日本文学会)
紀要 52 (青山学院大学文学部)
跡見学園女子大学人文学フォーラム 9 (跡見学園女子大学文学部人文学科)
国語と教育 36 (大阪教育大学国語教育学会)
学大国文 54 (大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座)
文学史研究 51 (大阪市立大学文学部国語国文学研究室)
阪大近代文学研究 9 (大阪大学近代文学研究会)
国際児童文学館紀要 24 (大阪国際児童文学館)
上方文化研究センター研究年報 12 (大阪府立大学上方文化研究センター)
百舌鳥国文 22 (大阪府立大学日本語文化学会)
言語文化学研究 日本語日本文学編 6 (大阪府立大学人間社会学部言語文化学科)
大妻女子大学紀要 ―文系― 43 (大妻女子大学)
大妻国文 42 (大妻女子大学国文学会)

研究所年報 4 (大妻女子大学草稿・テキスト研究所)
大妻女子大学大学院文学研究科論集 21 (大妻女子大学大学院文学研究科)

- 岡大国文論稿 39 (岡山大学文学部言語国語国文学会)
國文 115 116 (お茶の水女子大学国語国文学会)
帯広大谷短期大学紀要 48 (帯広大谷短期大学)
香川大学国文研究 36 (香川大学国文学会)
学習院大学大学院日本語日本文学 8 (学習院大学大学院人文学部研究科日本語日本文学専攻)
學習院大學國語國文學會誌 54 55 (學習院大學文學部國語國文學會)
歴史文化研究 1 (華頂短期大学歴史文化学科)
金城日本語日本文化 88 (金城学院大学日本語日本文化学会)
上越教育大学国語研究 25 (上越教育大学国語教育学会)
国文学 95 (関西大学国文学会)
日本語教育センター紀要 1 (関西学院大学日本語教育センター)
日本文藝研究 62―2 63―1 (関西学院大学日本文学会)
語文研究 111 112 (九州大学国語国文学会)
国文論藻 10 (京都女子大学)
女子大國文 148 149 (京都女子大学国文学会)
博士学位論文 内容の要旨および審査結果の要旨 10 (京都女子大学大学院)
和漢語文研究 9 (京都府立大学国中文学会)
近畿大学日本語・日本文学 12 13 (近畿大学文学部)

- 熊本県立大学國文研究 56 (熊本県立大学日本語日本文学会)
国語国文学研究 47 (熊本大学文学部国語国文学会)
群馬県立女子大学国文学研究 31 (群馬県立女子大学国語国文学会)
大学院諸究 8 9 (群馬県立女子大学大学院文学研究科)
高知大國文 42 (高知大学国語国文学会)
研究紀要 人文科学・自然科学篇 52 (神戸松蔭女学院大学・神戸松蔭女学院短期大学)
文林 45 (神戸松蔭女子学院大学学術研究会)
神女大國文 22 (神戸女子大学国文学会)
神戸女子大学古典芸能研究センター紀要 4 (神戸女子大学古典芸能研究センター)
日本研究 43 44 (国際日本文化研究センター)
国際日本文学研究集會會議録 34 (国文学研究資料館)
調査研究報告 31 (国文学研究資料館)
古代文学研究 第二次 20 (古代文学研究会)
駒澤國文 48 (駒澤大学文学部国文学研究会)
論輯 39 (駒澤大学大学院国文学会)
財団法人新村出記念財団報 25 (財団法人新村出記念財団)
相模國文 38 (相模女子大学国文学会)
滋賀大國文 49 (滋賀大学教育学部国語研究室内滋賀大國文会)
實踐國文学 80 81 (実践女子大学内実践国文学会)
実践女子大学所蔵優品録 多田基旧蔵内田百閒書簡・写真集 3 (実践女子大学文芸資料研究所)
歌子 19 (実践女子短期大学日本語コミュニケーション学科)
島大國文 33 (島根大学法文学部国文学研究室)
十文字國文 18 (十文字学園女子大学短期大学部国語国文学会)
国文学論集 44 45 (上智大学国文学会)
上智大学国文学科紀要 28 29 (上智大学文学部国文学科)
上智大学国文学科紀要別冊 外国人研究者のための文献案内 (上智大学文学部国文学科)
昭和女子大学大学院日本文学紀要 23 (昭和女子大学)
相山女学院大学研究論集 人文科学篇 社会科学篇 自然科学篇 各43 (相山女学院大学)
成蹊國文 44 (成蹊大学文学部日本文学科)
成城国文学 27 28 (成城大学文学部国文学科研究室内成城国文学会)
成城国文学論集 34 (成城大学大学院文学研究科)
聖心女子大学大学院論集 33 1・2 (聖心女子大学)
清泉女子大学紀要 58 (清泉女子大学)
清泉女子大学人文科学研究所紀要 32 (清泉女子大学人文科学研究所)
日本語日本文学 21 (創価大学日本語日本文学会)
近松研究所紀要 22 (園田学園女子大学近松研究所)
日本文学論集 35 (大東文化大学大学院日本文学専攻院生会)
日本文学研究 51 (大東文化大学日本文学会)
高岡市万葉歴史館紀要 21 (高岡市万葉歴史館)
高岡市万葉歴史館叢書 23 (高岡市万葉歴史館)

千葉大学日本文化論叢 12 (千葉大学文学部日本文化学会)
 中央大學國文 54 55 (中央大學國文學會)
 紀要 言語・文学・文化 107 108 (中央大学文学部)
 博士学位論文 内容の要旨および審査結果の要旨 36 (中央大学)
 (学)
 中国國文學 30 (中央大学国文学会)
 中央大学文学部紀要 45 1-2 46 1-1:2 (中央大学文学部)
 文藝言語研究 文藝編・言語篇 各59 60 61 (筑波大学大学院人文社会科学研究所 文芸・言語専攻)
 国文学論考 47 (都留文科大学国語国文学会)
 鶴見大学紀要 第一部 日本語・日本文学編 48 (鶴見大学)
 鶴見日本文学 15 (鶴見大学)
 帝京日本文化論集 18 (帝京大学日本文化学会)
 山邊道 53 (天理大學國語國文學會)
 湘南文學 45 (東海大学日本文学会)
 学芸 国語国文学 43 (東京学芸大学国語国文学会)
 東京女子大學日本文学 107 (東京女子大学文学部会)
 東京女子大学言語文化研究 19 (東京女子大学言語文化研究会)
 東京大学国文学論集 6 (東京大学国文学研究室)
 同志社女子大学日本語日本文学 23 (同志社女子大学日本語日本文学会)
 国語学研究 50 (東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会)
 言語科学論集 15 (東北大学大学院文学研究科言語科学専攻)

日本文芸論叢 20 (東北大学文学部国文学研究室)
 文藝研究 1 文芸・言語・思想 171 (東北大学文学部国文学研究室内日本文芸研究会)
 日本文芸論稿 34 (東北大学文芸談話会)
 文学論藻 86 (東洋大学文学部日本文学文化学科)
 徳島大学国語国文学 24 (徳島大学国語国文学会)
 徳島文理大学文学論叢 28 (徳島文理大学文学部文学論叢編集委員会)
 徳島文理大学比較文化研究所年報 27 (徳島文理大学比較文化研究所)
 常葉国文 33 (常葉学園短期大学日本語日本文学会)
 並木の里 73 74 (『並木の里』の会)
 奈良女子大学文学部研究教育年報 7 (奈良女子大学文学部)
 奈良大学紀要 国文学研究室編 39 分冊 (奈良大学)
 南山大学日本文化化学科論集 11 (南山大学日本文化化学科)
 日本近代文学館年誌 資料探索 7 (日本近代文学館)
 全国文学館協議会 紀要 4 (日本近代文学館内全国文学館協議会事務局)
 國文目白 50 51 (日本女子大学国語国文学会)
 清心語文 13 (ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会)
 能楽研究所紀要 能楽研究 35 (野上記念法政大学能楽研究所)
 日本文学研究 47 (梅光学院大学日本文学会)
 花園大学日本文学論究 4 (花園大学日本文学会)
 阪神近代文学研究 12 (阪神近代文学会)

- 言語表現研究 28 (兵庫教育大学言語表現学会)
弘学大語文 37 38 (弘前学院大学国語国文学会)
広島女学院大学国語国文学誌 40 41 (広島女学院大学日本文学
学会)
広島女学院大学日本文学 21 (広島女学院大学文学部日本語日
本文学科)
國文學攷 209 210 211 212 (広島大学国語国文学会)
文敎國文學 55 (広島文教女子大学国文学会)
日本語日本文學 36 (輔仁大學外語學院日本語文學系)
玉藻 46 (フェリス女学院大学国文学会)
フェリス女学院文学部紀要 46 (フェリス女学院大学国文学会)
福岡大学 日本語日本文学 20 21 (福岡大学日本語日本文学
会)
藤女子大学国文学雑誌 84 85 (藤女子大学日本語・日本文学
会)
二松學舎大学人文論叢 86 87 (二松學舎大学人文学会)
仏教学部論集 95 (佛教大学仏教学部)
文学部論集 95 (佛教大学文学部)
歴史学部論集 1 (佛教大学歴史学部)
文教大学国文 40 (文教大学国文学会)
そとほり通信 56 (法政大学国文学会)
日本文學誌要 83 84 85 (法政大学国文学会)
法政文芸 7 (法政大学国文学会)
作家特殊研究 研究冊子 絲山秋子 1 (法政大学大学院日本
文学専攻)
日本文学論叢 41 (法政大学大学院日本文学専攻)
旭川国文 21 22 23 (北海道教育大学旭川校国語国文学会)
大和物語研究 4 (北海道教育大学旭川校国文学研究室)
三重大学日本語学文学 22 (三重大学人文学部日本語日本文学
研究室)
武庫川女子大学言語文化研究所年報 22 (武庫川女子大学言語
文化研究所)
武庫川国文 75 (武庫川女子大学国文学会)
日本語日本文学論叢 7 (武庫川女子大学大学院文学研究科)
武蔵野日本文学 20 (武蔵野大学国文学会)
明治大学日本文学 37 (明治大学日本文学研究会)
文芸研究 113 114 115 116 117 (明治大学文学部文芸研究会)
東北文学の世界 19 (盛岡大学文学部日本文学科)
日本文学会誌 23 (盛岡大学日本文学会)
日本文学会学生紀要 19 (盛岡大学日本文学会)
安田女子大学言語文化研究叢書 16 (安田女子大学言語文化研
究所)
国語国文論集 42 (安田女子大学日本文学会)
安田文芸論叢 研究と資料 2 (安田女子大学日本文学会)
横浜国大國語研究 29 (横浜国立大学国語・日本語教育学会)
論究日本文學 94 95 (立命館大学日本文学会)
日本東洋文化論集 17 (琉球大学法文学部)
國文學論叢 57 (龍谷大學國文學會)

- 中國詩文論叢 29 (早稲田大學教育學部中國詩文研究會)
 國文學研究 163 164 165 166 (早稲田大學國文學會)
 中國文學研究 36 (早稲田大學中國文學會)
 早稲田大學中國文學會 集報 36 (早大中國文學會)
 早稲田大學大学院教育學研究科紀要 別冊19—1・2 22 (早稲田大學大学院教育學研究所)
 稲田大學大学院教育學研究所
 文藝と批評 11—3・4 (早大文學部日文研究室内文藝と批評の會)
 平安朝文學研究 復刊20 (早稲田大學文學部平安朝文學研究會)
 古代研究 45 (早稲田古代研究會)
 讀書會論集 34 35 (宮城學院女子大學犬飼研究室讀書會)
 英文學會誌 40 (宮城學院女子大學英文學會)
 宮城學院女子大學研究論文集 112 113 (宮城學院女子大學紀要編集委員會)
 沖繩研究ノート 20 (宮城學院女子大學キリスト教文化研究所)
 キリスト教文化研究所 研究年報 44 (宮城學院女子大學キリスト教文化研究所)
 2011年度創作表現研究IV作品集 (宮城學院女子大學日本文学科)
 2011年度創作表現研究II作品集 (宮城學院女子大學日本文学科)
 宮城學院女子大學発達科学研究 11 (宮城學院女子大學付屬発達科学研究所)
 海程仙台支部より

『む』 34 35 36 37 (海程仙台支部)

日本科学技術振興財団より

『ふれあい文芸(平成二十三年版)』(日本科学技術振興財団)

宮城県連句協会より

『第五回 宮城県連句大会作品集』(宮城県連句大会事務局)

佐々木忠慧先生「遺族様より」

『国文学古筆の考察』佐々木忠慧著(青簡舎)

大沼郁子先生より

『日月8』(日本女子大学児童文学研究 日月会)

秦 恒平さんより

『秦 恒平 湖の本』 5 22 24 107 108 109 110

秦 恒平著(湖の本)

伊狩 弘先生より

『小説の処方箋 小説にみる薬と症状』 大本 泉他編(鼎書房)

日本文学ノート 第四十六号 (通卷六十八号)

犬飼公之教授定年退職記念特集号

目次

犬飼公之教授略歴……………一

著作目録……………三

犬飼先生最終講義 アアラギと万葉——扇畑忠雄論……………一四

光源氏へ視線を向ける夕霧——『源氏物語』における夕霧の役割……………三八

国木田独歩作品における女性——『酒中日記』を中心に……………五〇

西条八十論——童謡における(孤独)……………六八

短歌を取り入れた日本語教材創作の試み……………八三

日本文学科腐女子概論——学生アンケートの結果から……………一〇〇

「蜻蛉」巻、明石中宮への侍従出仕の意義……………一〇〇

——「夢浮橋」巻の先にほの見えるもの……………一〇〇

風景の醸成——室生犀星『哈爾濱詩集』論……………一〇六

正宗白鳥の花袋評……………一三七

『今昔物語集』の宣命書きによる膠着的構造に対する表現制約……………一七〇

『毛詩正義』小雅「魚麗」篇譯注稿……………一八〇

——毛詩注疏 卷第九 九之四 魚麗……………二一五

二〇一〇年度 第七回「創作文学賞」選考結果について……………二四〇

公文協歌舞伎の現状と課題——仙台からの報告……………二四〇

外国人留学生と日本人学生間における協働プロジェクトワーク……………二四〇

——4年間の実践を踏まえての今後の課題……………二四〇

「余程」の使い分けと使用人物の差——「矢張り」を比較対象に……………二四〇

……………二四〇

……………二四〇

……………二四〇

……………二四〇

……………二四〇

……………二四〇

……………二四〇

……………二四〇

……………二四〇

……………二四〇

……………二四〇

彙報

二〇一〇年度 日本文学科卒業論文題目……………三〇六

二〇一一年度 日本文学科講義題目……………三〇九

受贈図書目録(二〇一〇年四月～二〇一一年三月)……………三二二

日本文学ノート 第四十七号(通卷六十九号)

《執筆者紹介》

鷺尾 日香里 (本学二〇一一年度卒業生)

伊狩 弘 (本学教授)

九里 順子 (本学教授)

田島 優 (本学教授)

安藤 静香 (本学二〇一一年度卒業生)

真山 季実子 (本学二〇一一年度卒業生)

編集後記

二〇一一年度の第四六号は東日本大震災のために半年遅れの刊行だったが、本号は旧に復して七月刊行の運びとなった。まずそのことを喜びたい。しかし深刻な被害は依然として宮城・岩手・福島県の三県に残っていて、事態はあまり改善されていないので、俄に喜ぶわけにはいかない。

明治以降、あるいはそれ以前の、遠くは貞観地震も含めて宮城や岩手の海岸に地震と津波の被害が度々あり、明治二十九年の三陸大津波などの被害の凄まじかったことを伝えるのは吉村昭『三陸海岸大津波』（文春文庫など）で、三月十一日の地震以後一躍有名になった。吉村には

『関東大震災』もあり、記録文学として吉村文学は高い達成を示している。吉村は三陸海岸に長年親しみ、下閉伊郡田野畑村には二十年以上通い、その縁で田野畑村には吉村文庫が出来たが、それも昨年の津波ですべて流されたらしい。昭和八年の津波とチリ地震津波の教訓さらに巨大な防潮堤も自然の暴威を完全に食い止めることは出来なかった。吉村は六年前に亡くなった。生きていたらこの度の被害をどう見たであろう。

三陸リアス鉄道の田野畑村の島越駅は宮沢賢治『グスコロブドリの伝記』に因んでカルポナード島越駅という愛称があり、駅前に『春と修羅』詩稿補遺の「発動機船 第二」の詩碑が立っていた。「船長は一人の手下を従へて／手を腰にあて／たうたうたうたうたうたうたうたうたを吹く（中略）沖は一面まっ白で／シリウスの上では／一つの氷雲がしづかに溶け／水平線のままでは／乱積雲の一むらが／水の向ふのなほしみを／わづかに甘く咀嚼する」賢治の目的は、三陸の海の伝馬船の船長やなにかの様子は「スタンレーの探検隊に／丘の上から演説した／二人のコンゴ―土人のやう」な異国風情に映ったのだろうか。「水の向ふのなほしみを／わづかに甘く咀嚼する」という二行などは詩人の才を示して余り有る。この石碑は幸いに流れず残り、駅舎の残骸のなかに佇んでいる。

日本文学を取り巻く環境も津波被害以上に厳しいものがある。経済のグローバル化は津々浦々に及び、前例や慣行はもう通用しない。いろいろのもの押し流す、いわば経済の津波のようである。それを詩に例えらるゝ、文語定型詩はもはや通用しなくなった。とはいえ詩精神の根本はそう変わるものではなく、芭蕉も茂吉も今に生き続けることはならぬ。日文ノートの刊行を機に再び先輩方の営為を思いを致し、初心に立ち返りたいと願うものである。（伊狩）

『日本文学ノート』投稿規定

1. 投稿資格 日本文学会の会員とする。なお、編集委員会の許可を得たものはこの限りではない。
2. 掲載内容 ①論文・研究ノート ②創作作品 ③講演会原稿 ④書評 など
3. その他、編集委員会において必要と認められたものを掲載する。本誌は年一回発行する。
4. 著作権および電子化 著者は、自らの有する著作権のうち複写権および公衆送信権の行使を投稿段階において日本文学会に許諾したものとす。日本文学会は著者より行使を許諾された複写権および公衆送信権により、その著作物を電子化または複製の形態などにより公開することができ。著者は自らの著作を他に転載することができない。ただし、その場合には事前に日本文学会に申し出るものとする。

日本文学ノート 第四十七号（通巻六十九号）

二〇一二年（平成二十四）年七月二〇日 印刷

二〇一二年（平成二十四）年七月二〇日 発行

発行人 星 山 健

発行所 宮城学院女子大学

日本文学会

仙台市青葉区桜ヶ丘九丁目一番一

〒981-8557 ☎〇二二―二七七―六一二一

印刷所 株式会社 東誠社

仙台市宮城野区岡田西町一番五十五号

〒983-0004 ☎〇二二―二八七―三三五一

日本文学ノート 第四十七号 (通卷六十九号)

目次

創作「完璧な水槽」……………	鷺尾 日香里……………	一
田山花袋の自然主義——『生』を中心に……………	伊狩 弘……………	一六
口語自由詩であること——室生犀星晩年の世界……………	九里 順子……………	四六
漢語系感謝表現の源流……………	田島 優……………	七二
二〇一一年度 第八回「創作文学賞」選考結果について……………	日本文学会 創作文学賞委員……………	九六
介護現場で使用される外来語に関する考察 ——介護福祉士国家試験問題の調査から……………	安藤 静香……………	18 (一一八)
相づち表現「だから」の使い分け……………	真山 季実子……………	1 (一三五)
彙報		
二〇一一年度 日本文学科卒業論文題目……………		一三六
二〇一二年度 日本文学科講義題目……………		一四〇
受贈図書目録(二〇一一年四月～二〇一二年三月)……………		一四三

『日本文学ノート』投稿規定